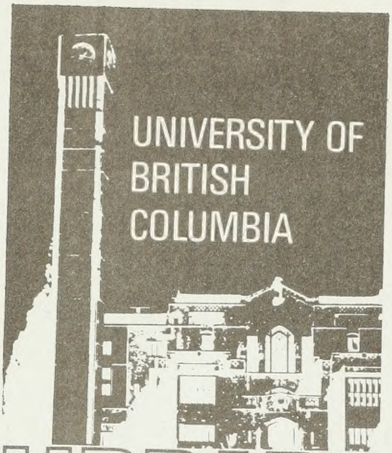
再訂增補

實驗養鷄法

附水禽

UNIVERSITY OF B.C. LIBRARY
SF 492 Y639 1920
Saitei zoho Jikken yokeiho @ A guide boo
3 9424 03235 1915



LIBRARY

S.P. Yamauchi

Ken Yamauchi
CALGARY
1986

A GUIDE BOOK
FOR
BREEDERS OF THE
DOMESTIC HEN.

農學士横山春平著

再訂
增補

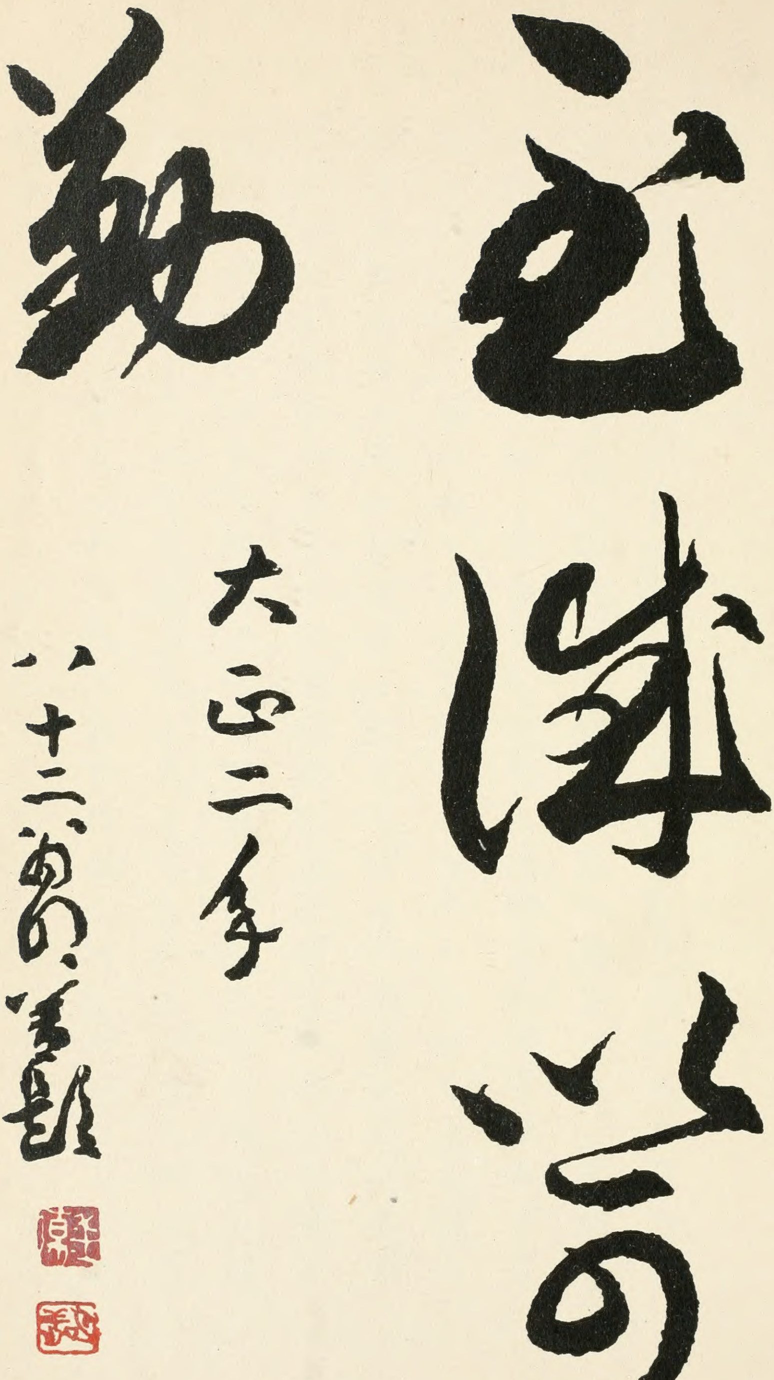
實驗養鷄法

附 水禽

東京 博文館藏版

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of British Columbia Library

http://www.archive.org/details/saiteizohojikken008800


大正二年

序

副業の分布圖は、即ち農家盛衰の分布圖なりといへる眞理に點頭くものは、等しく、副業は一般農民間に於ける、唯一の生命の鍵なりてふ言辭に首肯すべし。見よ、諸物價の暴貴暴騰を來たせる現時の世にありては、彼の中流社會の農民と雖も、猶且つ生活難の苦を免かれ得ざるに反し、寧ろ不思議中の不思議を以て目せられつゝある一般細民の生活法にして、却て往々吾人の杞憂に反する所以のものは、蓋し副業の之を援くる結果にあらずして何ぞや。疑はんと欲するものは、須らく、現今或は模範町村と呼ばれ、或は殷富繁榮を以て稱せられつゝある農業地方を見よ、孰れか副業の盛に行はれつゝある農業地な

らざる。聞く、過般墺國の某學者は、該疑問を解決すべく特に我國に渡來し、鋭意調査考究するところありしが、彼をして、遂に其が疑團を氷解せしめたるものは、實に該副業の後援にありしといふにあらずや。然り、天下幾千萬の細民の窮乏を救ひ、彼等の口舌を乾かざらしむるものは、實に副業の援助にあり。彼等が生命の緒を繫ぎつゝある唯一の鍵は、該副業を措て他に求むべきなし。嗚呼副業なるかな。

副業の種類は極めて多く、其數啻に十百のみならずと雖も、而かも、其施設經營共に容易にして、加ふるに趣味實益並び存し、行ふに時と場所とを撰ふなく、施すに老幼男女を問はざるものに至りては、蓋し養鷄業の右に出づるものなかるべし。近時

養鷄の業大に興り、日に月に盛大に赴き、今や空前の盛況を見んとするに至れる所以のもの、洵に以なしとせず。予は、一般農間に於ける該の趨向を睹て、衷心深く之を喜ぶと共に、一面私かに、時代の要求を充たすに足るべき指針良書の缺損を憹むや久し、この時、偶々知友横山農學士著すところの本書に接す、君や、もと農藝化學を專攻せるの學士なりと雖も、傍ら養鷄に關する趣味深く、理論に實驗に、其造詣の深き、往々世人の意表に出づるものあり。其實驗を經とし、理論を緯とし、諄々說きて至らざるなく、懇々叙して餘すなき本書の內容は、蓋しこれを證して餘りありと信ず。思ふに本邦の養鷄事業は、これにより て更に一段の進步發展を促すに至るべく、予はこの點に於て、

深く本書の發刊を視せずんはあらず。即ち一言叙して序となす。

明治四十一年十月

辱知　方外子

序

私は鷄を養ふことが、茲に二十有餘年である、併しながら私は、養鷄學者ではない、又鷄を養ふを業とする養鷄屋でもない、云はゞ性來の好奇心から始まつたものである。養鷄は、眼白や金絲雀を飼ふのとは少しく其意味が違ふて、生産的のものである。生産的であると云ふ點に於ては、豚を養ふても同じ事であるが、養豚となると、自ら飼養の範圍に制限のあるもので、養鷄程容易く行はれない、又趣味もない。

是に於てか、生産的で、且つ愛翫的であるところの鷄を養ふことは、我等に實益と趣味とを與へる譯で、私が農家と云はず、多くの人に向つて、出來得可くんば鷄をお飼ひなさいと勸め

た所以である。

こんな様なことを、數年前に私は、靜岡新報紙上に「鷄の話」と題して掲げたことがある。すると諸方の熱心家から養鷄に關する質問書が續々とやつて來て一々回答するの煩に堪へなかつたことがある、これが小著を公にするの動機となつたのである。斯樣な譯であるから、此著によつて私は、敢て多くを望む次第ではない、唯斯の如き人達の參考の一端ともならば足れりである。

此著の稿を了ると同時に、私は突然海外に出かけて、遂に校正の機を失した爲に、舊版は尠なからず植字の誤を殘して居つた。今回五版を發行するに際して、此等の個所を訂正し、尙

博文館の囑により水禽の飼養法其他に數十頁を增補して聊内容を改めたつもりである。

大正元年十二月

京北の僑居に於て　著　者　識　す

再訂増補 實驗養鷄法目次

附　養禽

第一章　鷄の沿革及養禽業近世の發達……一
第二章　養鷄創業者の心得……一六
第三章　天然孵化……二三
一　孵化季節の選擇……二三
二　孵伏に適當の雌鷄……二五
三　人爲により母鷄を作る法……二六
四　孵化用卵の選定……二七
五　種卵の保存法及運搬法……三〇
六　孵卵巣の位置と構造……三二
七　母鷄に抱かしむべき卵數……三三
八　抱卵中母鷄の管理……三五

九　檢卵……三八
十　續座法……四三
十一　孵化前後の處置……四四
第四章　天然育雛……四七
一　雛の食餌……四九
二　給餌の方法……五二
三　青菜と水……五三
四　雛の管理と雛箱……五四
五　雛の害蟲の豫防……五七
六　雛の分離と雌雄鑑別……五八
七　母鷄の隔離……六一
第五章　人工孵化……六三
一　人工孵卵の沿革……六三
二　孵卵器の構造……六七

三　孵卵器の利益と其使用法……七〇
第六章　人工育雛……七三
一　假母器……七三
二　假母器の構造……七三
三　假母器の使用法……七五
第七章　鷄の種類……七七
一　鷄の體貌各部の名稱……七七
二　鷄の分類……七七
採卵用種……七九
レグホーン……八〇
アンダルシャン……八五
ミノルカ……八七
スパニシユ……八九
アンコナ……九一

ハンバーグ……九二
レットキャップ……九六
ボーランド……九八
ウーダン……一〇一
ラフレッシ……一〇三
卵肉兼用種……一〇五
プリマウスロック……一〇六
ワイアンドット……一〇九
ドミニック……一一三
オーピングトン……一一四
名古屋コーチン……一一六
肉用種……一一七
コーチン……一一八
ブラマ……一二三

ラングシヤン……一二五
ドーキング……一二八
愛翫用種……一三一
セブライトバンタム……一三二
北京バンタム……一三四
矮鶏……一三四
珠鶏……一三七
長尾鶏……一三八
蜀鶏……一三九
闘鶏……一四〇
暹羅鶏……一四一
第八章　蕃殖……一四三
一　淘汰……一四三
二　遺傳……一四六

三　蕃殖法……一四九
四　種禽の選擇……一五七
第九章　鷄舍……一六〇
一　土地の選定……一六〇
二　鷄舍の構造……一六一
三　棲架と產卵箱……一六五
四　附屬舍……一六六
第十章　鷄の管理……一七〇
一　鷄體及排泄物の檢査……一七二
二　鷄數の點檢と記入……一七四
三　鷄の外敵……一七六
四　時候に對する處置……一七八
五　鷄糞の集收と肥效……一七九
六　運動場の土砂の取換……一八一

七　雌鷄の巣念を去る法……一八二
八　雌雄の配數……一八三
九　鷄の肉冠趾及翼羽の截斷……一八四
十　鷄の砂浴場……一八六
十一　茶園桑園及蜜柑畑の養鷄……一八六

第十一章　鷄の飼養法……一八八

一　放飼鷄の飼料……一八八
二　柵飼鷄の飼料……一八九
三　種禽の飼料……一九三
四　採卵鷄の食餌……一九四
五　換羽期の食餌……一九四
六　青菜の貝殼……一九五
七　給水と鷄の强壯劑……一九六
八　植物質飼料の概說……一九七

九　動物質飼料の概説……二〇四
十　特別飼料……二〇六
十一　餌器……二〇七
十二　給水器……二〇八
第十二章　營養論附飼料成分の表示……二一一
一　動物營養論……二一一
二　飼料の主要成分の分析表……二二〇
第十三章　鷄卵……二三一
一　鷄卵成形の順序……二三一
二　鷄卵の構造……二三二
三　鷄卵孵化の過程……二四一
四　鷄卵の雌雄鑑別……二四三
五　鷄卵の形狀と着色……二四四
六　鷄卵の大小と比重……二四六

七　食用卵の貯藏法……二五一
八　食用卵の運搬法……二五三
第十四章　鷄の去勢術肥膃法……二五五
一　鷄去勢の利……二五五
二　手術……二五六
三　鷄の肥膃法……二六二
第十五章　鷄の疾病と其治療法……二六五
一　傳染病……二六九
一　家禽虎列剌……二六九
二　炭疽病(黑瘡)……二七三
三　結核病……二七四
四　實布的里病……二七六
五　白癬……二七八
六　鷄痘……二七九

七　赤痢病……二八〇
八　魯布……二八〇
二　消化器病……二八二
一　嗉嚢粘膜の加答兒……二八二
二　嗉嚢食滯病……二八三
三　下痢……二八四
四　前胃炎……二八六
五　肝臟病……二八七
三　呼吸器病……二八七
一　氣管支炎……二八七
二　肺炎……二八八
三　感冒……二八九
四　瘂普……二九〇
四　生殖器病……二九一

一 卵秘症……二九一
二 軟卵症……二九二
三 潴卵症……二九三
四 卵巢水腫病……二九四
五 運動器病……二九四
一 脚攣症……二九四
二 僂痲質私……二九五
三 骨折傷……二九六
四 痛風……二九六
五 趾瘤病……二九七
六 捲趾法……二九八
六 神經病……二九九
一 腦卒中……二九九
二 眩暈……二九九

三　痲痺……三〇〇
七　寄生蟲……三〇一
一　條蟲……三〇一
二　疥癬病……三〇二
三　張嘴病……三〇三
四　羽虱……三〇四
五　ワクモ……三〇五
惡癖の矯正……三〇六
一　食卵癖……三〇六
二　食羽癖……三〇八
追補
一　吐綬鷄飼養法……三一〇
二　養鵞法……三一七
三　養鶩法……三三五

目次終

再訂増補 實驗養鷄法

農學士 横山春平著

第一章 鷄の沿革及養禽業近世の發達

鷄は何時の頃から人家に養はるゝ樣になつたものであるか、そして最初に養はれた國は世界の那の邊であるかと云ふことに就ては、何人も俄に攷へ知ることが出來ぬ樣である、然しながら有史以前原人の時代に於て既に鷄族が人間の手に養はれたであろうと云ふことは略察知するに難くないかと思ふ、試に太古の草朦時代を想像したならば、原人は未だ火食の術を知らず、只到る所に天産物を採取して食ひ之によつて生命を繋いで居つたものに相違ない、所謂水草を追ふの民であつたのである。故に氣候溫和土質肥沃にして天然の產物に富むの地は自然に此等游牧

の民を蒐集し漸やく人類の數を増すに至つては自ら生存競爭の余儀なきを見るに至つたに相違ない。既に多少生存競爭を告ぐるに及んでは、先以て山野の果實は次第に減じ野生の禽獸は漸やく獲るに難く、勢ひ稼穡の道を講ずるの止むなきに至つたに相違ない、茲に於て一方に於ては野生の植物を栽培して果穀を收め、他方に於ては野獸野禽を馴致して供給の不足を補ふようになつたものと考へられる。

斯の如く太古原人の世に於て、既に野鳥を馴養したであろうと云ふことは想像し得べき所であるが、果して然りとせば、當初何れかの地域で之の事が行はれ、漸次世界の各國に傳播するに至つたものであろうかどうかと云ふに、之に就ては種々の説が唱へられて居る、其のうちで鷄は最も古く亞細亞洲の西部に養はれ茲處より東西に渡り入つたものであろうと云ふ説が一般に信ぜられて居る様である、支那に於ては、耶蘇紀元の一千年以前に既に鷄を印度より傳へて飼育し漸次之を蕃殖して東、北部の大陸及び島嶼に傳へ、次で西方アッシリア、フェニシヤエジプト等より施て地中海沿岸の諸國に擴まつたと云つて居る。

希臘に於ては耶蘇紀元の凡五六百年前鷄を養つたらしいエジプトでは、昔時一種

の竈を用ひて專ら人工孵化を行ひ、又ジユリアス、シーザーは闘鷄を愛し、盛に其技を闘はしめたと云ふ様な事蹟もある。

我國では、最初支那から輸入したものであるかどうかと云ふに、古く朝鮮から渡來した鷄種はあるらしい、然しながら現に生存せる長尾鷄と云ふ種類になると朝鮮から傳はつたと云ふ說もあるが、少なくとも今日原產地にはない、其他各國に此種類が無い所から見ると、我國固有の馴養禽かも知れぬ、或は太古伊弉諾尊、伊弉冊尊が磤馭島に天降られた當時、野鷄を馴致せられたとも云はれ居るし、又、古事紀舊事紀等の書物を見ると、天照大神が天磐戸にさし籠り給ひしときに、諸神樂を奏し思兼神は長鳴鳥を集めて鳴かしめたと云ふ様なことが書てある、長鳴鳥は即鷄のことで、往昔は此他庭鳥、寢醒鳥、曉告鳥なども云つたものである、此等の鷄が如何なる種類であつたかと云ふことは到底知り難いのであるが、兎に角餘程古くから鷄が養はれて居つたと云ふことは明である。

斯の如く太古の時代より、鷄を飼養せる事蹟ありて、漸次各地に蕃殖せんとするに際し、中世に於ける佛敎の傳來が著しく其の進路を遮つたものである、即其の敎

示によりて殺生肉食を禁じたるが爲め、家畜、家禽を養ふも、目的は其肉を喫ひ生產物を仰ぐに非ずして、牛馬は專ら勞力に使役し、鷄は單に報晨と愛翫との用に止まり、然らざれば偶穀粒の廢棄を救はんが爲に飼養する位に過ぎなかつた、故に殆ど生產力のなくなつた八歳十歳位の鷄を養ふのが、概ね普通で、地方の神社佛閣の境内に行くと、此等老鷄の献納的に放ち捨てられたるものが頗る多く、肉用として屠殺するが如きは先づなかつた位である。

近世に入つてから、稍家禽の肉を食用に供せらるゝに至つたが、之とても魚類の如く、一般の人達の嗜好とまで行かず、依然鷄界は舊慣墨守の有樣であつた、ずつと近代になつて德川時代の明和年間に入つては、世は泰平にして上下に逸樂の夢醒めず、從つて矮鷄、長尾鷄等の雅致ある愛翫鷄か上下の間に流行し、次で暹羅鷄の渡來するに及んでは、之を愛飼して鬪鷄の技を賭することが盛に行はれた、當時和蘭の商船が、長崎に來往して交易を營み、蘭鷄、烏骨鷄、蜀鷄、七面鳥及南京等を齎し、此等の種類も多少は各地に飼養せらるゝ樣になつた。

次で**コーチン**の一種である**クキン**と云ふ鷄が輸入せられて前記の各種或は和

鷄と交雜し、種々雜多の雜種鷄が多少各地に養はれて居つた、今日我國の諸地方に存立する地鷄なるものは、概ね此等の血液を混せざるものはない。

嘉永慶應より明治の初年に於ては、我國の養鷄に殆ど些の變化なく、鷄と云へば地鷄かクキンが關の山で、其の飼養の有樣はと云へば、大抵農家で二三羽の雌と一羽の雄位が無意識に放れてある、居宅の庭の一隅に古蓆などを吊しあるのが、即彼等の宿舍で、糞は二三ヶ月から半年の排泄量が堆積して居る、偶之を取運ぶ際に、腐敗卵が所々に埋まつて居ると云ふ譯で、時として雌鷄が何時ともなしに消へ失せたと思ふと、暫らくの日數の後、緣の下から數羽の雛を引連れて出て來ることがある。之が即當時一般の蕃殖方であつたのだ、孵化したる雛は一部分溜、井等に陷り、一部分外敵の腹に葬られ、極めて僥倖なる一二が生存發育して、又如上の進路を繰返すのである、現今にても尙斯の如き鷄の取扱法は、所々の農家等で見る所であるが、當時にありては殘らず左樣であつた。

只名古屋地方では、維新の際、食祿を失へる士族のある人達が、養鷄の利を以て生計を支へ樣と云ふ考から、クキン地鷄等を種々に交雜し、苦心の結果殆んどコーチ

ンの一内種と見得べき鷄種を作出し、稍盛に飼養したるものである、即今日の名古屋コーチン元祖であるので、漸次愛知縣下に擴まり、明治二十年前に於ては愛知は我國に於ける唯一の養鷄地で、實に今日に於ける本邦養禽の先達であつたのである。

明治二十年前後に於ては、新聞雜誌等にて歐米の養禽業の盛なることが頻に紹介せられ、又泰西の書物により、斯業の實益あることを覺つて、此點に着眼するの士が所々に良種の輸入を企て、稍愛禽家、實業家乃至は山師などの注意を喚起するに至つた、當時横濱に輸入せられたる種類は、**バフコーチン**、淡色**ブラマ**、白色**レグホーン**等が重なるもので、或は卵の大く且多産なることを賞揚し、或は冠の豐大にして容姿の端麗なるに心醉し、或は體格偉大にして一見壯嚴なる容貌に眩惑せられ、忽ちにして鷄界の人心を昏亂せしむる樣になつた、茲に於て京濱の間に幾多の種禽場が勃興し、中には如何はしき巨利を攫取せんと耽々たる輩もあり、種卵は一個一圓二圓、種禽は一番數十圓乃至百圓以上と云ふ具合に、殆んど底止する所を知らぬ位の流行となり、二十三年には東京に日本家禽協會が組織せられて、養禽を奬勵し

て居つた、斯くして二三年の後、産卵鶏中の巨魁と稱せらるゝアンダルシヤンなどが、輸入された時分には、既に之の投機的流行は餘程下火となり、間もなく西洋鶏の名は多數の人々の頭から殆ど忘れられて、レグホーンの卵は、依然七厘五毛に賣るより仕方がなくなつた。併しながら此際の流行は、我國の養鶏界にとりては、決して等閑に附すべきものに非ずして、大なる影響を與へたのである、即為に各種の洋鶏種が各地に傳播し、一般の人達に、洋鶏種中には如何に多産なるもの、如何に大卵なるもの、將た如何に肥肉性のものがあるかと云ふことを知らしめ、次第々々に此等の鶏種が、多く飼養さるゝ様になり、全體の生産の上に大なる増加を見る様になつたのである。

晩近になつては、兵庫縣、千葉縣下等の農家が飼養の有利なるを認め、盛に鶏種の改良に意を注ぎ、千葉縣の如きは今や殆んど愛知を凌駕して優に全國に冠たるの副利を得る程になつた、恰も昨年に於て、農商務省は訓令を發し、農家の副業として養鶏の利の忽諸に附す可からざるを示し、巨額の費を投じて良種を歐米より輸入し、新に種禽場を設置して汎く公衆に種卵種雛の分譲を許すに到り、之と相前後し

て再び家禽の大流行を來し、今尙依然として養鷄の聲は到る所に高まつて居る。而して今日では、全國に於ける養鷄の生產物は、どの位の額に達して居るかと云ふに、未だ正確なる調査が出來て居らぬが、一ヶ年に鷄卵四億八千萬顆、鷄三千八百萬羽、此價格凡そ三千萬圓を消費して居る、此他に年々輸入する上海卵約百萬圓を合算すると、實に少なからぬ金額に上るのである。

飜て歐米に於ける近時の養鷄業の有樣を見るに、先以て歐洲各國に於ける鷄卵消費高の大なるを見たならば、供給が如何に隆でなければならぬと云ふことが、大凡想像せらるゝのである。

國名	鷄卵の平均一人の消費高
英國	八五
米國	八五
獨逸	七五
佛蘭西	七八
伊太利	四七

日本	一三	

右の中で輸入鷄卵の消費額の大なるは、獨逸と英國の二ヶ國で、其の增額の有樣を見ると

國名	一八七一年	一九〇二年
獨逸	一七、一〇三、一〇八弗	二七、三八六、八九八弗
英國	六、一四九、三六八	三〇、七〇二、五七五

即甚だしく增加して居る、故に今日に於ける消費額は、尙一層の多きに達して居らなければならぬ、然らば英國に於ける自國內の生產量は幾何であるかと云ふに前世紀の終に溯つて飼禽の數を調べて見ると

種類	一八八四年	一八八五年
鶖	二、三六八、三九〇羽	二、二〇一、六〇一羽
鷄	一二、三〇三、五三九	一二、四〇一、六〇一

と云ふ數字を示して居る、其後今世紀に入るも數の上に大なる增加を來して居らぬ、之は何故であるかと云ふに、十九世紀に於ける英國工業の發達は勞働賃銀の

上騰を來し、勢ひ集約的農業は衰頽して土地穀類の高價となり、鶏卵は寧ろ他國の輸入に仰ぐ方が經濟的となつて來たからである、一方に於て輸入鶏卵消費額の增加を一人の平均に割り當てゝ見ると

輸入鶏卵の平均一人消費額

一八八二年	二三錢
一八八三	二七
一八八四	二八
一八八八	三一
一八九二	三五
一八九六	四〇
一九〇〇	四九
一九〇二	五四

即逐年大なる割合を以て增加して居る、之等の消費を充す生產國は何處であるかと云ふに、主として佛蘭西、丁抹及白耳義等の諸國で、佛蘭西は家禽國として夙に

歐洲の市場に鷄卵を供給し、白耳義も又屠殺鷄を輸出することに於て頗る名高い、此二國の外近時養禽上長足の進歩をなしたのは即丁抹で、今同國に於ける養禽の生產物の增加を見るに

種類	一八八八年	一八九三年	一八九八年
鷄	四、五九二、〇〇〇	五、八五六、〇〇〇	八、七六七、〇〇〇
鶩	六四四、〇〇〇	七二四、〇〇〇	八〇三、〇〇〇
鵞	二一四、〇〇〇	二三〇、〇〇〇	二一一、〇〇〇
吐綬鷄	三二、〇〇〇	四一、〇〇〇	五二、〇〇〇

即鶩の數は稍減じたるも、他の家禽に於ては著しく增數せることが分る、而して最近に於ける鷄卵及家禽の輸出額は、如何なる數字を示して居るかと云ふに

	一九〇〇年	一九〇二年	一九〇三年
鷄卵の數量	二七、六四六、六七一打	三六、四〇三、一二五打	四二、五〇〇、〇〇〇打
鷄卵の價格	四、八七〇、〇九六弗	六、五二七、九四四弗	八、〇九二、〇〇〇弗
家禽の數	三、八九七	六、〇八一	

家禽の價格　四、六三六磅　七、八七九磅

即年次に增加して來て居る。

丁抹は面積の狹小なる國であるにも拘らず斯の如く、巨額の輸出を爲し得る程養禽業が盛になつたのは、實に同國家禽協會の活動と、雞卵輸出組合の團結とが、最多く其の發達を促したことに歸せざるを得ない、即家禽協會は、千八百八十年頃より少數の有志の間に設立せられ、或は種卵を會員に配布して種類の改善を謀り印刷物を發刊して佛國養禽の熾なる有樣、並に列國鷄卵消費の模樣を報告して、養禽の有利なることを普ねく知らしめ、一方輸出組合に於ては、各自の生産卵を一所に集め、一纏として市場に出し、且各の卵には印章を捺して出所を明にし、若し腐敗卵を出すときは直たに何人の持出した卵であるかと云ふことを一見して鑑別の出來得る樣にし、以て需要國の信用を得るに務めたのである、此の如くにして協會の事業は着々と進捗して行つた、然らば家禽を飼養する有樣はどうであるかと云ふに、凡て副業的の産物である大規模の養鷄場が到る所に勃興して居ると云ふ譯ではないので、只各地の農家が、農業の片手間に鷄を養つて家計の助とし、之が普及

して居る爲に、上記の多產額を總計する樣になるのである、是等の例を見ても、養鷄の利は主として副產的のものであらねばならぬと云ふことが判る。

次に加奈陀及北米合衆國の養禽生產物の有樣を概述せんに、加奈陀に於ける調查を見ると、

種類	一八九一年	一九〇一年
鷄	一二、六九六、七〇一羽	一六、五六二、〇〇〇羽
鵞、鶩、吐綬鷄其他	一、四〇八、〇〇〇	一、三六〇、〇〇〇

即鷄の數は著しく增加せるも、他の家禽は稍減數せるを見る、之れ其收利が鷄に及ばざるに起因す、而して同國の家禽及卵の輸出額は、

	家禽	卵
一八九四年	二〇、三六二弗	五、一四一、五八六弗
一九〇二	二三八、〇四七	一二、〇〇〇、〇〇〇
一九〇四	一四〇、二一四	五、七八〇、三一六

而して此等生產額の最大部は農家の副產的生產による千九百〇一年の調查に

よると一六、五六二、〇〇〇羽の鷄の中約一五、〇〇〇、〇〇〇羽は農家の飼養する所である之を各州の一農家に割り當てると平均數は

地名	平均飼養數
英領コロンビヤ	四三、二二羽
マニトバ	三四、五〇
ニユー、フランスウヰツク	一八、七五
ノバ、スコシヤ	一四、六〇
オンタリオ	五〇、九三
クエベツク	二二、四九
諸屬地	二二、五二

數年を經過せる今日に於ては、尚遙かに飼養數の增加して居る筈である。

北米合衆國の養禽は同國農務省の調査を見るにニユー、イングランド地方と、西部とは自ら飼養の組織が異つて居る、前者にありては、大農場の經營盛に行はれ、養鷄業は主として大規模に專業として營まれる、所謂米國流の養鷄法なるものが世

に紹介されて居る、後者にありては、之に反して一般の農家が、副業的に飼養するので、左程注意されて居らぬ様であるが、實際の生産は遙に前者を超越して居る、西部の諸州で就中養禽の發達せるミッソリー及びカンサスの模樣を見るにミッソリーに於ては、千九百五年の卵肉の發送額は、三千七百五十萬九千七百六弗に達し、而も産額の五分の三以上は、同州内に於て消費されつゝあるが故に、總産額は、優に九千萬弗の上に出づと云はれて居るのである、ミッソリーは穀類を多産することに於ては、國中屈指の州であるのに、其發送全額は二千萬弗の下にありて遠く家禽のそれに劣つて居ると云ふのは、實に奇觀と云はざるを得ぬ、カンサス州はミッソリー州よりも植民の時期遲く、從つて稍大なる土地を有するに拘らず、養禽業は未だミッソリーに及び難い、併しながら千九百五年度の卵、家禽の發送額は、八百五十四萬弗の上に達し、逐年增加の勢を示して居ることは前者と同じ樣である、要するに北米に於ける養鷄業は、他の事業と同じく、輓近に勃興せるものではあるが、一般に亞米利加特流の大袈裟の利益を獲得しつゝある、近時ネブラス、アルカンサス、コロラド及びテキサス等の諸州に於ても、又急瀉の勢を以て養鷄業が發展しつゝある。

第二章　養鷄創業者の心得

養鷄を創めんとせば、其の目的に從つて種々の事情を考へて見なくてはならぬ。例へば副業として少數を養ふ場合と、專業として多數を飼ふのとは、經濟上の要點に就て大に注意を異にしなくてはならぬ、同じく副業と云つても、槪して屋敷の廣い農家と辛ふじて數坪の庭を持つて居ると云ふ樣な町家、又は町附近の比較的接密な家邸とは、養ふ鷄種を異にしなくてはならぬ、又專業と云ふ中にも種禽業は別として採卵に最も利益のある地方もある需肉が比較的利益である場合もある、乃至は卵肉兼用が宜しいとか、育雛專門が一番有利であるとか云ふ樣なことは、皆其の周圍の經濟上の及諸種の有樣如何に關するものである、故に之等に就て充分の注意を拂つてから著手せぬと、大抵は失敗するものであると云ふことを忘れてはならぬ。

何なる目的にしても先以て飼育上の智識を得なくてはならぬ、之れは第一の資本である、多くの事業が左樣である樣に、養鷄も又實際に苦勞をして得た經驗と、そ

して一と通りの學理とを併せ持たないと趣味と實益とが生じて來ない、之の二タ通りの智識を缺いてはならぬ。現今諸所で見受けるのは、無經驗の人達が、只僅かの書物や雜誌を讀んだばかりで、机上の計算では頗る利益があると云ふので、資本を抛つて孵卵器假母器を第一に購入するとか、高價の種禽を取り寄せるとか、立派な鷄舍を新築するとか云ふ具合に大袈裟に始めて居る。凡て人は奇好性の爲に或は熱心の爲に、早く結果を見たいと思ひ、もつと迅速に發展し樣とあせるものであるが養鷄には之が既にいけない。必ずや漸進主義を採り、經驗を積むに從つて次第に擴張して行く方針を取らねばならぬ、之れが即ち養鷄には離る可からざる性質である。

養鷄は報酬漸減律に支配さるゝ所のものである、資本を大きくするに從つて純利の割合は次第に減じて行くものである、尙又大なる養鷄業は小なるものよりも遙かに精密の注意を要する、即ち危險の度が高い、多くの鷄群の内に一二の傳染病鷄を生じても、忽ちにして傳播する事がある、或は偶々氣候の激變に際しては、多くの產卵鷄を斃し、然らずとも產卵を中止し雛體に衰弱を來して不測の損害を招く

樣な事は敢て珍らしくないのである、故に吾人は小養鷄業の普及を常に唱へて居る。試に現今本邦に於て就中養鷄業の發達せる千葉縣、愛知縣等を跋踄するに豫想せるが如き大養鷄場は見當らぬ、けれども縣下至る所の農家が擧つて小養鷄業者であるのである、又佛國は家禽國として夙に世界に有名である、其の首府巴里に於て消費する鷄卵のみにても、一ヶ年二十餘億を算へられ、輸出卵價又一千萬圓を越すと云ふことである、然らば大仕掛の養鷄場が澤山あつて然るかと云ふに、事實は決して左樣でない、勿論大規模の採卵場が多少は經營されて居るにしても、其の大部は農家副業的の産物である婦女子の趣味的閑業の結果であるのである、丁抹が近時家禽國として成功せるも又之の流儀に依つて居る、如此にして初めて建全なる養鷄の發達を見る可きである。

良種の飼養　養鷄家が良種を養ふのと、劣惡種を養ふのとは、利益の上に甚大の影響を及ぼして來る、鷄種の善惡を問はずして飼鷄の利、不利は到底語ることが出來ぬものである、例へば西洋鷄種のあるものに至りては一ヶ年優に三貫目以上の卵を産出し得る、然るに我國在來の退化せる種類では一ヶ年一貫目の卵を産出し

得る力を持つて居らぬ、一貫目の卵價を假りに一圓半とするも一羽に付て三圓以上の差を收利の上に及ぼして來る、卽ち到底同日に語ることは出來ぬのである、然らば前者は飼養の上により大なる費用を要するかと云ふに、格別の差はないのである、只二者の間相異とする所は、多くの家畜が左樣である樣に、良種なる程外界の抵抗に薄弱なることである、之は其筈である、元來自然界に權衡を得て居る狀態を我々人類が、ある一方の性質だけを特に發達せしめたのであるから、取も直さず不具である、卽ち不健全な體質となつて居るのである、故に之の體質に適應する飼養の方法を採らないと、疾病に罹れ、又は劣惡なる種類に退化し易いのである、例へば採卵用種中最も早く卵を產み始めると稱せらるるレグホーン種の樣なものも、育雛に注意しないと四ヶ月內外で產卵さすることは出來ない、肉用鷄中良種と曰はるるバフコーチンでも、不適當な育雛法では一貫匁の體量にも成り難いものである、反之我國在來の地鷄と云ふ樣な種類に至つては、如何に巧に養つてもレグホーンの樣に產卵し難い、コーチン種、ブラマ種の如くには肥大とならぬ、けれども如何に放任しても最早退化せぬ、同時に比較的無病なるものである、要するに良種を良

法で育てると云ふ事が極めて必要である。

農家の副業として飼鷄の有利なる事は、前述の如く其事實を睹る所であるが、其他都鄙と云はず、苟も邸宅内に多少の餘地ある家庭にあつては、一群の鷄を養ふことが、たしかに趣味と實益とを與へる、若し夫れ庭の一隅に一坪の金網鷄舍が設けられたならば、五六羽の牝鷄は此中に遊ぶことが出來、絶へず生ずる所の厨下の殘物を日々新鮮なる玉子と化して食膳に上つて來るのである、人或は家庭の養鷄は彼女の排泄物又は羽虫の爲に如何にも不潔に苦しむと云ふあらば、こは只未だ味はざる豚と鷄と同じに思つて居る皮相の見か、左もなくば極めて横着なる手合の言葉に過ぎぬ、僅かの鷄舍を清潔に保つ位は一擧手の勞である、活發なる鷄兒、優しき牝鷄の世話などは園藝以上の趣味を感ずる、殊に終日室内に籠つて居る婦女子に取つては朝夕の運動としても極めて恰適の伴侶と云はざるを得ない、前から東京目黑の西郷邸、高輪の岩崎家、目白の女子大學の寄宿舍などでは西洋鷄を飼育して居る、其他近頃は諸所の立派な邸宅で養つて居るのを見受ける。

扨愈養鷄を始め様とするには、此迄少しも鷄を手にしたことのない人ならば、肉

用鷄を牝三羽に雄一羽位求めてかゝるが宜しい、何故に肉用鷄がよいかと云ふに、彼等は卵用種程擧動が活潑でないから管理が容易であるし、又一面の性[illegible]で[illegible]へると必ず伏巣する故に、巣に就き次第卵を抱かして行けるのである、此の目的に向つては西洋種ではコーチン、ブラマなどの二年鷄位が宜しい、レグホーン、ミノルカ、アングルシヤンなどの採卵用種は、多くは蟄巣性がないものである、偶々之れ等の雜種或は退化せるものは、伏巣することがあつても多くは不熱心で拙劣であるから母鷄とするのに適して居らぬ、初めから澤山の親鷄を購入して產卵させ樣とするのは極めて損な遣り方である、何故かと云ふに、拾數羽乃至二三十羽の成鷄を買入れ樣としても、一と揃の盛に產卵して居る牝鷄は隨分高價を拂つても、多く人り手放さないものである、之を鳥商から買入れたならば多くは[illegible]の鷄を持つて來るであるから或はレグホーンもあればミノルカの雜種もあるだらうし、一年雛も居れば三年雛も居る、放飼の鷄も居れば柵飼鷄も居ると云ふ有樣で、斯樣な集合鷄は、飼料管理等の變更の爲に、產卵中のものも休產してしまうのみならず、血塗れの爭鬪を初め出して始末に困るものである、數十羽數百羽の鷄を作るにも、是非

自身に孵化して育てたものでなくては利益は得られぬ、最初二三羽の母鷄から一腹二腹宛の雛を育てて行く中には、次第に經驗を積み、雛子の管理法、食餌の給與、病鷄の取扱等に至るまで、其の呼吸を悟つて來る、斯くして一年二年と日を經るに從ひ、次第に羽數を增殖して行くと云ふ方針を採つたならば、必ず失敗を免るるのである孵卵器假母器を使用して、一時に多數の鷄を作成し樣とする人も、同じく母鷄によつて、先づ除々に技術を練習するのが安全である。

第三章　天然孵化

一　孵化季節の選擇

母鷄に卵を孵化さするのを、天然孵化と云ふて、孵卵器を用ひて孵へすのと區別して居る、孵化の順序として第一に注意しなくてはならぬ事は、季節を選擇するにある、三、四月の頃、氣候は日毎に暖氣を增し、水暖く、草は萠へ、花は笑を含んで鳥も囀り初める時分に、殼を破つて飛出した雛子は、非常に勢のよいものである、之れ凡て禽類は、春季に一定の產卵をして雛を育てるもので、鷄の如く人爲淘汰の結果年中時季を選まず產卵をする鳥でも、矢張春先には草玉子と云つて、市場の相場が下落する位に熾に卵を產むものである、之れ體力が旺盛である自然の結果に外ならぬ、故に卵の生活力も强いのである、其の上大氣の溫度は、寒くなし暑くもなし、雛は炎天に一日遊んで居つても蒸れもしなければ、日蔭に餌を漁つて居る中に凍へる樣なこともないのである、一方には又昆蟲其他の小動物を自由に手に入れることが出來て、所謂生餌を與へることに至極都合が宜しい、故に春孵りの雛は、立派な體格

となるものである、種禽又は品評會出品用の鷄を得んとするには、早春に孵化したものが成績が宜しい、春に次では秋であるが、然しながら夏の終りから秋にかけて鷄の換羽期に入つては、鷄體の衰弱の爲に、卵の生活力が比較的弱く、從つて不熟卵多く又雛も虛弱勝である、其上日増に冷氣に入ると共に、健雛の發育も徐々である。故に秋孵りは體格は比較的矮小となり、又早秋に孵化したるものは、疱瘡に罹り易い不利がある、其他の時季即嚴冬極暑の候にありては何れも短所が多い、盛夏に孵化した場合には、雛の成長の度合に此季節が最も迅速なものではあるが、併しながら夜間の取扱に熟練しないと蒸れて斃れ、又は著しく健康を害するものである、且動もすると下痢、消化不良等を起して、孵化後二三週間位の中に衰弱の爲に斃れ、或は羽虫に苦められ、或は蚊を防禦する等要するに勞多くして結果は宜しくないものである、冬寒の育雛は、寒氣の爲に之又斃れ易い、併しながら注意して防寒をしたならば、成鷄は冬孵が就中壯健なものである、且我國の樣に夏期に卵價の騰貴する國では、一月に孵へすと六、七月の頃から產卵を初めて至極都合が宜しい、此外梅雨の期に入つては全然孵化を止めなくてはならぬ、成るべく春は三、四、五月秋は九、十、

十一月の中に孵化を終る樣に、心掛るのが安全である。

二　孵伏に適當の雌鷄

母鷄として必要なる條件は大凡左の如きものである。

一　伏巣の念深く、抱卵中猥りに巣外に出でざるもの。

二　羽毛の澤山なるもの。

三　性質溫良にして慈愛心に富み、雛を懇切に保護するもの。

四　體の過大なるものは、多數の抱卵には堪ゆるも、往々種卵を破損する恐あり、又餘りに小なるものは、安全なるも抱卵の數は從て少なし、先づ四百匁内外の體量を適當と見るを得べし。

五　成るべく前以て一度雛を育てし經驗を有すること、敢て何れの種類とは限らざるも、前記の資格を備へて居らなければ良母鷄と云へぬのである、余の經驗では、西洋鷄の中では、コーチン種が蟄巣の念深く、羽毛も密生して居る爲に稍小形なるものを選ぶと之がよい。併しながら先天的に母鷄として最も巧な

るは烏骨鷄で、貴重の種卵を孵化する場合には、經驗のある此種に托することが最も安全である、我國在來の地鷄、矮鷄等にも又巧なるものが多い。

三　人爲により母鷄を作る法

雌鷄が、ある期間の産卵の後に蟄巣すると云ふことに就ては、生理上に種々の說が唱へられて居るが、要するに彼等が子孫を繁殖する先天的の本能に外ならぬので鶴の雌は、一期に二顆の卵を産み終つて、之を孵化するものであるが、若し此中一顆が破損した場合には、尙一顆を産んで蟄巣するものであると云ふことである、蟄巣性の牝鷄も日々卵を取去るときは、續く限り産卵して最後に巣に就くものである、蟄巣は必ず産卵の後に來るものであるから、巣鷄を作らんには、先以て營養をよくし、産卵を初めしめねばならぬ、而して巣は、成るべく人の出入に遠ざかりたる靜かなる場所に設け、日々の産卵は、其儘巣の中に止め置くか、又は摸造卵と交換し、常に七八顆以上の顆數を、巣中に置くときには早く孵卵の念を發するものである、而して蟄巣の念が盛になるまでは、全く放任して置くが宜しい。

四　孵化用卵の選定

善き苗を得んとする場合に、善良なる種子を選擇せなければならぬと同じく、良雛を得んとせば、健善なる種卵を選まなくてはならぬ、孵化せし雛の强壯なると否とは、種々の原因によるものであるが、其中最も關係の深いのは、卵子の生活力である、今種卵選定の要を列擧すると

一　種卵は新鮮なるを貴ぶ。

植物の種子が生活力を持つが如くに、有精の鷄卵はある時の間は孵化力を有して居る、種子は數年數十年乃至百年の永き間、生命を保つものであるが、鷄卵は數週の中に大低生活力を失ふに至るものである、之の生活力即孵化力は産出後次第に力を減じて行くもので、新鮮なる種卵程强壯な雛が孵出する道理である、自家にて種卵を得られる場合には任意であるが、遠隔の場所より取寄せ、又は他より買入れる等の場合には、已むを得ず日數の經過した種卵を用ひなければならぬ、此の如き際に取扱を丁寧にすれば、産出後二週間以内の孵化力は安全である、三週間、四週間

長きは一ヶ月後に於て尚孵化したる例はあるも、勿論常に望み得る所ではない。

二　外形の不整なる卵を避けよ。

鷄卵の外形は、鷄種により又個性によりて多少は異なるものであるが、一般に一方の稍尖りたる楕圓形即ち所謂玉子形をなして居る、然しながら時として牝鷄は、卵殼の一ヶ所にクビレを生じたるもの、或は凸起を有するもの、又は殆んど圓形なるもの、特別に細長きもの、卵殼の一部薄きもの等を産むことがある、之は多く鷄體の營養不良、疾病等の原因によつて來るものであるから、種卵として用ひ難いものである。

三　餘り肥盈せる鷄の産みたる卵は、孵化力弱し。

四　雌雄の若き時産みたる卵は、種卵として適當ならず。

初産の卵は、小さく輕い、卵數を增すに從ひ漸次大きくなるものである、一年鷄よりも二年鷄、二年鷄よりも三年鷄の産んだ卵は大きい、而して老鷄は又小さくなるものである、初産より數個を除いたならば、種卵として甚だしく差支はないものであるが、體格の完備せる二歲後の大卵を選む方が勿論良好なる子孫を得るのであ

る、五年以後の老鷄は、交尾力を減ずる爲に餘り望ましくない。

五　初期と末期との卵は、之を避けよ。

一期の產卵中初めの卵と、產み終りの卵は、共に孵化力が充分でないから種卵として採用することは出來ぬ。

六　一種類の卵を選むべきこと。

鷄卵の孵化に要する日數は、大低二十一日であるが、鷄種によりて多少の遲速がある、又雛は、種類に依りて著しく成長の速なるものと發育の不良なるものとがある、例へば**レグホーン**、**プリマウスロック**の如きは、前者に屬し、**バンバーク**、**ボーランド**の如きは、後者に屬する、故に若しも異種の種卵を一腹の中に交へたならば、同時に孵化しない不便がある、尙孵化後弱き種類の雛は、强き種類の雛に壓倒せられて、發育は益不良となる、結局一腹の中には、同種類の卵を入れなければならぬこととなる。

七　一腹の種卵は大さを一揃とすること。

十五匁の卵と二十一匁の卵とを、一腹の中に入れたならば、母鷄は非常に溫め惡

い、又温熱の供給が一樣に行かぬ、其上破損し易い不利がある、故に成るべく大さを揃へなくてはならぬ。

五　種卵の保存法及び運搬法

種卵の保存に注意すべきことは、云ふまでもなく重要である、生活卵は僅かな外界の影響の爲に死滅することがあるから、務めて之を避けなくてはならぬ。

一　温度の激變を避けよ。
二　振動を傳へざること。
三　空氣の流通ある塲所に置くこと。
四　卵を互に相接觸せしめぬこと。

嚴寒の爲に生活卵は容易に死ぬもので、寒天早朝に際して產んだ卵は、孵化力を缺くものである、之れ即雌鷄が產卵を終へて巢箱を出るや、卵は俄かに寒冷なる大氣に觸れて凍傷の爲に生活力を失ふのである、之例は、每早朝に產卵する家鴨に於ては常に見る所である、故に斯の如き塲合は注意して直ちに卵を集め、温暖なる

場所に貯へなくてはならぬ、又高温に放置することも避けなくてはならぬ、要するに室温に保つことが宜しい、もつと嚴密に曰はば、華氏の五十度內外が適温である、種卵を貯へるのには、引出の中に籾殻を布き、大端を下にして安置するが宜しい、武力鑵の如き密閉器に入るゝは、勿論害のあるものである。

遠所に種卵を送る場合には、運搬法に餘程念を入れないと孵化力を失ひ易いものである、數里位の遠さならば、籾殻を入れたる容器に幷べ提げて歩くに優つたことはないのであるが、汽車汽船等の便を藉らなくてはならぬ土地にありては、相應の包裝を施さなくてはならぬ、予は多數の實驗上次の簡單なる荷作方によつて常に好結果を見て居る、先づ新聞紙を八つ位の小片に切り、之を以て種卵を柔かく巻き然る後西洋鉋屑、或は細き乾草を以て拳大に之を包みて、兩側に小孔を穿ちたる木箱或はボール箱の中に幷べ、個々の間隙には、動搖せざる樣に乾草を詰め、一箱の中には一層幷びとするのである、斯くして蓋を被ひ細繩にて括るときには、振動を傳へること最も少なく、又互の衝突の爲に破損する樣な憂もない、汽車汽船の積卸を特別取扱とせば、數百哩の遠きに送るも、殆ど孵化の歩合に差を生せぬ位であ

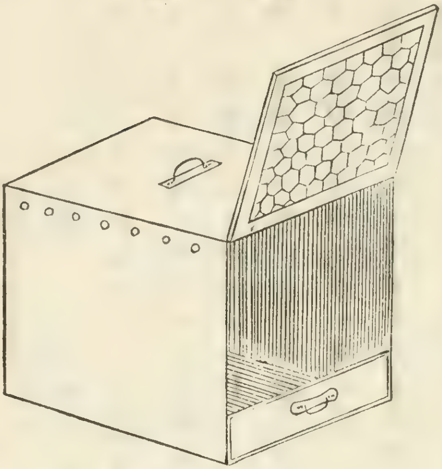
る、只小包郵便にて差出すときは、[illegible]して不結果なるが故に、已むを得ざる土地の外は此便に依らぬのが得策である。

六　孵卵巣の位置と構造

伏巣鷄は至つて物に驚き易く、從つて安靜を欲するものなるが故に、孵卵巣は、成るべく薄暗くして外物の近づかざる靜かな場所に設けるのが宜しい、若し他の鷄か之に近づくとか、附近が餘り騷擾なる等の場合には、母鷄は、安心を得ずして離巣することが屡ある、又餘りに寒冷なる所、日光の直射する等、溫度の激變を生じ易き場所は避けなくてはならぬ、孵卵室として專用の建物を設けるにしても、右等の點に注意すればよいのであるが、少數の孵化には脇屋の庭などを利用するのが便利である、多く農家などでは、作業の邪魔にならぬ爲に、高き位置に巣を吊し、又は殊更に高き臺の上に巣を載せる等のことをなすものであるが、之は直接地上に置く方が宜しい、之れ一は卵の孵化中には絶へず水分を要するもので、若しも巣箱が地に接する場合には、卵は自然に濕氣を吸收する利があり、他方では母鷄が出入の際便

利である、巣箱は普通の蜜柑箱よりも稍大きく、優に鶏體を入れ得るものならば、桶にても又は樽の類にても更に差支はないのである、只餘り深くすると母鶏が卵の上に飛下る恐がある、箱の中には乾草或は藁屑の類を適宜の厚さに入れ、稍凹形となし、此上に柔かき藁蓆の類を布けば宜しい、只注意すべきは、一度此目的に使用せしものは、羽虫を發生し易きが故に、硫黄粉を散撒して消毒するか、又は新らしきものと代へるのが宜しい。

第一圖



孵卵器

七　母鶏に抱かしむべき卵數

一腹に何個の種卵を入るゝが適當であるかと云ふことは、場合によつて適宜に增減すべきもので、よく次の諸條を酙酌して定めなくてはならぬ。

一　母鷄の大小により增減すべし、

大なる母鷄は、小なる體格のそれよりも多く抱卵し得るのは勿論であるが、只體重に比例して卵數を增す譯には行かぬ、四百匁の牝に十五匁の卵八個を抱かしたならば、六百匁の雌には十個位が適當である、併し絕體數は多からんよりは寧ろ少なきに失した方が有利である、其他

二　長き羽毛の密生せる牝鷄には、然らざるものよりも一二個を增し得、

三　氣候により斟酌すべし、

四　母鷄の巧拙により增減すべし、

五　種卵の大小により異にす、

夏期十顆を抱き得る母鷄も、冬期は七顆乃至八顆に減じなくてはならぬ、又巧なる母鷄は、拙なきものよりも多く托することが出來る、大なる母鷄でも十二個位に止めるのが宜しい、單に經濟上の考から、強て澤山の卵を抱かしむるときは失敗を招き易い、餘り多くの卵は、母鷄にとりては取扱が一樣に行かぬ、又溫熱の供給も不充分である爲に發生に長時間を要し、雛は雛化しても虛弱を免れぬのである、故に

少數を抱卵さするとも健全なる雛子を得る方が結局得策である、

八　抱卵中母鷄の管理

偖て愈巣箱、種卵等の整理が整つたらば、巣鷄を之に移す可き順序であるが、之には夜間靜に取扱はないと間々離巣するものである、而して直ちに目的の種卵を入れるのは危險であるから、先づ模造卵又は空玉子數個を入れ、一二日を經過して後全たく巣鷄か離巣せぬことを慥めたならば、茲に於て靜に種卵と取り換へるのが安全である、此際若しも種卵に糞などが附着して居つたならば、温湯を布に浸し之を以て靜に拭い去るのがよい、而して何日何時何種類何顆入卵と箱の横等成るべく見易き場所に、紙に書して貼付することが必要である、斯の如き瑣細な注意にても之を怠るときには、檢卵孵化等の時日を誤りなどして意外の損を招くものである、

熟練せる母鷄は全然放任するも巧に孵化の任を果すものであるが、母鷄の巧拙によつて夫々多少の手數と注意とを與うることは又必要である、初心者は徹頭徹

尾干渉したがるものであるが、之は極めて宜しからざることで、不自然なる手當は全然止めなくてはならぬ、今管理上二三の順序を記して見ると

母鷄は毎朝餘り早くなく、即ち九時頃に巣より出し、伏籠の中に入れて餌水を與へるのである、此際母鷄は、羽翼の下に卵を入れ居ることあるが故に、知らずして兩翼の上より抱き伏籠の中に入るゝときは、地上に落して破ることが往々ある、故に巣中の卵數を數へてから出さなくてはならぬ、或は外敵の爲に卵を奪はれ、又は糞の爲に卵を汚す等のこともあるものなれば、其都度卵數を檢し、異狀なきやを注意しなくてはならぬ、脱糞の爲或は他の卵の破壞の爲に汚れたるものは、微温湯を以て丁寧に洗ひ落さば差支ないのである。

伏籠には、豫め餌青菜水を備へ、母鷄を之に入れたならば、決して他鷄を附近に近づけてはならぬ、然らざれば母鷄は安心して充分に食を攝らぬものである、母鷄の食餌は敢て特殊のものを要求しないのであるが、白米だとか、殘飯のみを連續して與へてはならぬ、其理は後章に述べてある、煉餌は强ち不可ならざるも、餘り淡泊にして消化の容易なるものは、翌朝未明より飢餓を覺へて巣を出て、或は外に出で雛

きときは巣中に佇立して卵を冷却すると云ふ様なことがあるので、予の經驗では穀粒卽玄米蕎麥の類を散布して與ふるのがよいと思ふ、而して一晝夜の食を一時に攝取するが故に、中々大食をする、又土甲其他、生餌を、日々少量宛與うるのが最もよい、忠實なる母鷄は、盛夏の頃には往々衰弱して死に至るまで熱心に孵化に従事することがある、故に管理者は注意して彼女の營養を保護せねばならぬ、食事後は、砂浴をなして羽虫の豫防をなすことは雌鷄の最好む所なるが故に、豫め砂浴場を作り、茲に少時間遊ばしむることも必要である、尚羽虫の豫防としては、時々母鷄の脊上に除虫菊の細粉を振りかけることが頗る有効である、而して此間に必ず糞をするもので脱糞の後巣に歸らしむるのである、此時母鷄を抱て巣に入るゝときは、誤て卵を破損することがある故に、巣の附近に置き、徐々に追ひ入るゝのが安全である、母鷄が巣に歸つた後卵を腹の外に出して居ることがあるから、一度檢めて斯様なときには、靜に腹下に押し入れるがよい、母鷄の外出時間は、十五分より二十分位が適度であるが、冬は成るべく短かくしなくてはならぬし、暖かき時節には稍永きも差支はないのである、一日に一回新鮮なる空氣に露すことは必要であるから、

母鷄の外出中は、卵を放置して差支ないので、殊更に寒冷を恐れて綿、布片等を被ふ必要を認めないのである、毎朝夕に卵を反轉して彼是場所を交換することを、必要なりと唱ふるものあるも、母鷄は時々嘴を以て卵の位置を動かすが故に、強て管理者の手を要しないのである、又抱卵中二三回水分を供給する目的にて溫湯を霧吹く事が有効なりと說くものもあれど、雛鷄の腹下より水分を蒸發するが故に、自然に卵は適度の濕氣を得て居るので、殊に巢箱が地面に接するときは其儘にて充分である。

九　檢卵

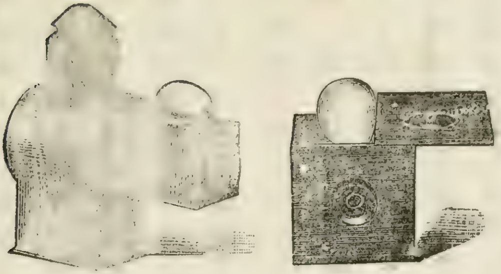
禽類の產卵は、凡て兩性の配合には無關係であるが、子孫を蕃殖する爲には、矢張り哺乳動物と同じく受精作用を營まなければならぬ、鷄は雌のみ飼養するも產卵するものであるけれども、此の如き卵は孵化力を持つて居らぬ、無精卵とは即之である、雄鷄を配するも交接の不完全、又は疾病等の爲に、無精卵を產むことは屢ある ものである、卵が有精であるか、又は無精であるかと云ふことは、產出の儘には鑑別

の出來ぬものであるが、母鷄が之を抱溫すると、發育して來ないから外部からでも觀察が出來る、又有精卵であつても、生活力の薄弱の爲に、或は他の障害の爲に、發育の途中で生活を失ふものもある、之等を不熟卵と總稱する、不熟卵を見別けて除去するのが即檢卵である、無精卵は、其の儘巢の中に置て母鷄に溫めさすると、腐敗してしまうが、早く取出すと食用に供して差支ないものである、無精卵は、大低一週間内に取出したものならば、一二日冷所に放置すると、母鷄の腹部から分泌された有機物の臭は失くなり、味も左まで劣らぬものである、五日、四日と早く取出した卵は、殆んど他の抱溫せざる卵と異らぬ位である、不熟卵を取出すと卵數が少なくなるから母鷄が之を處理することも、又溫熱の供給も充分となり、他の熟卵には利益となる、而して若し同時に二三の母鷄が抱卵するときには、三羽の熟卵を二羽に托し、一羽には新に種卵を抱かすることが出來る、故に檢卵は出來るだけ早くするを利益とする。

檢卵の方法には、檢卵器を用ゆるのと、肉眼によつて鑑定するのとの二つがある、檢卵器の精密なるものを用ふるときには、入卵後四日には熟否の鑑別が出來るも

のであるが、少しく熟練すると肉眼でも五日乃至六日の後には知ることが出來るものである、肉眼鑑定の方法は、卵を手に握りて晝なら陽光か、夜間ならば燈火に透して見ると、熟卵ならば卵内は美しき紅橙色を呈し、凝視すると幽かに血腺を認むることが出來る、之に反して不熟卵の内容は黄濁色をなして血腺を認めないか、或は卵の一部に暗色の斑が現はれることもある、而して光線を漸次弱くして透視するに、熟卵は既に光を透さざる程の弱光にても、無精卵ならば充分透光するものである、尤も之の視方は、各自の視覺によつて多少異なるものであるから、自身に經驗して、要領を得て置かなくてはならぬ、次第に經驗を積むこと、七日目に判るのが五日目に既に判る樣になる、又**レグホーン**、**ハンバーク**の卵の如くに、卵殼の白く比較的薄きものは、**プラマ**、**コーチン**の卵の如く殼色の褐紅を帯びた厚いものよりも、早く拔易いのである、少數の孵化には檢卵器はな

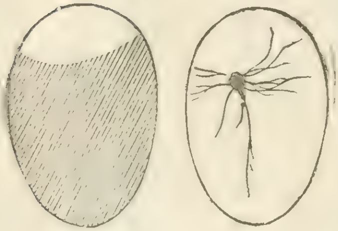
第二圖



檢卵器

くともよいのであるが、多數の孵化には檢卵器を使用した方が、尚早期に判り、且つ手數も省けるのである、檢卵器の構造は坊間に販賣して居るものにも幾種もあり中には隨分高價なものもあるが、要とする所は、光線を集めて明に卵内の模樣を知ることが出來る樣に作られたものであるから、之の理を應用して、自身に任意の製作をするのが經濟である、予が之迄用ひたるものの中にて簡單なるものを云はんに、外面を墨にて塗れる郵便葉書にて、卵の鈍端を容るるに足る漏斗形を作り、卵を之に當て、日光又は燈火を用ひて見るのである

第三圖



一　二

檢卵器によつて、綿密に不熟卵を拔取らうとするには通常二回の檢卵を行ふのである、入卵後第四日目即初期の檢卵の場合には、熟卵は第三圖の一に示せる如く中央上部に血塊を生じ、之の起點から數條の血線を網狀に出して居る、無精卵には全く此狀なく、有精卵の途中に發育の停止せるものは、血線が一所に纏れて居るとか、血塊は黑變し或は崩壞せる等の異常が現はれるものである、又

期の檢卵は、大抵抱卵後十一日目位に行ふ所のもので、此時は無精卵は既に無い筈であるが、初期の檢卵後發育機能を失つた卵を除去するのである、熱卵は此時に至つては大に孵化作用を進め、第二圖の二に示すか如く氣胞は增大し、血條は著しく增加し、卵の一部に黑暗の個所を生ずるのである、然るに此際尚第一期の檢卵と略同じ狀を呈して居るか、或は所々に血塊の崩壞せるが如きものを認めたならば、發育中止したものであるから拔取らなければならぬ、少數の良種卵を忠實なる母鷄に托した場合には、七日目に熱卵と見られたるものは、大抵孵化するものであるが、孵卵器を用ひて多數の種卵を處理する場合には、從て發育の中絕せる卵が出るのである、故に第三期の檢卵を行ふこともある、最も普通の方法は、適宜の器に微溫湯を入れ、卵を靜に之に入れて見るのである、熱卵ならば鈍端を上にして浮ぶものであるが、腐敗卵は沈下するものである、熱卵でも又輕微の運動を認むることが出來る、或は卵を手に握り耳に當てるときは、生活せるものは胎兒の蠢く音が聞かれる之は大抵十八九日目位に行ふものである。

十　續座法

抱卵が孵化の期日となつて、追々に雛が出て來るのを、順次に取去り了つて更に新らしき種卵を母鷄に與へると、巣念の强い母鷄では、依然抱卵を繼續するものである、此方法を續座と云つて、我國には千葉地方で以前から知つて居つて、家鴨を孵化したと云ふ話である、之を行ふには孵化期の間際には、豫め巣箱を眞暗くして置き、雛か出で次第、鳴聲を擧げさせぬ様に之を母鷄の腹下から取出して、假母器、又は他の母鷄に托し、鳴聲の聞へぬ場所に移すのである、故に之の法は假母器を用うるか又は同時に二三の母鷄が蟄巣して居る場合に限られるのである、而して雛を取去り了りて後尚熱心に母鷄が蟄巣して居つても、一度模造卵を入れて一晝夜位様子を慥むる必要があるのである、續座法は時としては頗る有利なるものであるが、一方から見ると、母鷄は日を經るに從ひ體か衰へて來るものであるのに、五週間、七週間と永くなつては、一見して憐れな程憔悴するものである、だから動物虐待と云ふ點から見ると、夏期などの續座は餘り望ましくは無いのである、

十一 孵化前後の處置

卵の孵化に要する日數は、禽の種類によつて差のあるものである、天然孵化にては、鶩は二十八日乃至三十日、鴨は二十七、八日、珠鷄二十四日を要し、鷄は二十一日以後に孵化するものである、此日數は受溫の如何によつて多少の延縮を來すもので、十九日で雛が出ることもある、又は二十三日の後に尙發生しないこともある、予が曾て經驗した一腹の卵は、二十三日になつても、二十四日になつても一向孵化する模樣がない、けれども之を檢卵して見ると慥かに生活作用を營むで居るから、其儘にして置て見ると、二十六日目になつて漸く殼を破つて出て來たことがある、斯樣なことは固より例外であるので、小なる母鷄に澤山の種卵を抱かするとか、巢念の乏しい、時は巢の中に立つて居る樣な母鷄を、箱に蓋などをして强て溫ました場合には、受溫の不足の爲に往々斯の如きことがあるものである、此の如き雛は、薄弱で發育の不良なることは勿論である、一腹の雛の中でも、早く孵化したものは、遲く孵化したものよりも丈夫である。

偖愈孵出の二三日前即十八、九日となつたならば、母鷄の外出時間を短かくして早く巣に歸らしめる、鷄體を殊によく檢めて羽虫は少しでも居らぬ様にする、母鷄に羽虫が居ると忽ち雛に傳播して發育を害するものであるから若し之を認めたならば、除虫菊の粉を散布して殘らず驅除する様にしなくてはならぬ、

雛の孵出に先つて、豫め巣床の凹形を殆ど平面位に直して置く必要がある、若し餘り中央が深いと、孵化した雛は床の方へ落ち合つて互に混雜し、却て母鷄の爲に踏まれ易い、之等の注意の外には成るべく干渉しない方かよいのである、

一と腹の卵は殘らず同時に孵化するものではない、大抵一晝夜から二日位の間に出揃ふものである、ある母鷄は一二の雛が出ると、最早殘りの卵を顧ないものであるから、孵へ次第取去つて、温かき箱のなか等へ入れ、全部孵化してから腹下へ戻すと云ふ取扱法もあるが、箱を暗く、靜かにさへして置けば、大抵母鷄は温めて居るものであるから放任する方がよい、一體雛が殼を破つて出る場合には、驚く可き勢力のもので、從つて疲勞を來すものであるから、脱出後は數時間の安靜なる眠を欲するものである、又濕つて居る羽毛は、此間に乾燥し大に元氣を增すものである、時

とすると、殼中の雛が嘴の部分丈を破つたばかりで、脱殼する程の勢力がなく、中で鳴いて居るものがある、之は元來種卵の生活力の弱いもの、抱卵中水分の不足したもの等に多いので、適當なときに靜に手を以て剝いて遣ると育つものであるが、其手加減に至つては頗る面倒で熟練を要するものである――、又斯の如くにして出た雛は、多くは强壯でないものであるから、初心者は自然に任した方が却てよいのである。

雛が孵出したる際には卵黄を吸收して居るし且未だ消化器の機能が充分でないから直ちに食餌を給與する必要はないのである、雛の飢渇を恐れて、孵化すると直ちに餌水を備へるのは宜しくないので、二晝夜は何等の食物を與へなくとも、只一意母鷄の腹下に溫まるのが彼等には最上の手當である。

第四章　天然育雛

母鷄に雛を育てしむることを天然育雛と云ふので、假母器を用ふる育雛法と區別して居る、養鷄業の中で最も伎倆を要するのは即ち此の育雛の術である、初めて鷄を養ふ人が、一腹か二腹の雛子を母鷄に托して、注意に注意を加へつつ管理して見ると、意外に成績のよいもので、滅多に病氣にも罹らず、日一日と面白い位に成長して行き、育雛は左程困難なものではないと云ふ樣な考を起すものである、茲に於て直ちに孵卵器で澤山の種卵を孵へすとか、一時に多數の母鷄を用意して急に多くの雛を作り、短かい間に成鷄を多くし樣とすると、最早前の如き成績は得られぬ、即ち先づ孵化の前後に死するものがあり、或は羽虱に苦められ、或は外敵の爲に損じたりする中に最も多く遭遇するのは病氣の爲に斃れることである、雛が斃れ初めると、活潑に飛廻つて居つたものが俄に元氣がなくなつて、庭の隅で佇立した儘居眠りの樣な有樣をしたり、首を羽翼の下に銜き込んで尾を垂れたりする、斯樣になると昨日も何羽、今日も幾羽、明日も又と云ふ具合に、殆ど手の付け樣もない位は

恐し、衰へるものである、元來雛は成鷄に比して抵抗力の弱いものであるから、傳染病に感じ易く、又一旦營養を害すると忽ち病氣に罹り易く、少しく病氣の進行したものは先づ多くは斃れてしまうものである、何故に少數の雛は丈夫で、多數を育てる場合には薄弱であるかと云ふに、敢て鷄の雛に限らない、他の動物でも人間でも矢はり同じ樣なことを見て居るのである、例へば閑靜な田園に住んで居る人は丈夫でも之を雜沓する都會に連れ出すと健康を害し易い、强壯な人も工場軍隊學校などに生活すると、往々病氣に罹るので、之は一二の原因に止まらないのであるが、病氣に感染する機會の多いのと、多數の人が一所に集合する場合には避け難き衞生上の不利を蒙る等の爲に、健康を害するのである、之が雛の如き影響の銳敏なものに至つては中々注意が屆き兼ぬる、

　育雛に失敗のない樣にするには、是非經驗によつて呼吸を自得しなければならぬのであるが、大體心得て置く可き要件は既に前章に於て述べて置いた時候、種卵の選擇から次に述ぶる食餌の調製をよび給與法、雛舍、運動場、管理等に就ての智識である。

一　雛の食餌

全部雛が孵化してから、一晝夜乃至二晝夜を經過して、母鷄の腹下で盛に彼等が運動する樣になつたならば、適宜の伏籠へ母鷄と共に出すのである、最初に與ふ可き食餌は、鷄玉子を細かに刻んで撒き散らすのがよい、之れ雛は既に殼中で卵黃を吸收して消化器も之に馴れて居るし、且つ卵黃は滋養分にも富んで居るところから頗る恰適である、一寸思ふと面倒な樣であるが、極めて少量で足りる者である故に、格別不經濟でも面倒でもないので、之が最良である、二三日は成るべく之を用うるがよい、又は

浸水せる粉米の表面だけ乾いた位で、指間に壓するときは容易に碎けるものを與へて宜しいが、白米の粉米よりも、玄米を碎いて、特に作つたものゝ方が遙によいのである、若しも牛乳を得ることが出來たならば、浸水の代りに牛乳に浸すときは殊に妙である、余の經驗にては、ハンバーグの如き比較的虛弱なる雛は、粉米を多く食せしむるときは、屢消化器を害して斃れ易い、故に最初は稗に極少量の粉米を交

へて與へ、漸次に白米の量を増すときは、前條の斃死を免れる樣である。

芽出せる大小麥も雛の食餌として適當のものである、穀粒が芽を萠す場合には、粒中の澱粉は水に溶解性の一種の砂糖となるから容易に消化せらるゝものである、之を作る簡單な法は、地面を濕ほして穀粒を散布し、菰を被せて置くときは、二三日の中に萠芽するものである、斯樣な場所を數ヶ所設け、雛を日々順次に之の上に放つときは、喜んで啄食するものである、然しながら此餌は、二週間以後の稍成長せる雛に適して居る。

煉餌の調製をして與へる法もある、米糠、大小麥、玉蜀黍などを、魚、獸などの肉、骨等の浸出汁で捏り、適宜の固さとし容器に入れて與へるのである、煉餌の長所とするところは、動植物質を配合して任意に滋養分を附加し得ると、又比較的安値なるとにある、故に多數の育雛には煉餌を便利とする、然しながら材料により粘着力の多き煉餌は雛子の胃を害するゝ云ふ短所もあるから注意しなくてはならぬ。

次に雛の食餌として頗る重んずべきは、動物質の飼料である、尤も植物質の飼料のみでも、育雛は出來るのであるが、適度に、滋養物質として動物を給與する方が、勿

論發育は良好である、就中生餌として雛の最も好むのは、昆蟲其他の小蟲類である水田の多き地方では、夏より秋にかけて、盛に蝗が稲に群棲し、之等は容易に採集することが出來て、之を與ふるときは甚だ有効である、又蝗を一回蒸して日乾し、之を貯うるときは、冬寒、早春の雛の飼料として與ふることも出來る、其他一般の場所に於ては、特別に虫を作ることが便利である、

虫の作り方 余が經驗中、最も容易であるのは、先づ地面に任意の穴を掘り、成るべく濕りたる腐敗に近き塵埃を穴の底に布く、此上に米糠を散布して又塵埃を布く斯の如く層々を重疊して地面の高さとしたならば、菰を被ふて置く、而して毎日米を洗ひたる白水を注ぐときは、數日にして諸種の無數の虫類が發生するものである、斯の如き場所を諸所に設け、毎日雛を茲處に遊ばする樣にすると甚だ簡便である。

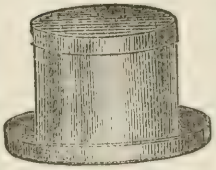
動物質飼料で、右の外雛の發育に最も効力のあるのは鰌である、之は都鄙共に得るに易く、値段も比較的低廉なものである、給與するには、成るべく生肉は止めて一度燒くか煮るがよい、然るときには擂餌の中に入るゝもよし、或は骨共に細かく刻

んで散布して與ふるもよい、其分量は、孵化後三日目には百羽に付二合位とし、四日目には四合、六日目には六合と云ふ割合で增加し、三週間の後には一升五合位を與へる、而して一ヶ月以後は又漸次減量して差支ないものである。

二　給餌の方法

食餌を絶へず備へて置いて、雛の欲する儘に任する法もある、又時間を定めて一定の分量を與へる仕方もある、各多少の欠點があるが余は常に後者によつて經驗して居る、不斷の給餌法では散布して置くと踏み付けたり、或は糞の爲に汚されたりして兎角濫費せらるゝが爲に、器に入れて備へ付けて置くのであるが、之よりも後の方法により、初の間は二時間毎に餌を撒き散らして、雛が食するだけ與へるのが寧ろよいのである、若し特に成長を速ならしめ樣とする雛は、夜の永き時季には夜中一回給餌するのである、而して此給餌回數は漸次適宜に減じ、同時に食餌を成鷄に近づかしめ、三四十日の後には略成鷄と同樣の取扱をなして差支

第四圖



ないものである。

三　青菜と水

右の他、雛の食餌として欠く可からざるものは青菜である、殊に柔かくして新鮮なるものを望むのであるから、畑或は宅地の一隅などに豫め菜類を播付けて置くのが便利である、大根類にても、牧草の嫩芽でも別して甲乙はないのであるが、小松菜の如く年中時季を選まず播き付けることが出來て成長の速なものが都合がよいのである、之も又一度に多量を給せずして、少量を時々に與へなくてはならぬ。

清水を與へることが又必要である、然しながら皿などに入れて給すると、雛が此中に這入つて體を濕ほしたり、母鷄が脚にて覆したりするものであるから、斯の如き憂のなき様自身に細工をするか、少し費用を出すならば、特別の容器が現今坊間に販賣されて居る、其形は第四圖に示せるが如きもので、水が飲まれるに從つて、壓力の關係で内部の水が降つて、外部の水面は常に同一の高さに保たれて居る様に作つてあるもので、之を適宜の場所へ安置するのである、然しながら場合によつて

無水飼育法が却て成績のよいものである、之は水を其儘與へず、食餌に水を含ませて與へるのを云ふので、煉餌を柔かにするとか、青菜に充分水を含ませるとかして與へるのである、夏は暑氣の爲に、自然に雛は渇を覺え、非常に水を飲むところから前胃炎、消化不良等を招き易い、故に夏期の育雛には、此法が屢好結果である。

四　雛の管理と雛箱

雛を母鷄と共に籠に伏せる場合には、直接に地面か、又は蓆を布く方がよいのでタタキ、セメントの如き固き場所、又は藁屑を布くのは共に宜しくない、夏期炎暑の候を除いては、成るべく日光のある所を選むがよい、一母鷄に何羽位の雛を托してよいかと云ふに、母鷄の體格の大小、育雛の巧拙、時候の寒暖等によつて、種卵の場合と同じ様な斟酌をしなくてはならぬ、然しながら抱卵の様に嚴密に總數を制限しなくともよいので、大抵十四五羽位は托してもよいのである。

伏籠の中で四五日を經過したならば、晴天の日には半日位宛外敵の來ない雜草のある場所へ、母鷄と共に雛を出すと、非常に丈夫になるものである、早朝未だ霧の

第五圖

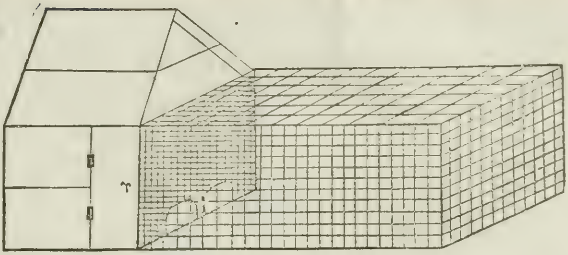
（巢中の親鳥と雛）

乾かない間、又は僅づかにても雨濕の存する場合には出さぬ方がよい、雛の體を濕ほすことが、屡病氣を引起すもとである、又犬、猫、鼬、狐、鷹、鳶の如き外敵の來る處ある場所へは、決して雛を放つものでないから、斯の如き場合には、細竹又は金網を以て、外敵の入り得ない樣に稍廣き運動場を圍ひ、此中に遊ばせねばならぬ、廣き場所に放ちたる場合には、母鷄が餌を搜ねて此處彼處と雛を引連れ歩き、幼稚なる雛には運動が過度となり、却て發育の障害となるものであるから、適度に加減しなくてはならぬ、然しながら餘り狹小なる伏籠に、三週間も一ヶ月も押し込

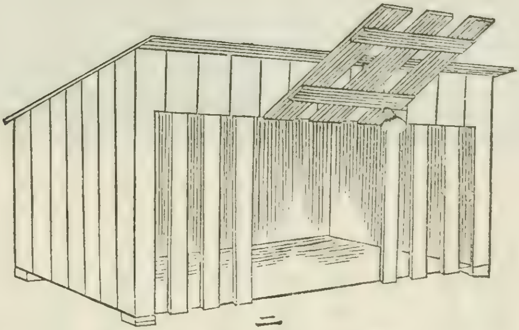
めて置くと、如何に食餌は良好であつても、之の發育は不良なものである、要するに體力に相應して徐々に運動を増して行く方針を取らなくてはならぬ。

伏籠にて母鷄と雛とを伏せた場合には、雛に與ふ可き滋養多き食餌も、母鷄の爲に啄食(たくしよく)せられて經濟上不利益である、之を避ける爲に、

(第六圖)



一



二

雛箱

雛箱を製作するのが得策(とくさく)である、雛箱の外形は如何樣でも宜しいので、只母鷄は箱の一方に居り、雛だけは格子穴等を通じて他方に出ることが出來るのが要とするのである、第六圖一に示せる

は、木にて方二尺、高さ任意の室を作り、外部には只底のみ缺ける、七八分目の金網を以て圍む運動場を取付けたるものである、室と運動場との界は、同じ目の金網にて雛のみ出入し得る二三の孔を設けて置く、而して母鷄をば室内に入れ、運動場に雛の食餌を與るときは、雛は小孔を出入して餌を攝り、寒くなると母鷄の腹下へ這入る但母鷄の食餌は雛にも啄はるゝが故に、柔かくして消化のよきものでなくてはならぬ、第六圖の二も同理の構造を持つもので、異なる點は遊歩場と內部との界を目の粗なる格子作としたもので、運動場は任意に作ることが出來る、冬期の使用には、周圍を板とし、天井を硝子張として、取放ちの出來得る樣にすると暖である、

五　雛の害虫の豫防

害蟲を驅除し又は豫防することは、育雛上極めて重要なることである、害蟲の種類は羽虱、羽虫等一二に止まらぬ。之等に寄生せらるゝときは雛は非常に衰弱を來し、或は斃れるものも屢ある、之を豫防するには、第一に雛箱と附屬物とを清潔にしなくてはならぬ、箱の中に布く蓆菰の類は、日々之を取換へて石灰を時々散布し、只

は夜間母鷄の脊上に少許の除虫菊の粉を靜に振りかけるのが有効である、此他害虫の豫防驅除として彼等の好むのは砂湯であるから、運動場には適宜の穴を掘つて碎粉せる土を入れて置くがよい、若し床、箱の中などに養ふときには、別に箱に細土を入れて置く必要がある、但し濱砂は甚だ冷たいものであるから、寒冷の候には之を用いぬこととし、他の稍濕氣ある砂交りの土を選むがよい、尚夏期に於ては、蚊に襲はれて非常に發育を害し、又は鷄痘の如き傳染病の媒をせらるゝものであるから、雛箱には蚊帳の戸を作り、完全に之を防がなくてはならぬ。

六 雛の分離と雌雄鑑別

採卵の目的に鷄を養ふ場合には、深山の雄を置く必要は無いのであるから、雄雛をば出來るだけ早く見出して之を別けねばならぬ、種禽を育成する場合には、良雄は殊に貴ときものであるから、多くの雄雛を養つて之中から選擇しなければならぬ、之とても雌雄雛の雜居は、諸種の弊害を醸すものであるから、早期から別飼することは必要である。

雄雛は同時に孵化した雌雛よりも、概して發育は速で、遙かに活潑なものである
から、此等を一所に養ふ場合には、雌は雄の爲に壓倒せられて食餌を奪はれ、又は踏
倒されなどして、雄の益强壯となるに反し、雌は愈不利益な地位に立つものである
から、何の道、雌雛と雄雛とは別々に飼育しなくてはならぬが、其中で若しも種禽を
作る目的であるならば、何れも良好の食餌と、綿密なる管理とを與へなくてはなら
ぬ、其他の目的ならば、勿論雌群の方に重きを置く樣にするのである、又雌群と雄群
とを別つも、此等の中にても、尙自然に强壯なるものと、虛弱なるものとが出來て來
る故に斯の如き雛を見出したならば、强者は强者、弱者は弱者と合して育てなくて
はならぬ、但し之事は多數の育雛を云つたので、五羽か七羽の雛にては、無論左樣に
手數をかけるには及ばぬ話である。

上述の如き理由によつて、雛の雌雄は、養鷄家にとりては極めて必要なもので
成るべく早期に之を見判けなくてはならぬ、併しながら此事たるや至難の業で、幾
多の經驗を積んで始めて分るものである、一定の鷄種を久しく養ひ熟練すると、其
種類ならば孵化後間もなく殆ど誤りなく見別け得るもので、家鴨、鵞などになると

孵化後直ちに鳴聲によつて鑑別が出來る、併し之等は個人的の感覺によるものであるから、何人にも了解の出來る樣に說明するのは難い、養鷄業にとりては、此事は經濟上に重大の關係を持つものであるから、參考として余が信ずる一般鷄の特長を列擧して見やう。

孵化後三日以內の雛にては。

一　鳴聲のチー々と云ふが如く巾廣に濁つて居るのは雄で、チー々と巾狹に澄んで聞へるのは雌である、

二　單冠種にありては、冠肉の厚く缺刻の深きは雄、然らざるものは雌、

三　顏面の獰猛に見ゆるは雄優しきは雌

四　冠の續きの後頂部に、羽毛の生じて居らぬ個所がある、此部分の短かくして廣きは雄、雌のそれは細長い、

五　頭の大なるは雄、小なるは雌、

六　嘴の長大なるは雄、否らざるは雌、

七　丈高く體の長大なるは雄、然らざるは雌。

一八　脛趾等の太く大なるは雄、然らざるは雌、

孵化後二週間前後の雛にては、

一　擧動の活潑なるものは雄、穩柔なるは雌、

二　尾羽の上方に向いたるは雄、然らざるは雌、

三　體形大、體重の多きは雄、小にして輕きは雌。

四　肛門の狹小なるは雄、廣大なるは雌。

五　主翼羽のみ早く生ずるは雄、然らざるは雌、

六　歩調の大なるは雄、然らざるは雌、

七　母鷄の隔離

雛は母鷄に永く托して置く程安全に育つものである、廣き場所に運動さするも母鷄が居ると雛は離れ〱とならず、鼬、猫等の外敵が襲來するも、母鷄は身を以て雛を保護するものであるから、彼是する中には人の隈に止まつて救はれる者である、然しながら母鷄は　から離して養ふときには、間もなく產卵するに至るもので

あるから、久しく雛に附けて置くことは不經濟である、多は四週目から五週目の間夏期は三、四週目の間に隔離するのが普通であるが、管理者の伎倆によつて勿論短縮することが出來るのである、春季温暖の頃には、二週間にて隔離するも夜間に注意して毛布の類にて圍ひ、冷氣を防ぐときには、雛は銘々の體温の爲に凍へる樣なことはないのである。

母鷄を隔離するには、互に鳴聲の聞へぬ所に別居さするのである、雛は成長するに從ひ次第に母鷄に遠かるものであるが、母鷄は何時までも雛に對する愛着の念が消へぬもので、別々の柵籠等に入るゝも、聲の聞へる所、又は體の見へる所では、母鷄は狂亂の如くに騷ぎ立てゝ厄介なものである、最宜しいのは、隔たりたる柵へ母鷄を若雄と共に入れて置くのである、然るときには盛に交尾を迫られ、間もなく雄に從ひ産卵して雛を忘却するものである。

第五章　人工孵化

一　人工孵化の沿革

人工を以て卵に適度の溫熱と濕氣とを與へ、恰も母鷄の腹下にあると同じ狀態にあらしめたならば、卵は孵化する道理である、此の方法を人工孵化と云ふ、人工孵化の考は、非常に遠き昔から各國の人々の間にあつたもので、就中太古時代に於て既に此方法を案出して實行して居つたのは西洋では埃及諸國、東洋では支那であつた、合衆國の家禽家コルベツト氏の著書で見ると、太古時代に於てはエジプト、ダマスカス、バンスタイン、ジエルサレム、サマリヤ等に於て盛に人工孵化法が行はれエジプトのみに於て年々約一億萬位の雛を孵へしたと云はれて居る、孵化の方法に就ても如何なる裝置を用ゐたのか、今日に於ては判然と知られて居らぬ樣であるが、兎に角一定の器械ではなかつたらしい、各自に工夫した狹い室と孵化爐とを用ゐて、一種獨特の妙技を以て此業に從業したもので、家傳、相傳と云ふ樣に深く秘密に附し、容易に方法を發表しなかつたものらしい。

次で此業は佛蘭西人に知られる樣になり、紀元千四百十五年には佛帝チャールス七世は、自國のアンボアーヘに孵卵育雛場を設け、千五百四十年には、フランシス一世も又モントリシャールに於て人工孵化法に依て家禽の蕃殖を營ませたと云ふ事である。

其後千七百七十七年に、佛國ナンテルの醫師ボンヌマン氏が、鐵管に湯を通じ此を以て一種の暖爐を作つて卵を孵へすことを案出し、之の孵卵爐をエッカロビオンと名けた、而して巴里のチウボルトに孵卵場を設け右の器械を使用して盛に卵を孵卵し、一時は雛を市場に賣出したものであるが、千八百十四年に兵亂の爲に破壞せられて、其後再興を見るに至らなかつたのである。

千七百五十五年には、佛人ファーショ、ドリーマー氏が、馬糞の堆積中に偶然雛の孵出したる事實に考へ、葡萄酒の空樽の周圍に馬糞を堆積し、樽の內部には更に小なる桶に卵を入れ、醱酵の熱を利用して孵卵することを案出した、所謂馬糞孵卵法を行つたのである、然しながら此は良好の結果を見るに至らなかつた。

千八百十四年には、佛國の植物學者バルレー氏は、自己創作の器械にて諸種の卵

を孵化する事を案出し、其後一層器械を改良し、自働瓣の作用によりて溫の高低を自働的に制限するまでになり今日の孵卵器の基を作つたのである。

其後英國のカンテロー氏、ミナミ氏、カーボンニー氏、ブリンドレー氏、シユレーダー氏、ウオートレー氏、ペレマン氏及ボイル氏等により諸種の孵卵器が製作された然しながら整爐瓣を欠きたるが爲に終始監視して居なければならぬとか或は瓣を具ふるも作用鋭敏を欠き、殆ど前者と同じく屢々巡視しなければならぬ等の欠點を脱するに至らず要するに余り精巧なものではなかつた。

恰此頃、北米合衆國に於ても孵卵器の裝作を企つるもの輩出し、ハルステツト氏レンキツク氏等又各一種の孵卵器を公にするに至つたが要するに英國式と大同小異のものであつた。

千八百七十七年には英國のクリステー氏が、ハイドロインキユベーターと稱する一種の孵卵器を製作して世の注意を喚起した、其構造の大體を云はんに箱の內部に引出を作りて此中に卵を並べ、引出の上は溫湯を充たしたる湯槽にて卵は此より熱を供給せらる、別に溫度及氣流を計る設備あり、箱の外側に熱の不導物質を

塡充し溫熱の發散を防ぐ裝置をなし、十二時間毎に溫湯を取換へたものである。

支那に於ても、今を去ること二千年の昔から人工孵化は行はれて居つたものらしい。而して今日尙南淸殊に揚子江沿岸に於ては盛に此技術が行はれ、上海卵として鷄卵の輸出せらるゝことが夥しい、孵卵法は今尙古代の簡單なる方法を採りて然も巧に應用されて居る、其大體を云ふと、先づ此目的の爲に孵化室が設けられてある、然しながら其造作は至つて單簡なもので、外壁は支那煉瓦で疊み內壁は土を塗つてある、屋根は瓦葺床はタヽきにしてある、此室內には土製の甕が据付けて此甕の中に卵を入れたる籠を入れ而して內部に酒樽形の半分地中に入つて居る爐が作られて居る。

愈種卵を用意し了ると、爐に石炭を燃して卵に溫熱を與へる、而して以後毎日二三四宛卵を手にて取り出し、別の同形の籠に移し、籠の交換をなして行く、溫度の高低は手を甕の內部に觸れて考へ、或は卵を眼に當てゝ見るだけである、四、五日目に檢卵を行つて無精卵を除去して賣拂つてしまう、檢卵をするにも只日光に透して見るのみで、別に何等の檢卵器も使用しない、十一日になると、卵を室內の床の上の

布の上に並べて、室内の溫度に曝して置く、大畧斯の如くにして二十日の後には孵化するのである、而して平均十パーセント孵化すると云はれて居る、斯の如き無造作の方法に依つて、然かも精巧なる孵卵器に讓らざる好結果を得る彼等の工夫と熟練とに至つては全く賞嘆の外はない。

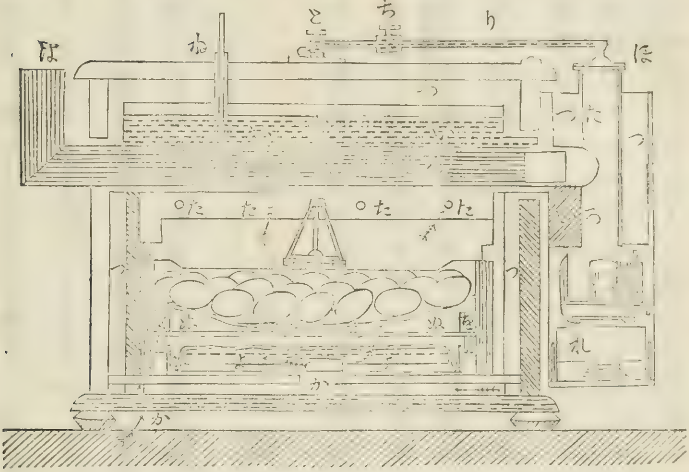
二 孵卵器の構造

現今世界に用ひられて居る孵卵器は、大體二樣の原理によつて作られて居る、一は熱原に溫湯を用ひ、他には直接に火氣を用ゐて卵に熱を與へるのとである今左に溫湯式中最も廣く知られたる英國ヒアソン氏の孵卵器に就て解說を試みん、

左圖は其の縱斷面を示すものなり(れ)はランプにして之に(ろ)(ろ)(ろ)なる導管を取付け火氣によりて(い)(い)の湯を熱し之が溫源となる(ろ)の管は(は)より屈折して再び右方に出るものなるも繁を避くる爲其部分を省く(に)を直上せる火焰は(ほ)なる蓋が自働的に開閉して或は全部(ろ)に入り、又は一部分器外に洩出づることとなる、之(一は最も主要なる働にして起働部は(へ)なる整溫器である、五のものはヒアソン氏專

質の構成にて眞鍮より成る、中にアルコホール及びエーテルを含み、大部分は皮革

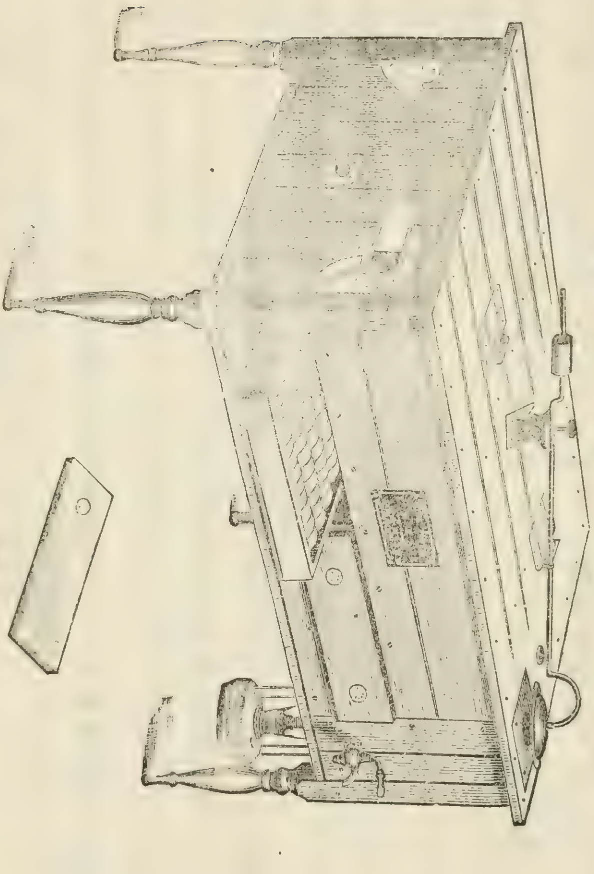
（第七圖）



ヒアソン式孵卵器

にて包圍せられ溫度の高下により一定の膨脹と縮小とをなす(へ)は溫湯槽の下部卵室の少しく上部に位し、臺上に安置せられ(と)(り)なる槓桿に連結して働を及ぼし得る(り)は螺旋仕掛にて、締め又は緩むることによりて(ほ)は開き或は閉ぢらる(ち)は分銅の作用を有し、左右に動かすことにより(ほ)を開き又は閉ぢる、故に(と)(ち)を加減して適溫を得ることが出來る(ぬ)(ぬ)は卵を載する臺にて、亞鉛板にて作り底の中央部は稍凹形をなし、卵を嵌める樣に孔を穿つ、五の臺は(を)(を)にて支へ、外部の空氣は(か)(か)より入り(よ)(よ)なる水槽を通過する際濕氣を含んで

之を卵に供給す而して(た)なる小孔を通じて排出せらる而して(つ)には熱の不良導物質を詰め温度の放散を防ぐねは小孔にして検温器を入れ、湯の温度を検め卵の



孵入圖

孵卵器

引出にも小孔を穿ちて同樣の裝置と操作をなす。

三　孵卵器の利益と其使用法

農家或は其他で、副業的に少數の雛を孵化するならば、勿論孵卵器を据付けるには及ばぬ話である、然しながら多數の養鷄を爲さんとするには、一時に澤山の母鷄を用意すると云ふことは困難であるし、又實際多數の母鷄を世話すると云ふのは隨分厄介な手數であるから、斯の如き場合には孵卵器を用ゆることを便利とする其他孵卵器使用の利益を列擧して見たならば

一、任意の時に孵化し得ること、

二、母鷄の如く卵を破損せざること、

三、孵化經費の少なきこと、

等で三の孵化經費と云ふのは、母鷄を使用すると、日々の食費も普通鷄よりは多分に取られ、孵化後も當分は產卵を休止するが故に、此等を合算するときには、多數の母鷄にては多額の費用となる。然るに孵卵器を用ひたならば、只熱源として僅かの

石油を費すのみで極めて少額の失費である、且つ一個の善良なる孵化器は、大抵數年間の使用に堪ゆるが故に、買入の際は一時に費用を要するとも、一回の孵化に割費となるのである、若しも我國の地方に、今少しく孵卵器の觀念が普及したならば專門の孵卵業者が出來る樣になる、而して一般の農家は、此專門家から比較的割安の雛を買ひ入れて育てる樣になる、然るときには一村或は一區に一臺の孵卵器を据へ付ければ足ることゝなり、互に手數が省けて利益を得るに相異ない、

ヒアソン氏の孵卵器と共に米國式即直接に火氣を熱源とする孵卵器が、漸やく廣まつて來た樣である、和製のものも近來非常に多く各地に販賣されて居る、凡て此等の孵卵器は、一定の使用法を行へば、何人にても可なるが如くなれども、使用者は此に就て相應の經驗を積まなくてはならぬ、今左に大體に心得可き注意を列擧して見ると

一、孵卵器は、日光の直射寒風の侵入を避け、成るべく溫度の變化少き室內に安置し空氣の流通を徐々にし震動を與へざること、

二、溫度の一定したる後、尚ほ數時間變溫なきを慥めて後入卵すること、

三、孵卵中の温度は攝氏三十八度(華氏百〇一度三分)より攝氏四十度(華氏百〇五度)の間にあるべし、此以上或は以下の温度は共に宜しからず、

四、入卵後は毎日二回時を定めて卵の回轉を行ふ可く其際引出を引放ちて、十五分乃至二十分間卵面を外氣に觸れしむること。

五、孵卵中は、毎日一回温源燈を掃除して、石油の不足なきうちに添注し、又給濕器の水に注意し、若し水濕不足の觀あるときは微温湯を卵面に散霧するも可なり

六、若し中途にして新卵を入れんとするときは、豫め百二、三度の温度となして後孵卵器に入る可し、然らざれば温熱吸收の爲に他の卵に影響を及ぼす恐れあり

七、天然孵化と同じく檢卵をなし、不熟卵は成るべく早期に取去ること、

八、孵化期に際しては一層注意し、雛の軟毛の乾くを待つて温暖なる他の容器に移す可し、

第六章　人工育雛

一　假母器

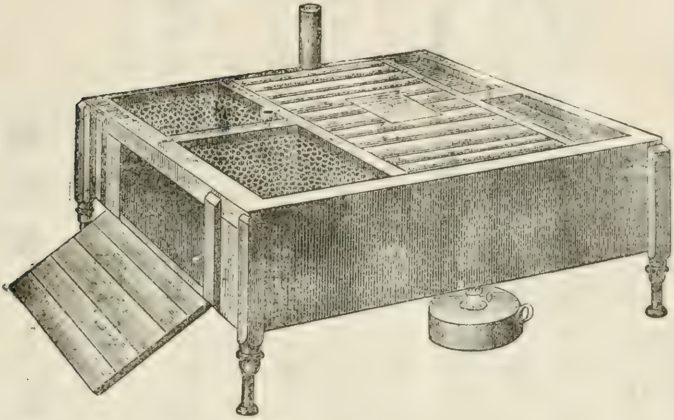
雛を母鷄に托して育てるのを天然育雛と云ひ、此に對して諸種の器械を用ひて育てるのを人工育雛と云ふて居る、人工育雛の目的に作られてある裝置が即ち假母器である、孵卵器で雛が多數に孵化された場合とか、又は雛の孵化後間もなく母鷄を失つたときには、勿論假母器は必要であるが、其他母鷄で孵化した場合にも假母器を用ひたならば母鷄は再び抱卵することも出來、或は間もなく產卵させる事も出來る、故に假母器は孵卵器よりも一層用が廣いのである、其他假母器を用ゆるときは、雛が母鷄の爲に踏殺さるゝ患なく母鷄の羽虫を雛に擴げる恐もない、其代り假母器の使用に就ては十分の熟練を持たなければならぬ。

二　假母器の構造

假母器の構造に至つては樣々であるが大別すると給温式と非給温式との二種

となる、後者は雛が稍成長し或は氣候溫暖等の場合に用ひ人工の溫熱を與へないので、前者は幼雛或は寒冷の節に用ひ人工にて給溫さるのである。

第九圖



プレアリー式假母器

給溫式にありては、雛に適當の溫度を與へると共に彼等が恰も母鷄の腹下にあるが如き感を得せしむる樣に裝置しなくてはならぬ、現今坊間に販賣せらるゝものには種々あるも其原理に至つては、熱源に直接火氣を用ゆるのと、溫湯によるのとの相異に過ぎぬ、今其要領に就て略記すると、大體溫室と運動場とを作る、溫室の大さに依つて雛の羽數は制限せらる、即二尺半平方に七八寸の高さとせば、二十羽より二十五羽は容れ得るのである
給溫の方法は溫室の後部に鐵管を橫へ、熱湯

を此に通じて室の空氣を溫むる裝置とし、管に直接雛の觸れざる樣少しく隔りて金網を張る、或は溫室の中央下にランプを置き、室の中央を貫いて烟道を設け、湯槽は此烟道を取卷く裝置となし、湯槽には前の如く雛の觸れざる裝置となす、而して運動場との界は口を狹くし、溫熱の急に發散することを防ぐ、運動場の廣さは任意なるも天井は硝子にて作り蝶鉸にて開閉を自由にするのが便利である、但し上部若しくは上側部に小孔を穿つて、空氣の流通をはからなければならぬ。

三　假母器の使用法

一、使用に先だつて、假母器の新古を問はず十分に消毒しなくてはならぬ、消毒劑としては石炭酸、アルボース等可なるも藥劑の臭氣を殘すは雛の衛生上宜しくない硫黄を燻煙するのは至極便利である。

二、雛の孵出に先だつて、假母器は低溫にして置かねばならぬ、而して雛の軟毛が乾いたならば、靜に此に移して其溫度は攝氏三十六度位に保つて置く、而して四日目位より三十度位に減ずる、二週間の後には二十六七度に減ずる、斯の如く次第

に低温して四五週の後には温原燈を消すのである、假母器の温度は、孵卵器の如く嚴密でなく共よいので、低温の比例及給温の日數等は、氣候の寒暖と雛の强弱によつて夫々斟酌しなければならぬ、少しく熟練すれば寒暖計的に温度を定めるよりも、自己の感覺にて加減する方が却てよいのである、大體温度高きに過ぐるよりも稍低温にて育てる方雛は丈夫になるものである。

三、温室の床には、柔かき蓆の類を布くのがよい、藁枯草等を其儘入れ置くときは、雛の足に纏れ爲に負傷することがある、又此等の布物は毎日清潔なるものと取換へなくてはならぬ。

四、天井には羽毛の軟かなるものを懸垂するがよい、然るときは雛は恰も母鷄の腹下にあるが如く温暖と快感とを得る。

五、其他一般に雛に對する注意は、天然孵化の場合と敢て異なるなし。

第七章 鶏の種類

一 鶏の體貌各部の名稱

第十圖

(1) 冠(單冠、薔薇冠、三枚冠、角狀冠、毛冠等あり)
(2) 肉髯　(3) 耳朵　(4) 顔面
(5) 胸　(6) 頸羽　(7) 背
(8) 鞍羽　(9) 簑羽　(10) 尾羽
(11) 主羽　(12) 副翼羽　(13) 覆翼羽
(14) 距　(15) 脛　(16) 腿
(17) 謡羽　(18) 覆尾羽　(19) 嘴

二 鶏の分類

鶏は其學名を(Gallus domesticus, Bries)と云ひ動物學上では脊椎動物(Vertebrata)の禽鳥部(Aves)で鶉雞類(Gallinaceae)の雞屬(Gallus)に入れてある、種類によつて骨

格形體等に夫々差のあるもので、其相異の點により、例へば毛冠肉冠の發育せる有樣だとか頭蓋骨の如何だとかを比較して分類する法がある、之は佛國のコルネワン氏に依つて行はれたもので、學術上に用ひられて居る。

第二は原産地の地域によつて分類するもので、例へは

一　亞細亞種

コーチン、ブラマ、ラングシャン、烏骨鷄矮鷄、長尾鷄の如く亞細亞の原産として知られたるもの、

二　英國種

ハンバーク、オーピングトン、ドーキング及び**セブライトバンダム**等、

三　米國種

プリマウスロック、ワイアンドット等、

四　地中海沿岸種

レグホーン、アンダルシャン、ミノルカ及び**スパニシ**等伊太利、西班牙即地中海沿岸諸國の原産として知られたるもの。

五　佛國種

ウーダン、ラフレッシ、クレブコール等。

六　ポーランド種

ポーランドの各種

七　土耳其種

然しながら余は今通俗的に之を大別して

一　實用鷄（採卵用種・卵肉兼用種・需肉用種）

二　愛翫鷄

三　鬪鷄

の三となし此等の中、比較的優良と認められ、現今多く飼養さるゝ鷄種のみに就て體貌特長等を記述せん、

採卵用種

元來鷄は山野に生育して居つたもので雁とか雉とかの様に、一年の中に子孫を

繁殖する爲に少數のの卵しか産まなんだものに相違ない、之を人類が飼養する樣になつては、必要の爲に種々なる手段によつて、多少にても其等が持つて居る特長を發展させ、或は卵を澤山產ますとか、體格を大きくするとか、乃至は羽毛を美しくするとか云ふ樣に改良に改良を加へて來た結果。今日に至つては夫々專用の鷄種が出來て來たのである。例へば採卵用種は、出來るだけ多產させ樣と云ふ目的の爲に繁殖飼養等に就て他の點を犧牲にして一方の發達ばかり望んだものであるから肉質だとか體量だとか云ふ方面では、一般に云ふと勿論優れて居らぬ、又此種は殆ど孵巢の念を沒却して居るもので、母鷄としては一般に役に立たぬ、併しながら體量に比して大卵且多產なることは遠く他種の及び難い所である。

レグホーン

採卵用種として最も早く我國に輸入されたもので、現今廣く各地に飼養されて居る種類である、此中白、褐、バフ、黑等の羽色が普通で又冠に單冠と薔薇冠とがある我國には單冠白色と褐色のものが多く、バフと黑色の**レグホーン**は之等に及ばぬ

此他シルバーダッキングホーン、ゴールデンダッキングホーン等あるも未だ我國に蕃殖して居らぬ。

第十一圖

白色レグホーン

原産地　は以太利で、余程古くから養はれたらしい其祖先は如何なる鷄であるか確然と判り惡いのであるが、スパニシ系から導たものであると云ふ説もある、以太利のリヴォルノーと云ふ港（レグホン港）の附近に飼養されて居る鷄をリヴォルチーズと唱へ、此等の漸次改良されたものらしい。

體貌　單冠種は、冠肉髯共に鮮紅色にして長大、雌の冠は顔の一方に倒れるものである脚は裸にして嘴と同じく黄色を呈して居る耳朶は白色にして長圓形、顔面は鮮紅色、眼は赤色、胴及び頸は中大、頸羽鞍毛共に豐富翼は

長大にして雄の尾は長き腰羽を有し、雌の尾は眞直にして能く摺疊す、一般に體軀は細く性質はよい普通種のものも又冠が稍異するのみである、羽色によりて數種の内種に別たるゝ。

白色レグホーン

此種は全體の羽毛が純白で、外觀の美と産卵力の旺盛なるとによつて、**レグホーン**種中錚々たるものである、頸羽、鞍毛等に黄色の羽毛を發生することがある、之れは勿論缺點と見るべきものではあるが、純粹種より得たるものも、往々此の事がある、同血蕃殖を續けた場合には殊に甚だしい、近來米國に於て改良され、二三年前より我國に輸入して居る白色**レグホーン**は從前のものより冠は稍小なるも、脚肢長く、體量又重く、一見優大の觀を呈して居る。

褐色レグホーン

レグホーン種中最も古いもので、西暦千八百五十三年に、伊太利のレグホーン港から米國に輸入され改良せられたものと云はれて居る。羽毛は外觀が**パートリッヂコーチン**に似て居る。雄の頸羽鞍羽は共に橙黄を帶だ赤色を呈して頗る美しい

胸及腿は濃黒色に輝き背肩は共に濃褐色、主翼羽及副翼羽は黒色をなし、下部は褐色の覆輪を付けられ、尾は黒色である。

雌は背及翼は暗褐色をなして各羽に黒色の輪條を持つて居る。頭、頸の羽毛は黄金色、胸は赤褐色尾は暗褐色をなし、主羽は黄金色の覆輪を付して居る。

褐色レグホーンは白色と同じく現今餘程我國各地に繁殖して居る。

バツフレグホーン

全體の羽色は淡黄色で、**バフコーチン**の羽毛と似て居る、且體量の他のレグホーン種に比して大きな點より見ても、**バフコーチン**より導いたものらしい、先年我國に輸入されたものであるが前二者の如く蕃殖して居らぬ。

褐色レグホーン

羽毛緑黒嘴と脚は黒色に稍黄色を含んだものである、體格は**レグホーン**中最小であるが稍早熟の點に優つて居る。

體量　雄は六百匁内外雌は五百匁内外を普通とする。

産卵數　産卵數一ヶ年百八九十個より中には二百個以上に達するものもある

卵量は平均十六、七匁、卵殼は白色を呈して居る、其中バフレグホーンは卵量は最大で、數に於ては稍他に劣る樣である。

レグホーンの長所

一　多産にして比較的大卵なること、
二　雛の強壯にして成長の速なること、
三　早熟にして早く產卵を初むること、
四　擧動敏活にして自活性に富むこと、
五　羽力強くして外敵に襲はるゝ患少なきこと、
六　交尾に巧なる爲、種卵として無種卵の少なきこと、

實際レグホーン種の育雛は、面白い位發育の速なるもので、四ケ月內外で產卵を初むることは珍らしくないのである、我國在來の羅遙の如く產卵期に達するに七八月乃至十ケ月も要するものと比するときは、育雛の費用に於て既に大に益して居ると云はねばならぬ、併しながら一方から長所として見らるゝのは、他所より見れば往々短所となることがあるもので、羽力の強き爲に管理に困難する場合があ

る、自活性に富むと云ふのは、一方から見ると食を貪ることが激しいので、困ることもある、併し之等は廣き邸園、農家の屋敷などで放飼する時には缺點と見られないのであるから要するに此種は採卵鷄中の優たるを失はぬ、

アンダルシャン

原産地　は西班牙のアンダルシャン地方で、十九世紀の中頃英國に輸入せられて改良されたる、産卵鷄中錚々たるものの一である、ライト氏は**白色ミノルカ**と**黒色ミノルカ**の交雜によつて生じたものと說いて居る、兎に角此種は本來藍灰色の鷄であるのが、黑色或は黑白混交の羽毛を出すことは珍らしくない、十羽の雛を孵化すると、必ず斯の如き羽色のものが二三は生ずる、故に標準的の羽毛を有する鷄は此種に於ては得易からぬものである。

體貌　大なる單冠を頂き、顏面と共に鮮紅色、眼は褐色又は赤黃色、肉髯は中長に懸垂して淡赤色丈高く、格恰稍細長し、耳朶は白色楕圓形にして大嘴は石盤青毛脛趾は共に銀灰色、羽毛の地は藍灰色にして雄は、頸、脊、鞍羽、蓑羽、謠羽及び覆尾羽は殆んど黑色に近き藍青色、胸は藍灰色の各羽に濃藍の覆輪を附す、雄の冠は顏面の一

側に倒れ羽毛は略全身が雄の胸部の如き邊縁(へり)ある羽毛に被はれ、只頭頸の部分は其色稍濃く後頸部は少しく薄くなつて居る、

第十二圖

アンダルシヤン

體量　雄八百匁乃至一貫匁、雌は七百匁内外を普通とする

産卵數　一年百七八十個より二百個の上に出るは珍らしくない、卵量十八九匁より大なるは二十一二匁に達す、卵殼白色、

アンダルシアンの長所

として特に擧ぐ可きは、大卵を産することにある、然も頗る多産である、卵量の大なるに至つては鷄中此種に及ぶものはないと云へるので

ある、此種は今より十數年前に我國に輸入されたのであるが、此特能を喧傳せられたるが爲に、鷄界浮沈の間に處しつつ各地に蕃殖されたもので、一時は世人が洋鷄と云へば直ちにアンダルシヤンを聯想した位である、一般に大卵の雌は數に於て劣るものであるか、獨り此種は兩長を維持して失はぬ、故に一年の產卵を重量にて表はすときには產卵總量の大なることが判るのである、性質は活潑ではあるが柵飼することも出來る、無論放飼には適して居る、雛の發育は良好で孵化後六ヶ月內外で產卵を初むるのが普通である、

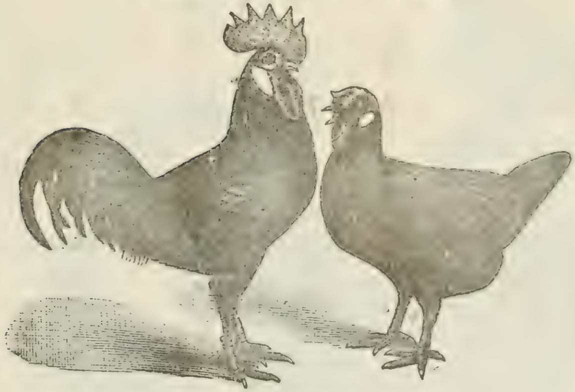
ミノルカ

原產地　は地中海のミノルカと稱する島で、黑色ミノルカの白面のもの即スパニシから淘汰されたものと云はれて居る、今から凡五十年も前に英國に輸入せられて改良せられたものである。

體貌　體の模樣は次に記載せるスパニシに余程よく似て居る、相異の主なる點は顏面の鮮紅色なること、肢の稍短かきこと等で格好がスパニシよりは稍粗野で

ある、雄の冠は極めて大なる單片にして鋸齒状をなす肉髯は長大にして冠と共に鮮紅色眼は赤褐色耳朶は大にして白色、肩廣く、胸も又廣くして、凸出す、頭は稍大鞍羽、頸羽は共に豐富、雌は大なる單冠が顏の一側に懸垂し眼を被ふて居る、臀部は殊に豐大其他大體雌に類す、

第十三圖



黑色ミノルカ

黑色ミノルカ

全體の羽毛は綠黑色で、嘴、脛趾は鉛黑色、現今**アンダルシヤン**と共に廣く我國の各地に蕃殖して居る、

白色ミノルカ

全體の羽毛は純白色、嘴と脚とは肉色を呈して居る、此等の點及び體格の優大なることによりて、**白色レグホーン**とは區別することが出來

體量 雄九百匁乃至一貫匁、雌は七八百匁を普通とする、

産卵數 一ヶ年百七八十個より二百個に達し、卵量は十八九匁乃至二十一匁、卵殼は白色、

ミノルカの長所 **アンダルシヤン**と殆んど伯仲の間に居る、即產卵數卵量共に一流のもので、雛も强壯で大抵六ヶ月內外で產卵を初める、放飼は勿論柵飼にも差支ない、外觀は**アンダルシヤン**の方が立派であるが、**ミノルカ**は前者と異り變色の雛を出さない故に、此點に於て却て飼養者が多い、要するに實用として**ミノルカ**鷄は良種たることを失はぬ、

スパニシユ

原產地 は西班牙で、地中海沿岸に蕃殖せる鷄種は多くは之より導かれてある位古く飼養された種類である、中世西班牙が通商貿易が盛であつた頃、英國其他諸國に輸入せらるゝに至つた、

體貌 顏面の白色であることは此種の特長である、一般に體が細長く外觀は輕

捷である、雄は大なる單冠を頂き肉髯又長大にして冠と共に鮮紅色耳朶は乳白色の顏面に接續して垂れて居る、頸長く頸羽は豐富、脊は稍平坦肩に張つて居る、翼は長大にして緊縮す、謠羽は長くして後方に彎曲す、肢は長く、脛に石盤色を呈す。

雌の恰好は略雄に類す、冠は余り大ならず、顏の一面に倒垂す。

第十四圖

黑色スパニシ

白面黑色スパニシ

通常黑色スパニシと呼ぶところのもので、我國にも以前輸入せられ、多少地方に蕃殖して居る、全體の羽毛は純黑色、

白色スパニシ

全體の羽毛が純純白色なるもの、

體量　雄八九百匁雌七百匁内外を普通とする、

産卵數　一ヶ年大抵百七八十個、卵量十六七匁、卵殼白色、大抵孵化後六七ヶ月に

て產卵を初む、

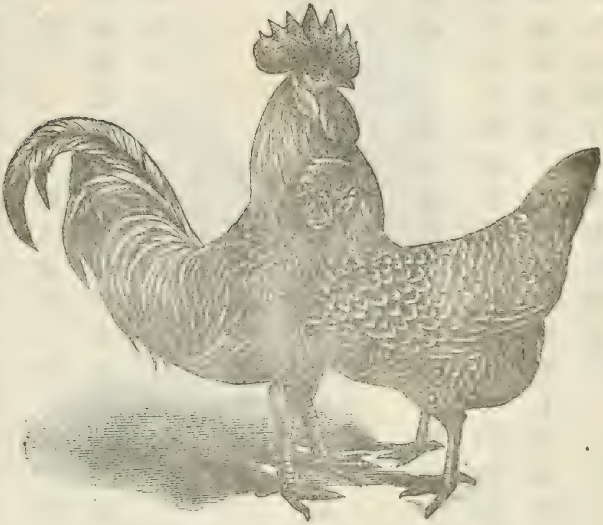
スパニシの長所　**スパニシ**は以前產卵鷄として唯一の鷄種で、採卵用として今も尙各國に養はれて居る、又形質の固定せる爲に採卵用雜種を作るには屢用ひらるる、然しながら雛も成鷄も共に比較的虛弱で、濕氣に犯され易い缺點がある、故に實用的價値に至つては**アンダルシヤン**、**ミノルカ**に一步を讓るべく、採卵鷄の第二流のものと云つてよかろうと思ふ、

アンコナ

原產地　以太利のアンコナ地方に於て、**レグホーン**の交雜により作出されたるものであると云はれて居る、

體貌　容姿**レグホーン**に類し、體稍太し、雄は可なり大なる單冠と肉髯とを有し顏面と共に鮮紅色、耳朶大にして白色、全體の羽毛は黑白の駁斑より成り、一見**ヴーダン**種の羽色である、脛は黃色に黑斑を有して居る、雌は雌性に特異なる諸點を具備する外はすべて雄に同じ。

第十五圖



アンコナ

體量　雄六百匁内外雌五百匁位を普通とする。

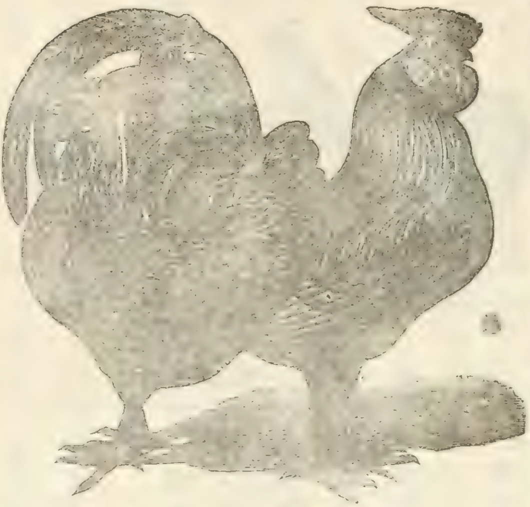
產卵數　一ヶ年二百個以上に達し、卵量十五匁乃至十七匁。卵殼白色。

本種は、西曆千八百八十年英國サウサンプトンの家禽品評會に出品されて以來漸次世人の注意を喚び輓近に至つては、多產鷄として頻りに各地に傳り初めた、我國へは明治四十年の初め東京澁谷の尾崎氏が輸入したのが始である、其特能に至つては**レグホーン**種と全たく同じものである。

バンバーグ

原產地 ハンバーグと云ふ名前の起りは、曾て英國で此種類の鷄に陳列した時に命じた名稱であると云ひ、又は此種は北獨逸から英國に輸入せられたもので、獨逸の輸出港の名を取つてハンバーグと付けたものだとの說もある、ライト氏の著書を見るとハンバーグに斑紋と斑條の二種があつて、此等は其原種を異にして居るもので、斑條種は英國固有の產、斑紋種は和蘭に原產して英國に輸入せられたものとしてある。

第十六圖



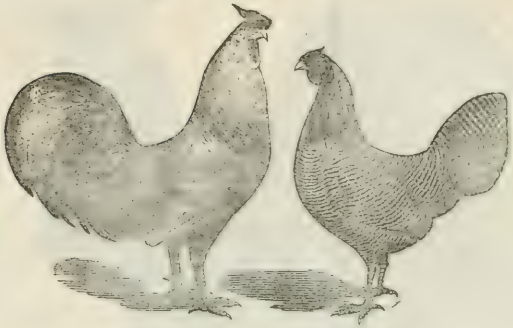
銀色ハンバーグ

體貌 雄は薔薇冠を頂き、余り長大ならず、美しく聳立して後部は細狹なり、肉髯は稍長き圓形にして冠と共に鮮紅色眼は赤色にして晴快、顏面は鮮紅色、耳朶は圓くして白色、頭頸共に中大胸は突出し頸羽、鞍羽共に豐富、尾羽は長く見事に彎曲し、脛は細くして中長、嘴、脚は角色、

雌は體形凡雄に類して居る、鮮紅色の稍小なる冠と肉髯とを持つて居る、

ハンバーグは外觀の美しい鷄種で、其羽色の地を大別すると、金色、銀色、黑色となり、更に金色銀色の中に、斑紋と斑條との二色がある。

第十七圖



銀色斑條ハンバーグ

銀色斑條ハンバーグ

羽色の地は銀白色に輝て、各羽に綠黑の斑紋を持つて居る雄にありては、頸羽及び鞍羽は各羽の尖端黑く胸腹等の羽毛にある斑紋は殊に大きく綠光を放つて居る、翼を横切つて二條の黑紋が並列して居る、謠尾は銀白色にて其尖端は黑紋を有して居る、眼は榛色、嘴、脛趾は共に鉛色、

雌の羽毛も畧雄と同じ様である、黑紋は雄よりも小、

金色斑紋ハンバーグ

金栗毛の地色に黒紋を有して居る、斑紋の有樣は銀色と同じ樣である、稍相異と見るべきは、雄の尾が黒色で、頸羽、鞍羽には黒條を持つて居る、眼は赤色にして脛と趾は共に鉛色雌も略相類して居る。

銀色斑條ハンバーグ

雄は頭、頸、脊、肩、胸、腹及び腿は銀白色、覆翼羽の上部には黒色の横條がある、下部は銀白に黒線が畫かれて居る、蓑尾及覆尾羽は黒色で之に銀白の縁を有して居るのが如何にも美しく見ゆるのである、眼は赤色、脛及趾は共に鉛色、

雌は頭、頸、主翼羽共に白色、頸羽の下半に黒斑を有して居る、他の羽は銀白色に黒横線を畫かれてある。

金色斑條ハンバーグ

金栗毛の地色をして居る、斑條の有樣は銀色のものと同じである。

體量　雄は六百匁、雌は四百匁位を普通とする。

產卵數　一ヶ年二百個乃至二百二十個、卵量は十三四匁位が普通で、大低五六ヶ月にて產卵を初める。

ハンバーグの長所　としては多産なることと、餌量の少なきこととを擧げる、且産卵數に於ては此種の右に出るものは殆どないのである。故に卵量は大ならざるも産卵總量に於ては比較的多い、其餌量に至りては略**レグホーン**の半ばにて足るを得べし、産卵數の多きことは飼養者には心地のよいものである、又此種は體は余り大ならざるも、肉味は採卵種中最も佳良なるものである、尚老年となり産卵力の衰へぬことも他に比類のなき所である、**ハンバーグ**は一般に擧動輕敏で羽力強く放飼するも外敵に襲はるゝ恐は少ないのである、只此種の缺點としては、惜しむらくは雛が比較的虚弱である。

要するに**ハンバーグ**は羽毛の美なることに於ては優に賞觀の價値を有し、又採卵用鷄として廣き場所に放飼するに適して居る。

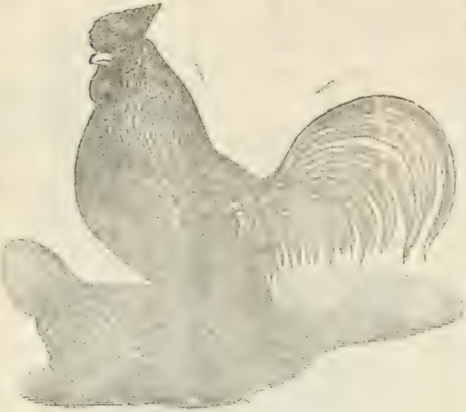
レットキャップ

原産地　は英國のヨークシャーにして、此處に蕃殖せる金色斑紋**ハンバーグ**から導いたものとの説がある、兎に角羽毛は金色斑紋**ハンバーク**に類して居る。**レッ**

トキヤツプとは赤帽と云ふ事で、之種の冠が非常に大なる薔薇形で、紅色をして居る所から遂にかく呼ばれたものである、

體貌　大なる眞紅の薔薇冠が著しい、一見してハンバークの冠などとは區別することか出來る、形體もハンバークよりは偉大で、肩、胸共に廣濶肉髯は長圓形にして耳朶顔面と共に鮮紅色、眼は大にして赤色、嘴は稍長く角色、鞍羽は長くして豐富、翼はよく褶伏す、腿、脛共に中長、全體の羽毛は略金色斑紋ハンバークに似て居る、即雄の頭、覆翼羽は赤褐色の地に黑斑を有す、主羽及び尾は黑色、嘴、脛は角色或は鉛青色、

第十八圖



レツドキヤツプ

雄は冠耳朶肉髯共に雄よりは小さく頸羽は赤色に斑條を有し、肩、背の羽毛は濃金栗毛、各羽の尖端に半月形の青黑色の斑紋を有して居る、

體重　雌八九百匁雄八百匁内外を普通とする、

産卵數　一ヶ年に百七十個より二百個位に達し、一個の卵量は十四匁乃至十六匁、卵殼は白色、

本種は觀賞の爲にも飼養されて居るが採卵用として又價値がある、體質も強健肉も豐かにして味又佳良(かれう)である、要するに實用と愛翫(あいぐわん)とを兼ねたる鷄種である、

ポーランド

原産地　**ポーランド**は一に**ポリツシ**とも云ひ原産地が何處であるかと云ふことに就ては説が區々である、卽ち**ポーランド**國の現産であると云ふ説もあり、英語で毛冠種のことをポールドと云ふ所から、變化して遂に**ポーランド**の名を得たものであると云ふ説もある、維新前に我國の所々に**ランケイ**と云ふ鷄か飼はれて居つた、よく産卵する種類で、牡丹**ランケイ**などと云つて毛冠を頂いて居つたものである、**ランケイ**は蘭鷄にて和蘭船が長崎に來往した時分渡來したものと考へられる、蘭鷄が今日の**ポリツシ**鷄であつたならば、兎に角此鷄種は和蘭には盛に蕃殖し

たものに相違ない。

體貌　毛冠を頂て居る爲に頗る珍奇の外觀を備へて居る、雄の肉冠は極めて小さく、V字の樣な角狀を呈して居る、時として肉冠が痕跡のものもある、肉髯は殆どなく頤の邊には羽髯を生じて居る顏面赤色、耳朶褐色、眼は褐色にして晴快、頭稍大嘴は鉛色、鼻孔大にして上緣は隆起するも、大部分は毛冠に被はれて居る、鞍羽は豐富、翼は大きくよく褶收す、尾は長大に發育し謠尾覆羽は美、胸は突出し、體軀は稍細長く、腿脛中長にして稍細し、

第十九圖

銀色ポーランド

雌は毛冠が圓く、羽毛は密生して居る尾は大きく、稍廣く其他の部分は大體雄に類す、

ポーランドは羽色によつて銀色斑紋、金色斑紋白毛冠等の內種に別たれて居る

銀色斑紋ポーランド

細別すると此中にも又內種があるが、普通銀色ポーランドとして知られて居るものは、銀白色の地色に黒斑紋を有して居るもので、雄の肩羽は銀白に黒覆輪を取つて居る、斑紋の付したる有様は、稍ハンバーグに似て居る、眼は赤橙色。嘴、脛は角色又は石盤白、

金色斑紋ポーランド

此種はポーランド鷄中最も古い種類であると云はれて居る、銀色のものとの相異は、羽毛の地が褐金色をなして居ることにある、嘴、脚色等も又同じ。

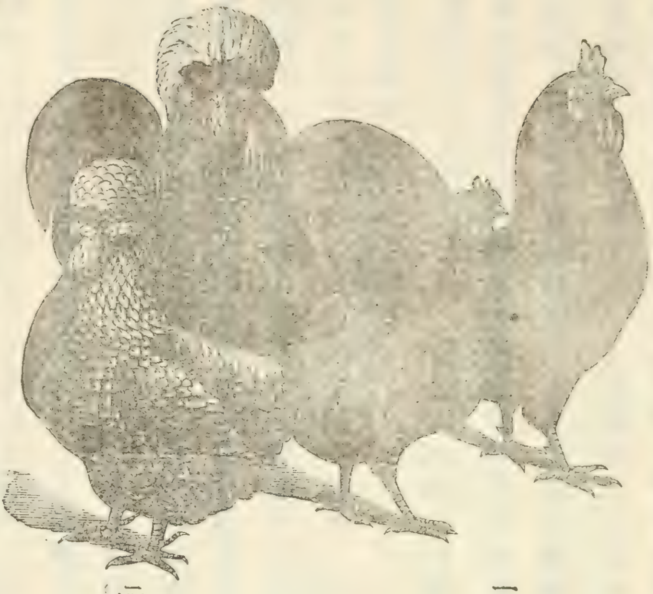
白毛冠を細別すると又澤山の內種がある、其中普ねく知られて居るのは白毛冠黒色ポーランドである、純白の毛冠と漆黒の體羽とを有し、愛翫兼用として飼養されて居る、

體量　雄は五六百匁、雌四百五十匁內外を普通とする。

産卵數　一ケ年百二三十個より百五六十個を生み、一個の卵量十四五匁、卵殼は**白色**、

元來本種は產卵鷄であつたものを久しく愛翫の目的に飼養せし結果、產卵の數を減じ體質は概して强壯でない內種の中では金色ボーランドが比較的多產鷄として養はれて居る要するに本種は愛翫鷄中の多產なるもので實用としては左程賞すべき鷄種でない

第二十圖



（一）ヲグシヤン　（二）ツーダン

ウーダン

原產地　は佛國にして、首府巴里の西方にあるウーダンと稱する都市の附近にて多く養はれ、此名を得るに至つたものである、**クレブコーア、ドーキング**等の交雜によつて作成せられたるものであるといふ、又は

銀色ホーランドの配合によりて生じたとの説もある、

體貌　中大の體格を有し、五趾を備へて居ることが特長である、又毛冠を頂き羽髯を生じて居る、雄の頭は中大にして稍廣く、毛冠は大きく毛質は頸羽と同じである、木葉形の肉冠を有し、肉髯は稍長く、冠顔面と共に鮮紅色、嘴は短かく、鼻は濶く眼は大きく赤黄色を呈す耳朶は白色頬顋の羽髯は豊富胸は良發育し圓大にして突出す、頭は中長、頸羽、鞍羽共に豊富、翼は中大にして緊收し、尾は充分に發育し謡羽長く彎曲す、全體の羽色は黒白の碁石交りにして、黒と白との部分は殆相半す、併し年を經るに從ひ白の部分を增す傾を持つて居る樣である、脚は短かく脛趾は淡肉色に黒の斑點を交へて居る、

雌は小なる肉冠を有し、毛冠は恰好よき球狀を呈して居る、後體は圓大に發育し尾羽は廣く、全體の羽色は雄と同じことである、

體量　雄七八百匁、雌は六百匁内外を普通とする、

產卵數　一ヶ年百五六十個を產み、一個の卵量十五匁内外、孵化後五ヶ月内外に產卵を初める、

ウーダンの長所　としては二三の數ふ可き點がある、產卵總量も可なり多く、比較的早熟で、採卵用としても利益ある鷄種であり、又骨細く肉味も佳量なるが故に同時に需肉の目的にも適つて居る、其他體質壯健にして交尾力强きが故に、之の雄を配して兼用一代雜種を作るに適當なる事等で、佛國種中優良なる鷄種としては廣く養はれて居る、

ラフレッシ

原產地　は佛國にしてサートの西北の都市ラフレッシの附近に養はれて此名を得るに至つたものである、佛國では數百年も前から飼養して居つたと云はれて居る、後英國に輸入せられ茲にて淘汰改良されたと稱せらる、

體貌　雄は體軀中大頭は强勁にして長く、脊は廣く、胸は充實にして廣く婉曲す頸羽鞍羽は共に豐富、脚は長くして一見輕壯の觀を呈して居る、頭は中大、最奇なるは冠が二個の如き形をなして居ることにある、肉髯は長く廣く豐かに懸垂し、冠顏面と共に鮮紅色、眼は赤黃色、翼は中大にして强くよく褶まる、尾はよく發育し謠尾

は廣濶、

雌は丈低く、後體よく發育して肉冠其他の各部雄よりも小。

黑色ラフレッシ

全體の羽毛は黑色、脚は灰色、嘴は角色、ラフレッシ中の最も古い鷄種と云はれて居る、此他

白色ラフレッシ

青色ラフレッシ

等の内種を區別して居るも、重もに飼養せられて居るのは黑色の種類である

體量 雄九百匁乃至一貫匁、雌は七百匁内外を普通とする、

產卵數 一ケ年百四五十個、一個の卵量十七八匁、卵殼は白色、

ラフレッシは、寧ろ卵肉兼用とも稱すべき鷄種で、肉の柔軟にして美味なること肥育し易きことに於て、需肉の目的にも適つて居る、佛國の外では余り養はれて居らぬ、我國にても種禽として少數を見るに過ぎぬ、

卵肉兼用種

實用として最も廣く養はれて居るのが卵肉兼用鷄で、其中世界で最も勢力を得て居るのは米國種である、卵肉兼用と云ふ名稱は無論便宜上のもので、此中には或は採卵專門の鷄を凌ぐ位產卵力に富んで居るものもあるし、又肉用として知られたる鷄種に劣らず肥肉性のものもあるが併し概して何れにも中位の性質を有し實用として飼養するのには安全な種類である、今兼用鷄一般に通ずる特性の二三を擧げて見ると、

一　卵用種よりも性質の穩なること、

二　體質の强健なること、

三　卵殼は褐色又は赤色を帶ぶること、

等である、第一の性質を持つて居る爲に採卵用種よりは管理が余程容易で、狹い場所にも飼養することが出來る、故に廣き宅地を有して居らぬ場合、又は他の障害の爲に放飼することの出來ない場合に小柵園の中に養つて卵を得るには兼用種が

適して居る又第二の性質即體質壯健で病氣に斃れ悪いと云ふ點を利用して、多數の鷄群を飼養するものに安全である、米國の大養鷄場、及び我國でも關西地方の如く專業的に稍多數を飼養して居る所は大抵兼用種である、又第三の卵殼の帶紅色であることは經濟上に有利である、卽ち我邦人の嗜好として、殼の白い卵よりは紅色の卵の方か選ばれるので、從て市場に於て常に賣行がよいのである、

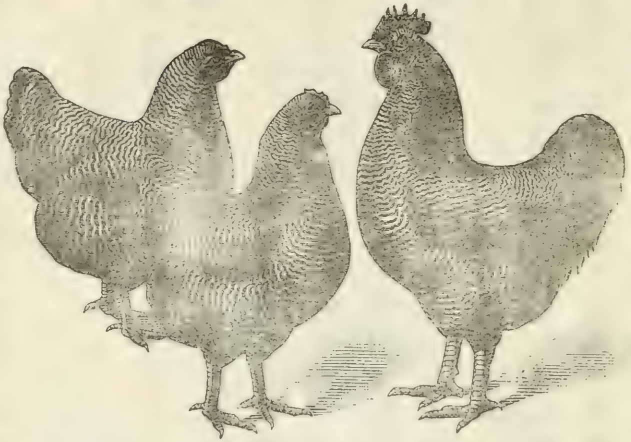
斯の如く卵肉兼用種は、飼育上幷に經濟上に有利の點を持して居る所から、近頃益飼養者が增加して來る、殊に今後鷄肉の需要が盛になるに連れて、兼用種が鷄界に持て囃さるることは疑のない所である、左に卵肉兼用種中著名なる數種を解説せん、

プリマウスロツク

原產地 米國にて作成せられ、西暦千八百六十八年にマサチユーセッツ州ウォーゼスターの家禽共進會に出品されて以來漸く米人の注意を喚ぶに到つた鷄種である、デゥリーゲン氏によると、プリマウスとは、マサチユーセッツ州の都市の名稱で、之鷄

種が體質の頑健なる所から、ロック即岩石と云ふ語尾を附加したものであるとしてある、此種の成立に就ては**フェルチ**氏は、**ドミニツク**と**バフコーチン**との交雜によりて導いたものであると說いて居る、又は**ドミニツク**と**黑色ジャヤウア**との配合より得たものであると云ふ說もある、要するに說は一定して居らぬ、

第二十一圖



連斑プリマウスロック

體軀　體軀重大にして、稍圓短の恰好をして居る、雄の單冠のものは其大さ中形、肉髯薄くして中形耳朶中大にして薄く冠肉髯顏面と共に赤色、眼は大きく赤褐色、頭中大、頸中長體脚等一般に幅廣く、頸羽、鞍羽共に豐富、翼は中形にして高く緊收し、尾は廣く、謠羽は短かくよく彎曲して居る、嘴、脚共に黃色、

雌は、雄よりも體は充實し、各部小形、後體は殊に圓く太く豐かに發達して居る、

漣プリマウスロツク

羽色は薄墨色と白色との重りよりなり、一見漣の狀を呈して居る、プリマウスロツク種中の最も古きものとして知られ、我國にも各地に蕃殖されて居る、近來米國にては、諸所に此種の專養家ありて漸次羽色は改良せられ、輪紋漣紋形等美的なるものが作出せられて、我國に多少蕃殖して居る、

白色プリマウスロツク

全身の羽毛純白色にして實に美觀の鷄である、我國へは約二十年も以前に輸入せられたものであるか、プリマウスロツクの普及せるに反し之種は殆ど絶滅の有樣であつた、然し乍ら數年來頗る呼聲を高め、現今にては所々に優物を見に至つた

バフプリモースロツク

羽色は全體淡黃色にして姿勢體格等凡て他の內種のものと相異して居らぬ、之種にはバフコーチンと淡色ブラマの交雜により生せるものと、ロードアイランドレツドに白色プリマウスロツクを配して成れるものとの二系統があると云はれ

て居る、我國には未だ多數を見ない、

體量　雄は、九百匁より一貫二百匁位に達するのは珍らしくない、雌は七百匁乃至九百匁位を普通とする、

產卵數　一ヶ年百八九十個位を產み、卵量は一個十六七匁位を普通とする、卵殼は赤褐色雛は六ヶ月內外にて產卵を初むるものである、

プリモースロツクの長所

一　體質強健にして雛は病氣に犯され難し、

二　產卵總量の比較的大なること、

三　肉味佳良にして豐富、雄鷄は割鷄として肥育するに適すること、

四　母鷄として良好なること、

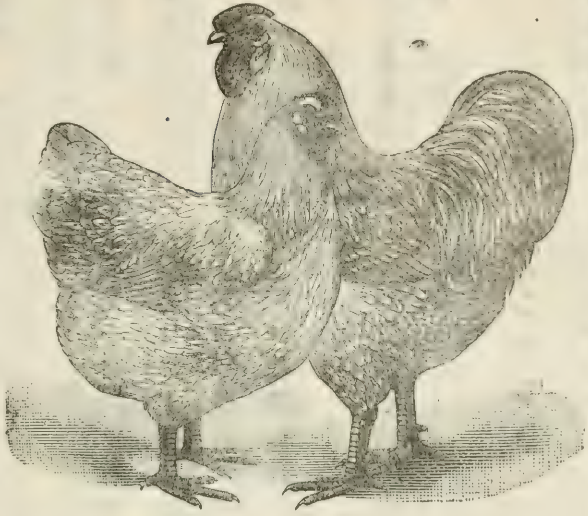
ワイアンドツト

原產地　米國に於て銀色ハンバークと淡色プラマとの配合によつて成立したものであると云はれて居る、即ち體の恰好はプラマに酷似して居る、

體貌 雄は頸短かく、體は充實して圓く太く、肢は中長、脚毛なく、脛は丈夫にして稍短かく、脊は廣く寬かく頸羽は豐富、後體には軟毛を叢生す、薔薇冠は稍弓狀をなして頭に密着す、頭は小肉髯中長、耳朶中長にして冠肉髯顏面と共に赤色、眼は橙褐色、翼は中大、尾は短かく謠羽はよく彎曲す、

雌は大體雄に似て各部小形、後體部は豐富に發育して居る、

第二十二圖



ワイアンドツト

銀色ワイアンドツト

羽色の地は銀白色にして、之に黑覆輪の斑紋を畵いて居る、雄の頭部、肩部の羽色は白色、頸羽は各羽銀白色に黑條を有して居る、翼を褶むときは面に二條の黑色の横斑を列ね、尾は緑黑色、脛趾は黃色、眼は赤橙色、

雌は眼、脛、趾の色は雄と同じく、羽色は頭、頸羽は銀白色に黒條を有し、頸の下部腺腿、覆尾羽等は銀白色に黒の覆輪を有して居る、

金色ワイアンドツト

羽毛の地は黄金褐色にして、之に銀色のものと同じく黒の斑紋を附して居る、只銀色種との相異は、白色の部分が之にては金栗毛をなして居る、

白色ワイアンドツト

銀色ワイアンドツトより作出せられたとも云ひ、又は**トーキング**より導かれたとも云ひ、**薔薇冠白色レグホーン**の交雜より生じたとの說もある、前二者よりは稍新らしき內種である、全體の羽毛は純白色、其他凡て銀色のものと異なるなし、**ワイアンドツト**は約二十年前我國に輸入せられ、金色種と銀色種は多少蕃殖して居つた、近頃になつては**ワイアンドツト**の優良なるものが米國から輸入せられて稍擴まりかけて居る、右の他**ワイアンドツト**の內種には

一　バートリツヂワイアンドツト

二　バフツレスドワイアンドツト

三　黑色ワイアンドツト
四　ドミニツクワイアンドツト
五　ブリユートレストワイアンドツト
六　銀斑條ワイアンドツト

等が作出せられて居る、然しながら未だ我國に於て蕃殖を見ざるものである

體量　雄は九百匁乃至一貫二百匁位、雌は七百匁内外を普通とする、

產卵數　一ヶ年百五六十個を產み、一個の卵量十四五匁、卵殼は赤褐色、大抵孵化後六七ヶ月にて產卵を始む、

ワイアンドツトは、米國に於ては兼用種としてプリマウスロツクと同じく貴重せられて居る、我國に於ては、之迄プリマウスロツク程人々の注意を呼ぶに至らなかつた、其理はワイアンドツトの方が卵量、產卵數共に稍劣ると考へられた爲かも知れぬ、然しながら肉質佳良にして豐富、性穩和にして柵飼するに適し、又母鷄とするも孵化育雛に巧なるなど實用的の價値は少なくないのである、要するに卵肉兼用種中プリマウスロツクと相伯仲するの良種である、

ドミニック

原産地　米國に作成せられたる種類にて、米國種中最も古き鷄種として知られて居る。

體貌　姿勢正しく稍四角の體形を持つて居る、羽毛は一見**プリマウスロック**に似て、黑の横線は之よりも少しく細かく畫かれて居る、雄は前方の廣き薔薇冠を頂き顔面、肉髯耳朶と共に赤色、頸羽、鞍羽共に豐富、胸は突出し、頸と肢は中長、翼は中形にして能く褶まり、尾はよく發育し、謠羽は恰好よく彎曲す、嘴、脛共に炎黄或は黄色。

雌は大體雄に似て各部小形、體はよく充實す。

體量　雄八百匁内外、雌は七百匁位を普通とする。

産卵數　一ヶ年百五六十個、一個の卵量十五六匁、卵殻は薄き褐色。

ドミニックは肉の歩合多く、容易く肥膃し、其味も優良である、體質も强健にて雛の發育は良好、又母鷄とするも極めて恰適して居る、蓋し實用鷄の一種たり得べき

ものである、

オーピングトン

原産地　千八百八十六年、英國オーピングトンのウキリアム、グック氏によつて作出されたものと稱せられて居る、其成立に就ては黑色ラングシャン黑色プリマウスロック等の交雜より導かれたものであると云はれて居るが、其體姿より察するときは、コーチンの血液を混じたるかとも考へらるる。

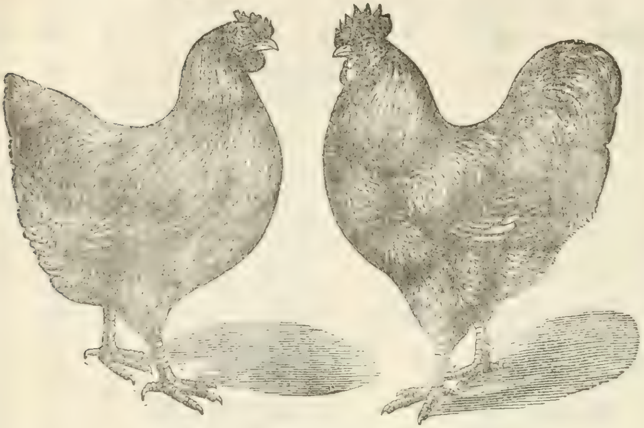
體貌　雄は中形の單冠を頂き、肉髯耳朶は中形にして顏面冠と共に鮮紅色、眼は暗色頸は稍長く、脚は稍短かく、胸は濶くして圓く、肩廣く、脊又廣く稍短し頸羽、鞍羽共に豐富、翼は中形、尾は廣き謠羽と側羽にて被はれ、嘴は强固にして彎曲す。

雌は體形略雄の如く各部一般に小。

バフオーピングトン

一見バフコーチンの脚毛の無い鷄である、全體の羽色はバフ即淡黃色にて頗る美觀を呈して居る、嘴、脛趾は共に肉黃色、時として脚毛を有する雛を生ずることよ

第二十三圖



バフオーピングトン

り見るも、バフコーチンより導いたものと考へらるゝ、數年前我國に輸入せられて以來時好に適し、目下頻に各地に蕃殖しつゝある。

黑色オーピングトン

オーピングトン中、最も古い種類として知られて居る、全體の羽毛綠黑色、嘴、脚は共に黑色。

白色オーピングトン

全體の羽毛白色、嘴、脛及び趾は共に肉黃色

此種は千八百九十年頃に前記のクック氏が**白色ドーキング**、**白色レグホーン**、**黑色ハンバーグ**、**淡色ブラマ**等の交雜から得たと云はれて居る。

體量　雄は九百匁より一貫二三百匁位に

達し、雌は九百匁内外を普通とする。

産卵數 一ヶ年百六七十個を産み、一個の卵量十六七匁、卵殼は暗褐色、雛は大抵六ヶ月内外にて産卵を初む。

オーピングトンは近來大に聲價を高めた鷄種である、羽色の美しきこと、雛の成長速なること、體質強健にして然も擧動穩和なること、肉味の佳良にして肥育し易きこと等の爲に、今や兼用種屈指の鷄と云はれて居る、遠からず我國各地に普及するに相違ない。

名古屋コーチン

原産地 明治の初年、愛知縣名古屋市近傍に於て、**バフコーチン**と我國在來の地鷄等とを種々に交雜せしめて出來たものである。

體貌 **名古屋コーチン**は上述の如く、作出の日尚淺く、未だ一種類として確然と各部の標準を示し得べき程に固定して居らぬ樣である、然しながら之を一般から見ると、雄は中形の單冠と肉髯とを有し、此等は顏面耳朶と共に鮮紅色をなす、胸、脊

共に廣く、腿、脛共に太し、全體の羽毛淡黄色をなし、脚毛を有す、バフコーチンと稍類似の觀を呈するも、脛趾の鉛色なること尾の主羽複羽等に黒色を出すこと等に於て異なつて居る、又脚毛を欠くものは甚だ多い、雌も各部殆ど雄に類して居る。

體量 雄一貫匁内外雌七八百匁を普通とする。

産卵數 一ヶ年百七八十個の産卵をなし、一個の卵量十五匁乃至十七匁、卵殼は赤黄色。

我國の養鷄界を見ると自ら二派がある、即關東派と關西派とに大別することが出來る、關東にては重に洋鷄を飼育して居るし、關西にては專ら名古屋コーチンを養つて居る、從て地方によつて此鷄の評は異なつて居るが、兎に角我國の風土に適して居る實用的の鷄であると云ふことは、漸次飼養地の範圍が廣まつて來る事實に見るも爭はれぬことである。

肉用種

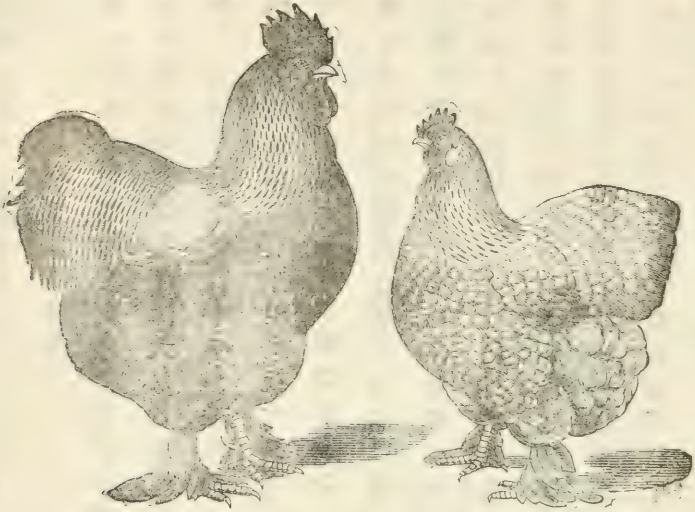
肉用として知られて居る鷄種も又、ある年齡の間は相應に産卵するもので、卵肉

兼用の目的に飼養するも随分利益のあるものである、概して體量は重く、擧動緩慢で自活性には乏しい、飼育し易きが故に割鷄として賣捌く等には適して居る、然しながら單に肉を得ると云ふ目的で鷄を養ふには、我國の現下の狀態では未だ充分の利益を得べきかは疑問である、肉用種の養はるるは他に長所を有して居るからである。

コーチン

原産地　交趾支那の原産であると思はれて居つたのは誤で、全くは支那の中部及北部に初めて育成された鷄種である、以前我國では**コーチン**のある内種を**クキン**と呼んで居たもので九斤と書かれて居る、之は體量が大凡九斤位あると云ふ所から**クキン**と呼ぶに至つたと云ふ説はあるが、之は正しくない様である、和蘭語では**コーチン**を**クキン**と發音するので、此鷄が和蘭の船で渡來した爲に此語が稱用せられたのだと云ふ方が正當である様に思はれる、此種は清國上海港から千八百四十三年に英國に輸入せられヴィクトリヤ女王に飼養されたと云ふ、而して英國

第二十四圖



パートリツコーチン

にて改良せられ亞米利加獨逸等にも漸やく傳播するに至つた、

體貌軀幹偉大、頭は小、嘴は彎曲して短かし、雄は小形の單冠を頂き、肉髯は中長にして冠と共に鮮紅色、顏面耳朶共に赤色、眼は大きく晴快にして赤栗色、頸は短かく廣くして彎曲し、背は短かく殊に廣し、胸は濶大、體一般に短し、頸羽、鞍羽共に豐富、翼は短かくして小、腿稍短かくして丈夫、尾は短かくして廣く、脛は太く外側に羽毛を生ず、外趾及び中趾も又羽毛を附く、

雌は體形略雄に類し各部分脊に比して小、且頸、脊等一層短かく、後體部は非常

に豐潤に發育し、羽毛夥多、尾は短小、頸羽は雄よりも少なく姿勢は前方に傾く、

バフコーチン

體の大部分の羽毛淡黃色にて、雄の頸羽、鞍羽は濃黃に輝き、尾は軟かくて其色暗黃、嘴脛趾は共に黃色、偉大なる體軀を持して悠々と濶歩する樣は、威嚴と美觀とを備へて居る、此種は、コーチン種中最も古く成立せられたるものと云はれて居る我國の各地に多く蕃殖せられて居る、

パートリッヂコーチン

嘴は黃色、脚は橙黃色、雄の頭部は橙紅色、頸羽及び鞍羽は橙黃色にして各羽の中央に縱の黑條を有す、脊及び肩部は赤褐色覆翼羽は綠黑色、副羽の外側は赤褐にして內側と尖端は黑色、主羽は外側暗赤褐色、內側は黑色、胸、脛羽及び尾は黑色。

雌は體部の羽毛は黃褐色、頭は濃褐色、頸羽は橙赤色にして各羽の中央に廣き黑色の斑條を有し、主翼羽は暗褐色、副翼の內側は黑褐色、外側は淡褐色の斑紋を有す

此種は羽毛の美なる爲に西洋にては觀賞の爲にも多く養はれて居る。

白色コーチン

雌雄共に全體の羽毛純白色、嘴、脛趾は共に黄色、眼は黄淡又は眞珠色。

黒色コーチン

全體の羽毛眞黒色にして綠靑輝を放つ、眼は暗赤色或は黒褐色、脛趾は灰黄色のもの或は黒黄色黒灰色等のものあり、嘴は帶黄色若しくは帶黒色、

郭公コーチン

郭公色の羽毛を有するもの。

絹羽コーチン

絹絲狀の羽毛を裝つて居るもの。

靑色コーチン

此三者は共に廣く飼養せられて居らぬもので、餘り勢力のない内種である、此他にバフコーチンより導かれて殆ど一の内種とも見得べきものは我國の名古屋コーチンである、之に就ては既に卵肉兼用種の範圍に於て記述してあるから玆には略する。

體量　雄は一貫二三百匁より大なるは一貫五六百匁に達するものも往々ある

雌は一貫匁内外を普通とする。

産卵數　一ヶ年百二三十個より百四五十個、一個の卵量十六匁乃至十八匁、卵殻は赤褐色。

コーチンの長所

一　體質の頑健なること、

二　體格絶大にして肥盈し易きこと、

三　管理は極めて容易なること、

四　母鷄として適當なること、

五　粗食に甘んずること、

六　外觀の立派なること、

等で肉用鷄中の錚々たるものである、稍欠點とも見るべきは、肉質の余り佳良ならざること、比較的胸肉に乏しきこと、雌は往々脂肪過多症に陥りて産卵を休止し甚だしきは頓死を招く等のことがある、然しながら二三年の間は可なりに産卵もし又母鷄として利用し得るが爲に頗る便利な鷄種で副業的に廣く飼養せられて居

る。

ブラマ

ブラマ　印度のブラマプートラ河沿岸の原産地であると云ふ説がある、實際左樣であるかは確然して居らぬ樣である、或は北米合衆國に於て作成せられ、前世紀の中頃英國に渡入し爾來各地に蕃殖されたとも云はれて居る。

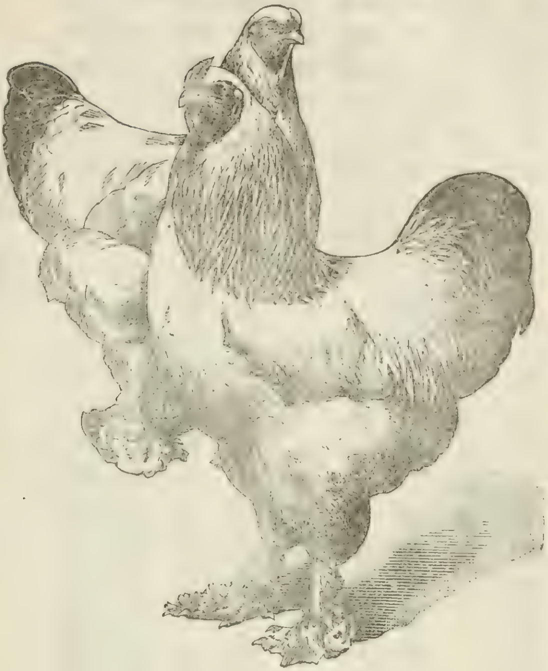
體貌　體軀偉大、雄は頭部中等、嘴は根部厚く强健にして先は婉曲す、眼は中大にして赤橙色、冠は三枚形にて大きさは中等、肉髯中大、耳朶薄く長く肉髯と共に鮮紅色、顏面は赤色、頸羽密生し、脊は廣くして平坦、胸は圓濶にして充實し前方に突出す翼は小さく短かくして强く、尾は廣く短かく謠羽又短し、脛の長さ中等外側には羽毛を生じ外趾、中趾も同じく羽毛に被はる。

雌は頸、肢、冠、頭、嘴等短かく、胸部圓く、後體部は發育よく又軟毛に富む、其他大體に雄に類して各部小。

淡色ブラマ

羽毛は一體に白色の部多し、即ち雄の頭部は白く蓑羽は白色の地に深黒色の縦線を有して居る、鞍羽は白色の地に石盤黒色の條を有して居る、主翼羽は黒色、副翼羽は上面は黒く下部は白色尾は黒くして青輝を放ち、覆尾羽及び蓑羽は黒に白色の外縁を附して居る、此他の部分は白色脛趾は帶赤黄色にて白色に黒の斑ある羽毛を生じて居る。

第二十五圖



淡色ブラマ

雌は概ね雄と同じく、頸羽大尾等には黒に白色の覆輪を附し雄よりも白く見ゆ。

暗色ブラマ

形態は稍異なるも羽色は**パートリッヂコーチン**に類して居る、雄の脛羽及鞍羽

は銀白色に黑の縱條を有し、頭、肩及び脊は銀白色、胸羽、覆尾羽は黑色、翼羽は横帶を有し、副翼羽は內部黑く外部白色、腹、後體、脚、腿等の羽毛は黑色、脛趾は共に黃色。

雌は頭羽は銀白色、頸羽は黑くして白色の緣を附して居る、其他概ね雄に同じく羽の模樣大體**パートリッヂコーチン**の雌に似て居る。

體量　雄一貫二三百匁、雌一貫匁內外を普通とする。

產卵數　一ヶ年大抵百四十個內外、一個の卵量十六七匁、卵殼は赤褐色。

ブラマは、其性質特能**コーチン**種と略相等しく、彼の如く自活性には乏しく、又脂肪過多症に陷り易い、肉味は**コーチン**に優るも然しながら**コーチン**の方が粗食を以て養ふことが出來る樣である、我國には約二十年前に輸入せられ、淡色種の方が多く蕃殖されて居る、管理に容易に、蟄巢の念盛なる等の爲に、**コーチン**と同じく飼養者の多き鷄種である。

ラングシャン

原產地　支那の北東部滿洲地方で育成された鷄種である、西暦千八百七十二年

英國ダーリントンの海軍士官クロード氏が、支那北部より英國に持歸つて改良せられ、原産地の地名によつてラングシヤンと呼ばるるに至つたものである、

體貌　體重大なり、雄は頭稍小、嘴は丈夫にして彎曲して居る、中大なる單冠を頂き、肉髯中長、冠、顔面、耳朶と共に鮮紅色頸の長さ中等、脊は長く後部が次第に高まつて居る、尾は中長にして丈夫、肺は濶く突出し腿は中長脛は長くして強固、脛の外側より外趾の先に至るまで稍疎に羽毛を生じて居る、四趾は長くして開張す。

第二十六圖

黒色ラングシヤン

雌の尾に扇状をなし、各部雄に類して一體に小形、

黒色ラングシヤン

全體の羽毛は緑黒色にて美光に輝て居る、眼は榛色、嘴、脚は黒色、趾間の皮膚は稍赤色を帯びて居る、此内種はラングシヤン中最も古きものと云はれ、我國には十數

年前輸入せられたるも、多くは退化して居る、昨年農商務省にて輸入せられたるものは、頗る立派なものである。

白色ラングシャン

黑色のものよりも新らしく作出せられたる鷄種にて全體の羽毛は純白色である。

青色ラングシャン

褐青色の地に黑色の覆輪を有するもの。

右の外近來米國にては、

バフラングシャン

褐色ラングシャン

の二種を作出したと云はれて居る、併しながら未だ各地に傳播する程には至つて居らぬ。

體量 雄一貫百匁内外、雌八百匁位を普通とする。

産卵數 一ヶ年百五六十個、一個の卵量十五六匁、卵殼は赤黃色に白の點々を附

して居る。

ラングシャンは體質頑健で風采頗る粗野、全たく實用的に出來て居る、產卵も可なり多く、殊に冬期よく產卵すると云ふので知られて居る、又肉用としては、骨の量比較的に少なく、胸肉に富む肉味は佳良にして且つ肥膈し易きの特長を具備して居る其他母鷄とするも孵化育雛に巧で雛の成長は良好早熟である故に五種は卵肉兼用の目的にも養はれ或は一代雜種を作るにも屢用ひらるゝ要するに多能の實用的鷄種である。

ドーキング

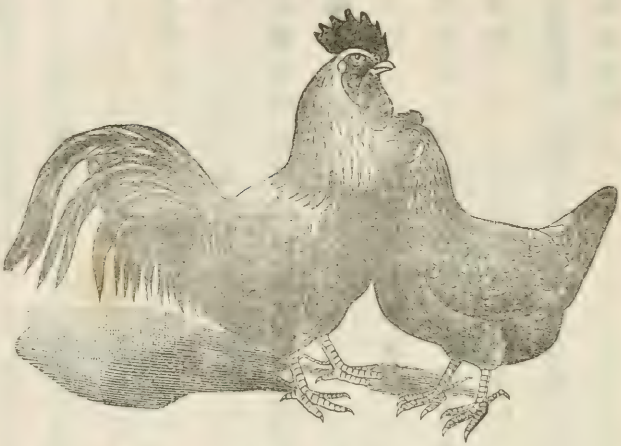
原產地　英國に作成せられたもので、英蘭の南部サーレーの都市ドーキング附近に蕃殖して此名を得たものと稱せられて居る。

體貌　雄は頭稍大きく、嘴は稍長くして彎曲し、肉冠には單片のものと薔薇冠のものとがある、體軀は稍四角形をなして居る、胸は廣く深く充實し、冠肉髯耳朶共に鮮紅色顏面又赤色、翼は大きくして緊褶し、尾は大に、謠羽及び覆尾羽はよく發育し

長く彎曲す、腿は稍短かくして强く、脛は短かく、五趾を有して居る、鞍羽頸羽は共に極めて豐富。

雌は略雄に類し、體の幅廣くよく充實す。

第二十七圖



銀灰色ドーキング

銀灰色ドーキング

ドーキング中最も古きものとして知られて居る、雄の頭部灰白、頸羽及び鞍羽は黒くして白色の邊縁を附して居る、脊、肩の羽毛は黒白の交りである、翼の主羽は黒く、翼羽は帶綠黒色をなし、翼を收むるときは横斑を生ず胸部の下側腿及び尾は共に黒色、嘴は角黄色脛趾は肉色。

色は、頭は帶灰黒色、頸羽は暗褐色、胸は赤褐色の地色に各羽黒色の覆輪を有して居る、體部は暗灰色、翼羽は暗褐色にして緣黒く、尾は大きく、外面暗褐色、内側は黒色。

銀灰色ドーキング

體軀は銀灰色のものより小なるも、恰好は略之に類して居る。雄の頭部は銀灰色頸羽、鞍羽は銀白色にして外側白色、胸、腿共に黑色、尾は黑色、嘴脛、趾は肉色。雌は、頭及び頸羽は、銀灰色にして暗黑色の線條を有して居る、脛趾及び嘴の色は雄と同じ。

白色ドーキング

全體の羽毛は純白色、大さは銀灰色のものにも劣る、小形の薔薇冠を頂き、嘴、脛及び趾は白色。

郭公ドーキング

雌雄共に郭公色をなして居るものなれども、此種は左程蕃殖されて居らず。

體量　雄一貫百匁內外、雌九百匁內外を普通とする。

産卵數　產卵甚だ多からず、一ヶ年百二三十個以下にして、一個の重量十六七匁、卵殼は白色。

ドーキングは胸肉豐富、而して肉味は甚だ佳良なるを以て名をなした鷄である

英人は非常に**ドーキング**の肉を賞美し、クリスマス其他饗應の食卓には必ず此肉を用ゆることとして居る、銀灰色、白色、暗灰色の三種は、我國に輸入せられたるも、未だ左程に珍重せられず、且雛は虚弱なる爲に、多く蕃殖して居らぬ。

愛翫用種

鳥類の中で、愛翫の爲に人に養はるる種類は隨分澤山ある。其中には羽毛の美を愛せらるるものの例へば孔雀の如きがある、又形體の奇なるを賞せらるるものの例へば**ギニヤフオール**の如きもある、其他蜀鷄の如く音聲の美なるものもある、斯樣な種類の鳥は、實用的經濟と云ふ方面から觀察したならば、不生産の禽類として顧られないのであるが、今一歩を進めて考へたならば、強ち排斥すべきものではない、例へば同じく産卵鷄を養ふ場合にも外貌の醜きものよりも美しきものを何人も選ぶが如くに、實利と同時に美感を欲するのは、何事によらず左樣である、殊に俗界が複雜となるに從つて、一方に於て實利主義の慾が酷くなると共に、他方に於ては美感の要求が盛になつて來る、夫故に實用鷄の飼養と共に愛翫鷄の擴まつて來るの

は無理のない話である、しかのみならず愛翫鷄中のあるものに至りては、體の輕少なる爲に、孵化育雛に用ひて優良なるものである、今左に愛翫鷄中の數種を略記せん。

セブライトバンダム

原産地　英國の原産にして、同國の貴族ジョンセブライト氏が十九世紀の終りの頃、赤色バンタム、南京バンダム、金色ハンバーク等の交雜によつて得たものであると云はれて居る。

體貌　雄は頭部小さく、圓く、稍後方に突出して居る、冠は薔薇形にして、前方廣く後ろに少しく反向いて居る、肉髯廣く下端は圓く、冠顔面と共に鮮紅色、耳朶は中等にして青白色、頸は中長にして精美、肩廣く胸も又廣し、翼は大きく、尾は廣く開展し雌の尾の如き觀を持つ、腿稍太く短かく、脛は細く四趾と共に角色。

雌は體軀、尾の形等一見雄の如く、丈は稍低く、各部は一體に小形。

銀色セブライトバンダム

羽毛は銀白色の地に各羽黒の覆輪を有して居る。

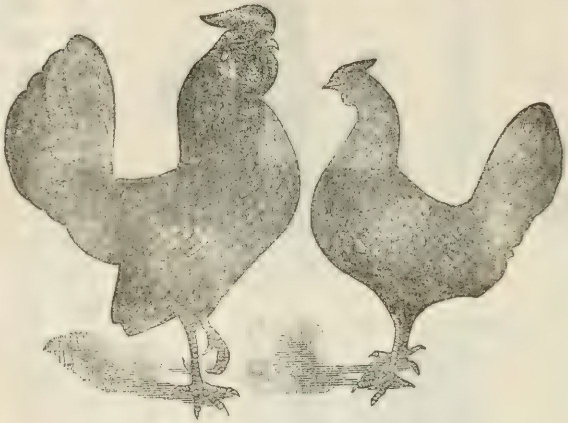
金色セブライトバンダム

銀色のものと異なるは、羽毛の地色が金褐色をなして居ることにある。

體量　雄百五十匁内外、雌百三十匁内外を普通とする。

産卵數は勿論多からず、體の割合に卵量は大きなものである、**セブライトバンダム**の羽色の美にして容姿の嬌艶なることに至つては、實に歐州流の粋を極めたものである、又孵化育雛に巧にして體量輕きが爲、種卵、雛等を踏傷するの恐なく、貴重なる種卵を托するには便利である、但し此種の卵は一般に無精なること多し。

第二十八圖



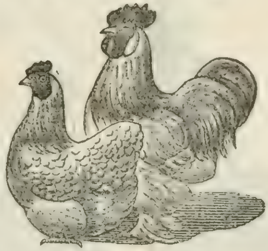
セアライトバンダム

北京バンダム

原產地　支那に育成されたもので、西暦千八百六十年英佛兩國の軍隊が遠征したる際、北京の宮廷から獲得して英國に持歸り、改良せられて獨逸其他に擴まつたものであると云はれて居る。

體貌　一名**バフコーチンバンダム**と云ふ位で、體貌**バフコーチン**と同じく、只極めて矮小なるだけが相異して居る、脚羽多く歩行の樣滑稽的にして愛らしきものである。

第二十九圖



北京バンダム

右の外歐洲には尚數十種の**バンダム**が作出せられて居るも、左程傳播して居らぬ。

矮鷄

原產地　支那の原產と稱せらるるも、古くより我國に蕃殖せられ、今日では日本

固有の鷄として知られて居る。

體貌　頭は體に比して大きく、眼は紅色又は帶黄紅色、冠、肉髯は極めて大なるものがある、共に鮮紅色、耳朶は稍小さく顏面と同じく赤色、頸は短かくして彎曲し、胸は濶圓にして、脊は短かし翼は大きく、尾は大きく、謠羽は弓狀に上向し殆ど後頭部に觸れんとするものもある、脛趾は共に短かく稍太し。

白色矮鷄

全體の羽毛純白、脛趾及び嘴は黄色。

第三十圖

一、桂色矮鷄　二、大冠黒色矮鷄

桂色矮鷄

鞍羽、主翼羽、尾羽は黒色に白の緣飾を有し、他の部分は白毛を有して居る。

黒色矮鷄

全體の羽毛黑色、脛、趾及び嘴は共に黑色。

右の他矮鷄の內種には

碁石矮鷄
源平矮鷄
猩々矮鷄
鵯尾矮鷄
長尾矮鷄

等の別がある、チヤボも又容姿艶麗にして實に愛すべきの價値と、セブライトバンダムと大同小異の特能とを有し、我國には今尙到る所に飼養せられて居る、元來バンダムとは矮鷄の總稱を云ふので、チヤボは日本バンダムと呼ばれ、近來年々歐洲に輸出されて居る、此種は愛翫としては體格の小なる程貴まれ、一升桝の中に一番を入れ得る位に矮小なるものもある、斯く體格を縮小せんとするには、常に產期の終に產出せる小卵を選み、雛は出來得る限り運動と滋養食餌とを禁じつゝ育成するものである。

珠鷄

原產地　亞弗利加洲ギニア地方の原產である、故に此鷄を英語ではギニアフオールと云ふ、現今尙同地方には野生のものが居ると云はれて居る、我國に於ては俗にホロホロ鳥と稱し稀に飼養せられて居る。

體貌　頭は體に比して小さく肉冠の代りに軟骨の凸起を有する、眼は赤褐色、顏面帶靑白色を呈し嘴は彎曲して大きく尖端銳し、頸は極めて細くして稍長く、體の姿勢は背部圓曲して尾端に至る程下垂し、全體の體格は一端の小なる筒形をなして居る、全身の羽毛略同樣にして灰黑色に白色の圓點を有し所謂小紋形を呈する樣頗る美麗である、脛は細くして鉛色に微褐色を帶び四趾を有す。

珠鷄は雌雄の羽色形狀ともに殆ど全く同じ樣であるから、一見した位では雌雄の鑑別が出來ないものであるが、雄は概して體、冠骨ともに大きく鳴聲も亦異なるものであるから此等の點に就て經驗して置くと判る、體量は三四百匁位のもので肉味は淡泊である、孵化日數は凡二十五六日を要し雛の生育は容易である。

第三十一圖

長尾鶏

長尾鶏

原産地　朝鮮の原産と稱せらるも、今や彼國には痕跡なく本邦固有の愛翫鶏として知られて居る。

體貌　雄は頭稍大、嘴稍小、頸は中等、鞍羽頸羽共に豊富、翼は中大にして能く褶まり冠は中大の單片、肉髯中大にして冠顔面と共に鮮紅色、耳朶は帯白色、簑羽はよく發育し、殊に尾羽に至りては名稱の如く極めて長く發育する性質を持つて居る。

雌は簑羽、尾羽は稍長く各部雄よりも細小。

白色長尾鶏

全體の羽毛純白色、眼は赤色、嘴、脛、趾は黄色。

この他

褐色長尾鷄

銀色色長尾鷄

等の內種がある、我國にては土佐廣島等の地方で養はれ、其他の地方には餘り見當らぬ、雄の尾の長きものに至つては、一丈四五尺より稀には二丈に達するものもある、然しながら斯の如き長尾鷄を作成するには特別の飼養法を要する、即常に丈高き籠、又は室の上部に棲架を設けて之に棲らし、外出を禁じ尾を懸垂さするのである從て體質虛弱となりて斃れ易く、兎に角飼養は丹精を要するものである、此珍奇の鷄種は歐米人の殊に賞翫する所で年々輸出されて居る。

蜀鷄（トーマル）

原產地　支那の原產と稱せらるるも、長く我國に飼養せられ、長尾鷄と同じく日本在來の鷄種と見られて居る、我國では古來唐丸、鶤鷄などと書かれた。

體貌 雄は眼光鋭く、稍大なる單冠を頂き肉髯中大、顏面冠、耳朶と共に赤色、頭大きく、頸太く、胸、脊共に濶大、翼は中大、脛、趾、嘴は暗色。

雌は體形略雄に類し各部小。

トーマルは羽色綠黑にして美しく輝て居る、體格は偉大にして雄は一貫四五百匁に達するものもある、體肉は充實して居るも產卵は僅かである、只愛すべき點は長くして美しき音聲を持つて居ることにある、若し夫れ秋晴麗かなるの日、他家に**トーマル**の流暢なる鳴聲を聞いたならば、實に仙境に遊ぶの思がある。

鬪鷄

歐洲にては耶蘇紀元の數百年前、即ち早くローマ時代に於て鷄を鬪はしたと云ふ事蹟もあり、又英國にては此諸種の獰猛なる鷄種を作成して、中世の頃、盛にゲーム即ち鬪鷄の技が行はれたものである、我國に於ては、德川時代に**シヤム**、南京等の渡來せる以後、一時は鬪技が流行したものである」。

暹羅鷄

原産地。 馬來半島の原産と稱せらるるも、今日にては我國在來の鷄種としられて居る。

第三十二圖

シャモ

體貌 雄は容姿直立し、頭大に、頸甚だ太く强く、冠は小なる胡桃形をなす、肉髯、耳朶共に小さく、冠、顏面と共に鮮紅色。肩よく張り脊は傾斜急、胸部は濶大、翼は短小、全體に羽毛少なく赤色の皮膚を露出して居る、羽色は種々あるも襟毛赤笹、胸羽の黑色なるものが最普通で、又獰猛である、嘴は强固にして淡黄色、脛趾は强大にして深黄色。

雌も容貌魁偉なること雄の如し。

體量は、雄一貫匁内外より大なるは一貫五六百匁に達するものもある、雌は七八百匁を普通とする。

シヤムは鬪爭に用ゆる外、其肉は最も邦人の嗜好する所のものである、故に肉用として盛に市場に取扱はれて居るが產卵數至つて少なく無精卵割合に多く且、晩熟である、余が經驗にては**シヤム**の雌に**アンダルシヤン**、**スパニシ**等の卵用種を配して、一代雜種を作るときは、產卵數多くして、肉味の美なる兼用の雜種を得ることが出來る、其他英國のゲームに至つては世に知られたるもの數多あるも今之を省く。

第八章　蕃殖

養鷄の經濟上良種を飼養することが第一の要件であることは既に詳述した所である、從つて種禽家は勿論一般養鷄家と雖も良種を維持し尙進んでは實用的新鷄種を作出すことに就て相當の智識を養はなくてはならぬ、現今我國の鷄界を視るに良鷄種と稱せらるゝものは殆ど悉く巨額の價と不尠運賃とを投じて外國から輸入したものであるが之等は僅に三四年の後には老鷄となつて蕃殖用に適しなくなる、其の子孫は漸次に退化して幾何もなくして更に種禽を海外に仰がなければならぬと云ふ有樣である、こは甚だ遺憾に堪えぬ次第であるが要するに我國鷄界の智識に乏しきに起因するわけであるから此點に意を注ぐことは根本的の要務と云ふ可きである、以下先づ實地蕃殖上に必要なる學說に就て一應の解釋を試み併せて之に關する著者の實驗二三を摘錄して置く。

一　淘汰

鷄に限らず總ての動物に就て見るに一種として各個體が全く同じ様な外形を備へて居るものはない、例へば同じ鷄でありながらチャボとバフコーチンとは著しい相違があり地犬とポインター、木曾馬と亞剌比亞馬とを比較して見ても夫々一見して區別が出來る程の差異がある、之等の異點は各個體の一代に止まらずして又其の子孫に傳はりコーチンの卵からは矢張りコーチンが出て地犬の腹からは矢張り地犬が生れるものである、かく鷄なら鷄、犬なら犬と同じ種類の動物でありながら異つた外形を有し且又其の特異の形質は子孫に傳へるものを學問上では變種と呼んで居る即ちチャボやバフコーチンは鷄の一變種と云ふものである、鷄の變種は現今では非常に澤山あるが、さて此等は如何なる次第で出來たものであるかと云ふことに就て考へて見る。

上述の如く各變種は夫々共通せる特異の形質を具へて居るものであるが其の變種の中でも又個體によつて多少の異點を有するものである、例へば同じバフコーチンであつても毛色の濃いものもあれば淡いものもあり、脚毛の多いものもあれば尠いのもある、であるから脚毛の尠い雌雄を選んでかけ合せると其の雛の中

には親の特質を傳へられて更に脚毛の尠い個體が出來やう此の操作を繰り返して行つたならば一代毎に特質が進歩して終には全然脚毛の無いものが出來る即ち新變種が作出せられることになる、元來鷄は野生の鳥を馴致したものであるから其の當時にありては何程の變種もなかつたものに相違ないが永い年月の間に飼養者の理想によつて此の操作が行はれた結果今日の如く多數の變種が出來たわけである、斯く人力の丹誠で動物の形質を變へることを人爲淘汰と云つて居る。

人力の外自然界にも又動物の形質を變化さする力がある、之を自然淘汰と云ふ、洋鷄を輸入しても我國の氣候風土に堪え得ぬものは死んでしまう、つまり外界の抵抗に打勝つ性質を有するもの丶みが生存することになる、野生の動物には氣候の激變動物間の生存競爭と云ふことが烈しく行はれて居る故に生き殘つて居るものは頗る頑健の性質を固定したものであるが家畜家禽になると人爲淘汰で一方の性質を進める必要上成る可く自然の淘汰から遠ざける爲に、改良した變種は外界の影響に薄弱で退化し易い道理である、例へば尾長鷄の如きものは六尺も八尺もある尾羽を引摺つて居つたのでは充分に餌を漁ることも出來ない、又其の體

質は極めて弱い、交尾にも不便であるし、外敵に襲はれて逃げることも出來なくなる、であるから特別の保護を加へないと特長を保つて居ることが出來ない、一般の鷄と同じ樣に飼育したならば聊か尾羽が長く伸びる位のもので到底六尺も八尺も垂れる樣になるものでないのである、卽ち人爲淘汰が盛であれば自然を征服して特長を發揮するし然らざれば自然に負けて退化することになる、要するに動物は自然界及び人爲の淘汰の如何によりて種々に其の形狀性質を變化するものであるから動物の蕃殖を計るには此理を辨へて之に適應する方法を究めなくてはならぬ。

二　遺傳

人爲淘汰の結果次第に動物の形質を變へて行くに就ては親の形質の幾何か必ず其の子孫に傳はると云ふ性質が根本である、之の性質が無つたならば如何程人爲淘汰で骨を折つても何の効もない譯である、此の性質が卽ち遺傳である。

兩親の形質が其の子に遺傳するのは交尾の際雄の精蟲と雌の卵子とが互に接

近融和するに起因し、玆に胚種を形成して此の胚種中には既に父母兩體の形質が潜在して居るものであるが、如何にして此の小生體の中に父母の資質形狀が傳はるかと云ふことに就ては今日の學問は充分の解説を與へることが出來ぬ、只我々は大冠を戴いて居る親の子は矢張り大冠に出で强健な親鷄の子は同じく强健であると云ふことを經驗上信じて居る爲に、かゝる假定の下に應用の途を講ずるに過ぎないのである。

一般の動物及鷄の遺傳性に就ては次の如く總括することが出來る。

一 形態の遺傳　大きな人の子は大きく矮小の種禽からは矮小の雛が出づる如く其の容姿面貌等も亦同じく兩親に似るのは皆人の知る所で之を形態の遺傳と云ふ。

二 性質の遺傳　兩親の性質が其の子に遺傳するは人類では明らかな事實であるが鷄の如き動物では更に之の性質が强い樣である、擧動が敏活怜悧で管理に困る樣な牝鷄から出た雛は矢張り概して如斯傾向を有するものである。

三 素質の遺傳　外部に現はれない性質の遺傳である、狂人の子は狂人でなくと

も狂人になり易い素質を有して居る、故に無事に一生を經過することもあるが若しも一朝何等かの變化に遭遇すると之が外部に現はれて狂者となるのである。

四　歸先的遺傳　兩親の有して居らぬ形質が其の子に發現すること即ち祖先の形質が再び其の子孫に現はれることを云ふ、オーピントンの雛には時として脚毛を有するものが出ることがあるのは之れ即ち其の祖先がコーチンの如き脚毛種であつて其の形質が何代かの後に再現した譯である、此の性質は四圍の生活的境遇を變じ又は他の變種と交配せしめた場合に現はれることが多い、例へばアンダルシヤンの雛種には黒色のもの又は白羽を交へた雛が多く出來る樣なものである、

五　羽色の遺傳　雙親が同じ羽色である場合には其の子は無論同じ羽色に出る可きものであるが雌雄の羽色が不同なる場合には單に父系か母系の羽色に偏出することが多く雙方の混合色に出ることは却て尠いものである、例へば黒色ミノルカの雌に白色レグホーンの雄を配すると夫より生ずる雛は白色か又は黒色に出るものが多く黒白の碁石を出すことは稀である、而して父母の何れに多く似る

かと云ふに概して父系に似るものが多い樣に思はれる。

六肉味及産卵力の遺傳　肉味、産卵力、早産、晩産等の遺傳するのは事實であるが之等の性質が父母何れに偏するかは不明である、實驗者の中には如斯鷄體内部の性質は母系に多く似るものであるとの説を爲すものもある樣であるが著者は未だ之れを信せぬ。

七遺傳力の強弱　變種の新しきものは弱く古きものは安定であるのは自然の理である、スパニッシ、レグホーン等は他種と交配して特性を遺傳する力強きもオーピントン、プリマウスロック等は遺傳力が弱い。

八疾病遺傳　或る種の疾病は親の體より直接に其子に遺傳するもので胎毒の如きは此の例である、從來結核の如きは遺傳的疾病であると云はれたものであるがこは病原たる細菌其のものが遺傳する譯ではなく只如斯疾病を有するものゝ子は其の體質が概して薄弱で抵抗力が弱い爲に同じ疾病に犯され易いと云ふ傾を持つに過ぎないのである。

三　蕃殖法

蕃殖法の種類に就ては人によりて其の命名法を異にするものであるが著者は實用上の見地より之を

一同族蕃殖

二異族蕃殖

の二つに別けて説述することにする。

一同族蕃殖　同じ血統に屬して居る雌雄の交配によりて蕃殖することを云ふ此の蕃殖法にては兩親は同樣なる形質を有するが故に正確に其の子に傳はり益特質を發揮するものであるが一方に於ては又親の惡しき形質をも強く遺傳するものであるから疾病の豫因を生じ蕃殖力を減退せしむるの弊がある、血族結婚を盛に行ふ地方には啞の如き不具者を生じ又癩病患者が多く出來ると云ふのも之の理である、家禽の蕃殖は從來殆ど全く此の同族蕃殖に依つたものでたとへ弊害を認めたにしても人類と違ひ已むを得ない場合が多い、何となれば海外又は遠所から種禽を取寄せて同種の蕃殖を計るには矢張り同族蕃殖によらなければならぬ、且又種禽の選擇には夫々の條件があるもので其の條件に合格する雌雄は澤山

見當るものでないから矢張り其の子孫の同族蕃殖に待たなければならぬことになる、つまり同族蕃殖は一利一害の存するものであるから當業者は此の理を辨へて兩親の選擇を嚴にし、たとへ美點を具備するも同時に聊にても缺點を有するときは絶對に蕃殖用に供せざる樣にし而して餘り純血交配の結果體質薄弱に傾きたる場合には異血の個體を交配さする方法に出でたならば同族蕃殖は斥く可きもので無いと思ふ。

二　異族蕃殖　變種の相異せる雌雄を交配して蕃殖することを云ふ所謂雜種を作成し又は新種は得んとする場合に行ふものである。

雜種が純粹の雙親より遺傳する形質の程度は無論一定の法則に支配せらるゝものではないが前にも述べた如く變種の古き方卽ち、より固定した親の形質を強く傳へるものである、今雜種の作出に就て純血の混入する割合を理論上から見ると次の如きものとなる。

一回雜種$=\frac{1+0}{2}=0,50=$半血

二回雜種$=\frac{1+0,50}{2}=0,75=\frac{3}{4}$血

三回雜種$=\frac{1+0,750}{2}=0,875=\frac{7}{8}$血

四回雜種$=\frac{1+0,8750}{2}=0,937=\frac{15}{16}$血

五回雜種$=\frac{1+0,9370}{2}=0,968=\frac{31}{32}$血

六回雜種$=\frac{1+0,9680}{2}=0,984=\frac{63}{64}$血

例へばレグホーンの雄をコーチンの雌に交配さして得たる一回雜種は雙方の血液半分宛を有する、之の雜種の雌に更に純粹のレグホーンの雄を交配し二回雜種を得順次三回四回と此の法を繰返して六回雜種に至ればレグホーンの血量は右の表に示す如く六十四分の六十三となり卽ち殆ど純粹のレグホーンを得るに至るものである。

次に雜種鷄に就て少しく解說を試んに一回雜種は純粹種よりも概して體質强健にして多產豐肉なるは歐米の養鷄家によりて夙に唱導せられ少しく經驗ある

人は必ず首肯する所である、此他に雜種鷄の有利なるは飼養者の意に適したる生産物を得ることが出來る點にある、例へば今體質强健にして産卵豐富、卵殼赤く卵量も相應に大なる實用鷄を得んとした場合にハンバークでは産卵は豐富であるが其他の諸點を具備して居らぬ、又コーチンを選んだのでは卵殼赤く雛も强健卵量も可なり大きくあるが卵數に於て劣る、玆に於てか此等の交配より出でたる一回雜種が總ての要件を充たす實用鷄となるのである、但し二回三回と雜種が複雜になると次第に實用的價値が衰へるものである又一回雜種とを交配さするには異なれる血統から選ぶことにすると其の雛は略一回雜種に劣らぬ勢力のものが出るものである、以下雜種鷄に關する著者の實驗二三を摘錄して參考に供せん。

アンダルシヤン、シヤム雜種　シヤムの雌は其の肉味の佳良なることに於て憐に鷄中の王であるが比較的成長が遲く且つ多食する爲に需肉の目的に飼養しても利益は尠い、著者は此の肉味を有する産卵雜種鷄を得んとの目的にて之にアンダルシヤンの雄を配して一代雜種を育てたことがある、但しシヤムは大形にして比較的多産なるもの、アンダルは小形のものを選むで見た、何れも二歲鷄である、卵

ば孵化力強く雛は極めて強壯に育ち平均五ヶ月半にて産卵を始めた初年の卵量は十六匁内外卵殻微紅色を帯びて厚く肉味は其の佳良なること殆ど純粋のシャムに劣らない位であつた、殊に最も長所とする所は産卵の豐富なことで寧アンダルシャンを凌ぐ程の數を示して居る、此の雜種は中等大の體重を有し丈高くして肩張り小形の單冠を戴きて面貌鋭く全くシャムの姿勢であるが、羽毛は大抵アンダルシャンの藍灰色を傳へるものである、要するに此の雜種は卵肉兼用或は寧ろ採卵鷄として有利なるは大に信を措く所である、此の雜種の雌にアンダルシャンの雄を配して得たる二回雜種は略前者の特長を有すれども健康に於て遥に及ばない様に思はれる。

アンダルシャン、バフコーチン雜種　アンダルシャンの大卵とコーチンの多肉とを傳へんとの目的にてバフコーチンの雌にアンダルシャンの雄を配したる一回雜種を作出して見た、雛は黒色、藍灰色のもの多く中にはバフに出ものもある、大抵僅の脚毛を有し冠は大きく容姿圓滿にして長毛の密生せるは多く母系を傳へるものである、體質は極めて強健平均六ヶ月にて産卵を初め卵殻は微に色を帯び

(中には殆ど白色のものもあり卵量又略母鶏に同じなれど其の數に於ては寧ろアンダルシャン以上である、體量は概して若干コーチンに劣るも肉味は然らざるが如し要するに本雑種は強健にして多産なること、純採卵鶏よりも擧動穏靜にして管理に易きこと等は長とする所であろうと思ふ。

レグホーン、コーチン雑種　比較的大形の單冠白色レグホーンの雄に就中倭小のバフコーチン雌を配した一回雑種である、此の雑種は大體に於てアンダル、バフ雑種に同じであるが詳しく云ふと少しく早産なること、卵量の稍小なること、性質敏捷なる等の點に於て父系に傾くことが多い様に思はれる、此雑種も亦實用鶏として價値あるものである。

右の外ウーダンの雄をコーチン、シャム等の雌に配して得たる一回雑種は概して強健多産なるものである。

曾て愛知縣農事試驗場に於て行はれたる一回雑種に就ての試驗成績は次表の如きものであつた。

	孵生より初産卵迄日數	一年間産卵分合	雄體量	雌體量	卵量	卵殼色
ウーダン雄 ナゴヤコーチン雌	七月餘	四、六一分	六三〇匁	四八〇匁	一四、〇分	帶褐白
ドーキング雄 暗色ブラマ雌	八餘	三、五三	八三〇	六五〇	一四、〇	帶褐白
アンダルシヤン雄 ウーダン雌	八餘	三、八七	六三五	五九〇	一七、〇	白
白色レグホーン雄 淡色ブラマ雌	五、二四	〇二七四	六二〇	五〇〇	一四、〇	帶褐白
ナゴヤコーチン雄 褐色レグホーン雌	四、二六	□四、〇三	六〇〇	四六〇	一四、〇	帶褐白
白色レグホーン	四、一八	二、八七	五一〇	四〇〇	一三、五	白
褐色レグホーン	五、〇〇	三、四七	五三〇	四二〇	一三、五	白
ナゴヤコーチン	五、一七	四、〇六	八〇〇	六六〇	一五、五	褐
トーキング	―	〇、四五	一〇六二	八二二	一二、五	帶褐白
ウーダン	―	二、〇五	四七五	六〇〇	一五、五	白
淡色ブラマ	―	二、四八	―	六五〇	一四、〇	褐
暗色ブラヤ	―	〇、七七	八九〇	八五〇	一五、〇	褐

○印は一ヶ年間の産卵數平均せるものに非ず、初産より四ヶ月間の産卵を平

均せるもの。

口印は同じく五ヶ月間の平均數なり。

表中純粹種と之等の雜種とを比較して其の優劣を知ることが出來よう。

四　種禽の選擇

種禽の選擇は要するに既に述べた蕃殖の要領を理へて居ればよい譯であるが實地家の爲に尚具體的の説明を試みて置く必要がある。

一　血統を選ぶこと

如何に個體は立派であつても系統の判明しない鷄は種禽として不安心である。現今牛馬の賣買には多く血統證を添へて居るが之は種禽と雖も同樣必要である、種禽の系統は後章に述べてある鷄籍薄に記入し、一目して判明する樣にして置かなくてはならぬ。

二　體格及健康狀態に注意すること

雌雄ともに體格を選むことの必要なるは勿論であるが殊に雄鷄に就て注意し

なくてはならぬ、たとへ體の各部が標準に適つて居つても餘りに脂肪質の牝鷄及過度に長大の雄鷄は避く可きである、同時に嚴に疾病を斥けなくてはならぬ。

三雌雄體格の釣合を要すること、

雜種鷄作出の場合に之の事は屢注意を要する、同じ種類では雄は雌よりも大きいのが普通であるが異種蕃殖では之が反對となることがある、例へばハンバークの雄をコーチンの雌に配したときの如きものである、斯く如き場合には充分に交尾を遂げ難き爲に無精卵多く且つ雛の出來が宜しくない、之は可成大形の雄と小形の雌とを選むことによりて補ふことが出來る雌の過小なる場合にも亦同樣である。

四長短を補充すること

完全無缺の雌雄を得るは至難のことであるから實際には多少の缺點を忍ばなくてはならぬ、之の場合には雌雄の長短を補充することが必要である、例へば雄の冠が短小であるならば大冠の雌を選んで之に配し、雌の羽色が淡白に過ぎたならば濃色の雄を配する等である。

五交尾に巧なる雄を選むこと

六齢に注意すること

成る可く雌雄ともに一歳以上のものがよい、之は既に孵化用卵の章に說いてある。

七惡癖あるは採用すべからず

八種禽の配遇數

此の事は第十章雌雄の配數項下に附記してある。

第九章　鷄舍

一　土地の選定

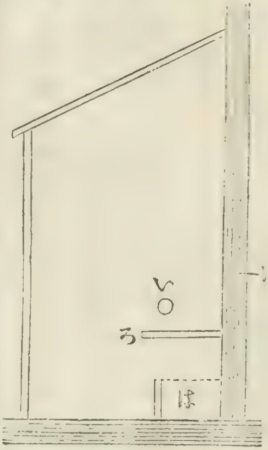
鷄舍建築の順序としては、土地の選定を行はなくてはならぬ、之には衛生上と便利上の注意を必要とする、南向で少しく傾斜して居る砂質の土地が最良であるので、北向或は西北向であると日光が不足し、溫暖を保つ上に、又病氣豫防の上に不利がある、傾斜を欲するのは排水を良好ならしめんが爲で、若し余儀なく濕地に定めなければならぬ場合には、土管或は篠竹等を埋めて相當の排水法を施さなければならぬ、其他ある地點に新に養鷄場を設け樣とする場合には、成るべく飼料の買入、生產物の販賣運搬等に有利なる場所を選むことが必要である、地代の廉否も勿論影響するものであるが、如何に土地の價が低廉なりとて急坂を有する高地、市街を遠く離れたる山地等に於て養鷄業を營むよりも、寧ろ地代は騰くとも都市附近の方が屢利益の多いものである。

二　鷄舍の構造

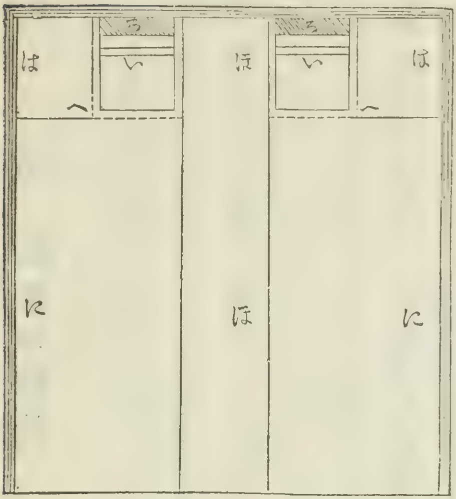
數羽の鷄を放飼する場合には、多くの農家に見る樣に、居宅の内庭の一隅に巣を吊して年中之に産卵させ、之に宿棲させて居るも、斯くするときは、糞の爲に不潔と惡臭とを免れず、且鷄は内庭に出入する爲に、勝手、座敷等を泥脚にて踏汚す等の惡習を生じ易きものである、故に出來得る限は脇屋に宿舍を設けるのがよい、少數を放飼するのには、宿舍の構造は如何樣でもよいので、只外敵を防ぐに足る戸締と、冬期賊風の侵入せぬことゝ、空氣の流通をよくすることに注意したならば夫にて充分である、農家には必ず廐、肥料屋、物置等の脇屋が建てられてあるから、之等の廂か壁の一部分を利用するときは、至つて僅かな費用にて出來るものである、

次に少しく多數鷄を飼養せんとするには、是非相應の鷄舍を建築しなくてはならぬ、之も衞生經濟及び便利上の要點さへ具備して居つたならば、其構造の如きは固より任意であるが、今參考の爲歐洲諸國に盛に行はれ、我國農商務省の種禽場にても採用せるライト氏の設計を紹介せん。

第三十三圖



第三十四圖

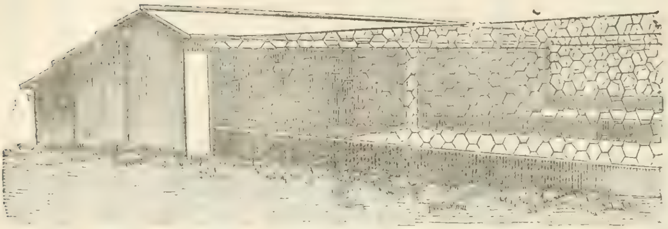


上圖は即ち縱斷面を示したるもので、棲架(せいか)(は)は後壁(に)より一已三寸位を隔(へだ)てゝ之に沿ひ、地上より約二尺の高さに設く、但し肉用種の如く體量重きものは、一尺内外とす、糞受棚(ふんうけだな)(ろ)は棲架(せいか)の下部四寸乃至六寸を隔てゝ設け棲架にありて脫糞(だつぷん)するときは凡て茲に落つる樣にし、毎朝之を掃除す、產卵箱(は)は糞受棚(ふんうけだな)の下に設け、重大なる種類を養ふときは直接地上に置き普通(ふつう)の採卵鷄にては少しく地を離して固定せしむ、舍の高さは六尺位とし幅は勝手に定めることが出來る、

上圖は本多博士の設計せる鷄舍の平面圖を示したるものにて、各區間は金網(かなあみ)

にて仕切り降雨寒冷の際には舍內の運動場にて遊ばしむ。

第三十五圖



鷄舍は長屋棟とするときは、鷄數の多寡に應じて自由に區を增減することが出來る、舍に附屬せる舍外の運動場は、細竹又は金網にて圍むのが普通である、山地にては細竹を得ることが容易で、之を針金を以て垣付けるときには極めて安値に出來上る、若し竹に乏しき地方、或は市街附近ならば金網の方が宜しい、金網にすると光線をよく透し、外敵の爲に破られ惡く、又永年月を堪ゆるが故に修繕の費用が省ける等の利益がある、金網を買入れる際には、稍費用を要するのであるが、針金を購入して自身に網付けると安値に出來上るものである、針金は、十八番か十九番のトタン線を用ひ、目の廣さは或鷄舍には二寸五分位とし、區の境界は下端二尺二三寸を板張りとし、爭鬪の出來ぬ樣にする、而して高さは、**コーチン、ブラマ**の如き肉用種ならば四尺あらば充分、

卵用種にては六七尺を要する。

宿舍の大さと、之に收容し得る鷄數とは、鷄種により或は飼養の目的により夫々異なるものであるが、普通一間に一間即一坪の舍内には、中大の採卵鷄十四、五羽を寢さすることが出來る。冬期戸の隙間、壁の破壞せる穴等より寒風が侵入するときは、著しく鷄の健康を害するものであるから、周壁下部の間隙は緊と塞いで置かなければならぬ、只上部には、横に細長き窻を作り、外部には金網を張り、内側には戸を設けて、氣候の寒暖により之を開閉するときは、空氣の流通は茲にて充分である。

熱心なる養鷄家は、周壁を二重の板張りとし、内部に鋸屑を詰めて冬間の寒冷を防ぐ事をする。斯くするときは、寒地に於て夜間温暖を保つ上に大に有効である。

鷄舍の屋根は、藁葺、瓦葺、トタン葺等各自の嗜好と經驗上の關係によつて任意に選むべきものであるが、瓦葺、トタン葺等は、温の急變を傳へ易きものにて、從て冬は寒く、夏期は暑きものなるが故に、之等を用うるときは、成るべく屋根を高くして天井を設くるがよい、藁葺には斯の如き不利はなきも、鼠害虫等の潜伏所となり易きものであるから、此點に注意することが肝要である。

舍内の床は專ら掃除に便利でなくてはならぬ、故にセメント或はタタキとするがよい、而して灰、砂、籾殼等を散布して乾燥ならしめ、又糞尿の稍交りたる時分に之を取換うるときはよき肥料となるものである。

三　棲架と産卵箱

一般の宿舍に必用である棲架は成るべく自然木を用うることゝし直徑は三寸位のものでよい、凡て鷄は高き場所に棲ることを好むもので、二三の棲架は階段をなす場合には、各自頂の地位を占めんとして爭ふものである、故に棲架は同じ高さとする方がよい、又傾て居る場合には、同じく高き方に競ふものであるから垂平にしなくてはならぬ。

産卵巣は左程嚴密を要しない、蜜柑箱或は石油箱の古きもの、或は淺き籠の類にても足りるのである、底には乾草、藁等を置きて凹形となし、上に蓆の切れ等を布かば充分である、一般の鷄舍に於ての位置は、成るべく薄暗くして直接に外部の見へぬ場所が宜しい、雌鷄が産卵に際しては安靜を欲し、殊にレグホーン、ミノルカ等の

卵用種は至つて物に驚き易く、爲に產卵を中止することがある、故に體の輕敏な種類では稍高き場所に設けることは他鷄が接近しなくて宜しい、ある地方にては吊巢と稱へ、產卵籠を繩にて吊り、雌鷄の出入する毎に動搖する樣なのがある、之にては產卵鷄が驚き易く、或は卵を破損する等の缺點がある、產卵箱の數は、鷄數に應じて任意に定め、中には模造卵一箇を入れて置く。

四　附屬舍

副業的の養鷄には改めて鷄舍を建築するにも及ばない位であるから無論附屬舍の必要も感じない譯である、況や農家などでは稍多數鷄を養つても納屋、穀倉、肥料屋等の建物があるものであるから、之等の一隅又は軒下位を流用するときは差支ないものである、然し專業の養鷄家となると特に附屬舍を建設して置かなくては不便であるから次に之等に就て一と通り述べて置くことにする。

穀舍　普通の穀物庫の樣に堅固に建る必要はない、鷄の餌料と云へば先づ糠糟類から高々粉末かアラ麥位のものであるから滅多に盜難に罹る虞はない、唯鼠の

這入らぬ様にそして空氣の流通を良くすれば足りるのである、此の目的には成るべく天井を張り壁の内面には下部一尺位の高さに板を張り而して壁の上邊と下邊に適宜に窓を設けて、之に極めて細目の金網を張るのがよい、位置は成る可く鷄舍に接近して居るのが便利であるが他の家屋の裏又は樹蔭等の清涼の場所を選ばなくてはならぬ、屋根が一日日光に照らされて居ると夏向は舍内が蒸されて遂に蟲を發生し又俵裝した糠類は醱酵を起す等の不利益がある。

調餌場　炊事を行ひ鷄餌を調合する場所であるから農家の納屋の如き建物で充分である、寒地では相當の外圍を要すれども暖地にありては單に屋根のみにても差支ない、床はセメント又はタタキとして一隅に井戸と流場を設け一隅には蓋附の箱、數箇を備へて之に餌料の小出しをして置く、煮物は西洋竈を使用するが經濟である、之に三四箇の鍋を備へて夫々穀類、魚腸等を煮るに供し、又物料を截切する大なる俎臺を備へる、煉餌は四斗樽の中にて調理し之をバケツに分配して各鷄舍に運ぶ様にする、位置は穀舍と連接して居る方が便利である。

穴倉　時としては市場に賣れ殘りの青菜を一と纏めとして廉價に買入れ又は

圃場の都合で一時に多量の靑菜、根菜類を收納することがある、斯樣な場合に數日間軒下等に推積して置くと蒸熱を起して惡臭を放ち又竿などに吊して風通しを佳くして置くと黃凋して鷄の嗜好に適しなくなるものである、此等の貯藏に最も便利なるは穴倉である、深さ七八尺、底の面積一坪位の穴倉を造るには僅少の費で足りる、四壁を煉瓦で疊み底はセメントで固める樣な完全なものでなくともよいが、夏期は地下水が増すものであるから濕地では水が浸み出さぬ樣に手配を要する、而して內部に棚を設けて置けば隨分澤山の物料を納れることが出來、冬期ならば數週間夏向でも一週間位靑物を貯藏しても變質しない、つまり簡單な冷藏庫に置いたと同じ樣なものである、之は穀舍の床下に設けるのが便利である。

衞舍　夜間盜難、火災、其他異常の出來事に備ふる爲番人を宿泊せしむる小舍である、出入の便利なる位置を選び疊二枚大の廣さで小なる押入を附けて置けば充分である。

隔離室　構造は普通の鷄舍と同樣にし內部を小區劃に別ちて病鷄の養療所とする勿論名の如く鷄舍調餌器より遠ざけて建設しなくてはならぬ。

右の他伏籠餌器空箱空俵の類を入れて置く爲に鷄舎の一端等に連續して簡便な物置を設けて置くことが便利である。

第十章　鷄の管理

農家などで三、四羽乃至七八羽位の鷄を放飼した場合には、卵もよく産むものであるし、肉附もよく、滅多に病氣などに罹るものではないが、偖其の數を殖して利益を增そうと思ふと動もすると病氣に斃れ、然らざるも産卵步合を減じて最早前の如き結果に行かぬものである、之には種々の原因もあろうが、最も多く見るのは五羽の鷄を養ふも十羽の鷄を飼ふも同じ考で居るのが宜しくないのである、即鷄群に適當な管理を常に怠つてはならぬ、尙管理の方法は種禽を養ふのと採卵の爲に養ふのと又は需肉愛翫等各其の目的によつて異なるべし、又同じ目的でも養ふ鷄種によつて多少注意すべき點が異なるのであるが、たとへ少數の鷄を放飼するにしても大凡の心得がなくてはならぬものである、何等の智識もなく只卵を採り肉を得るのみでは鷄を飼うとは云へぬので、鷄が人家に居ると云ふに過ぎぬ、斯の如き有樣では得る所の利益も少なく免れ得べき損害も蒙る樣になる、凡て鷄を管理する第一の要義は些細な事までも知つて而して實行すると云ふことになる、之は

何事によらず大切な戒であるが、殊に鷄を飼養する人には片時も欠いてはならぬ而も直ちに實行せねばならぬ、後に行なはんとか此位の事は明日に延ばして差支なかろうとか云ふのはそも／＼損失を生ずる基である、故に動物の飼養は自然に人間に觀察力注意力を與へ自身に行ふと云ふ美習を作らしむるものである。

同時に鷄を養ふ人は研究的態度を必要とするのである、夫は何故かと云ふに、養鷄家の多くは失敗に失敗を重ねて尚挫けず遂には其困難に打勝つて光明の域に達したものである、例へば多くの雛を斃した場合に偶然の出來事として看過し去つたならば之は恢復の出來ない失敗となるのである、若しも一歩を進めて何故に多くの雛が斃れたるかを觀察し其當時の氣候の不良なりし爲であつたと云ふことを知つたとしたならば、致し方なきものとして其儘捨てゝ顧みないのは未だ以て不充分である、果して氣候の不良なることが雛の斃死の原因であつたならば、こは如何にして避く可きか或は全く避く可からざるものなるかと云ふ點にまで進まなくてはならぬ、其結果若しもかくの如き場合に處する策を案出したならば、即先の失敗は經驗となり智識となつて茲に一段の進歩を見ることゝなるのである、

之即研究的態度である、苟も研究的態度を缺いて居る人は進歩は覺束ない、成功は望み難い。要するに失敗し易き人と見て宜しい。

以上の態度を以て事に當つたならば養鷄家は必ず次第に要領を會得するものであるが、今少し具體的に管理上二三の事項に就て記述し見ん。

一 鷄體及排泄物の檢査

毎朝鷄を檢査することを忘れてはならぬ、朝鷄舍の戸を開くと待ち兼ねて居つた群鷄は我先にと屋外に飛び出すものである、而して壯健なもの程先に出で弱きものは最後に徐歩して出るものである、若しも他鷄が屋外に出で既に餌を爭ふにも拘らず尚悄然として棲架に殘るか、舍内の一隅に佇立する等の鷄があつたならば、直ちに捉へて檢査しなくてはならぬ、斯の如き鷄は多くは病氣に罹つて居るものである、不注意なる管理者が無意識に戸を開き餌を與へた儘立去り晩になつてから卵を集め樣として舍内に立入つて見ると大切な雌が一羽一隅に斃れて居つたと云ふ樣なことは屢あるものである、此の如き鷄は必ず朝に於て多少其の兆候

を現はすものであるから此際に處理したならば充分救ふことが出來るものである、病禽は擧動容貌および羽毛等の諸點に就て判知することが出來るものであるが、就中健康時と著しく相違を呈して來るのは肉冠の色艶である、試に注意して産卵期中にある雌鷄の肉冠と病氣又換羽等に罹つて居る雌鷄の夫とを比較して見たならば、常に著しく觀を異にして居るのを認むるのである、雌が産卵しつゝあるときは營養佳良なるのときで、肉冠は豐大して鮮紅色を呈し、如何にも見て心地のよいものである、之に反して疾病だとか營養不良等の場合には、色褪せ萎縮して見るからに活氣を帶びて居らぬ、秋冬の頃雌鷄が換羽を終へ全體の羽毛は新に生じて美しく見ゆるも、冠が充分に大く而して美紅とならぬ中は卵を産み初めぬものである、又雌雛が成長して體格は殆んど成鷄となるも冠が發育して來ぬ中は産卵を初めぬものである、斯の如き點より見るも如何に鷄冠が營養の良否を現はすに銳敏であるかゞ判るのである、故に少しにても鷄體に異常のある場合には直ちに冠に知れて來る、多少の例外はあるにしても肉冠の異常なきを先以て健鷄と認めて誤なきに近い。

肉冠を視ることゝ同時に衛生上必要なるは排泄物に注意することである、鷄糞は通常帶黑色を呈し塊狀をなしてをるものである、糞の着色は食餌の如何によつて多少異なつて來るものであるが、時として乳白色の粘液狀のもの、又は赤色のもの、又小なる糸狀の虫を混へたもの等を認めることがある、斯の如き糞を排泄するは凡て下痢其他の病氣に犯されて居るものであるから、何れの鷄の糞であるかと云ふことを觀察して之を知り、他鷄と隔離して相當の處置を加へなくてはならぬ、

二　鷄數の點撿と記入

朝夕鷄の出し入れには員數を算へることが又必要である、殊に放飼にありては一層必要である、朝鷄舍を開いて餌を與へるときをよび鷄舍を閉づるときには必ず一度宛鷄數を勘定して見なくてはならぬ。よく農家などは朝雌が一羽居らぬと云ふので大騷をすることがある、而して昨夜鷄舍を閉づる際には全部揃つて居つたと云ふことが慥であるならば、夜中に失つたと云ふことになり夫々搜索の目的が定まるけれども、前晩には居つたか居らなかつたか勘定がしてなかつたと云ふ

ことになると、何時何處で消へ失せたものか手の附け樣がなくなる、然る場合には他の鷄の爲に如何なる豫防法を講じて可なるか夫も判らず後に禍を繰り返すことになる。

産卵鷄は時々叢中土手の穴堆積せる藁薪等の靜な場所を探ねて玆に卵を産むことがある、而して斯樣な場所に澤山の卵を伏巢することもある、或は夕景に産卵し漸く四邊の黃昏なると共に其儘宿ることもある、斯の如き場合に晩に搜索すれば見出し易いものであるが、若し翌朝まで捨置くときには屢外敵の爲に襲はるゝものである、柵飼鷄にありては此の事はないとするも、或は柵を破り天井を超へて外に出る等の事がないとも限らぬ、左なくとも數を算へることはよく鷄の個體を見ることゝなり時々利益なる發見をなすものである、一寸思ふと頗る面倒な樣であるが實行して見ると何等の煩勞でもないのである、扨數を算へた場合に如何なる鷄が損じたかと云ふことを知る爲には各鷄に番號金を附することが便利である番號金といふのは眞鍮武力其他の金屬で薄片の板を作り、之に番號を刻みて一個宛脚に箝める樣に造られたもので、坊間に販賣されて居る、尙番號金を箝め置くと

きには、鷄の個體に就て多くの事を知ることが出來る、即何番鷄は何年鷄であるとか、血統は何から導かれたとか云ふことも記して置かれる、又少しく綿密な操作としては産卵箱の前面を硝子板とし、側面一方の中央に入口を設け、入口には内部に板を吊し、雌鷄が入らんとして押すときには開くも、内部からは外に開く事の出來ない裝置として産卵を檢するときには、何番鷄は卵量幾何、産卵數何個と明瞭に分り、多産寡産は各に就て知ることを得、多數の鷄の中には一ケ年二百個以上を産するものもあれば又百個の卵を産まぬものもある、若し寡産鷄は賣却して多産鷄のみを飼養したならば、産卵の步合は前よりも遙かに多くなり、非常の利益がある、番號金と同時に必要なのは鷄籍薄である、記入帳である、其の體裁は各人の好と便宜とによつて任意ではあるが各鷄の系統生年月日初産の時日卵量卵數其他の個性を記して置くのである。

三　鷄の外敵

鷄は病氣の爲に斃れる他又屢外敵の爲に襲はれることがある、時としては多數

の鷄群を一夜の中に害される樣なこともあるもので、注意を怠らぬことが肝要である、自家の犬猫は往々雛、雌鷄等を襲ふことがある、故に斯の如き擧動を見付けた場合には充分嚴しく之を呵責して懲らしめねばならぬ、犬は一度手酷く責むるときは大抵は再び鷄を追はぬものであるが、猫は何回にても敢てするものがある、斯の如き猫は遠けなくてはならぬ、野犬は往々鷄舍の戸を嚙碎きて侵入するものがある、其他割合に害の烈しいのは鼬である、彼は體の小なるにも拘らず極めて獰猛な奴で、屢壁を毀し又は地に穴を穿ちて宿舍に忍び入り鷄を屠るものである、一匹の鼬が一夜の間に七八羽の成鷄を殺すのは珍らしくない、山地では狐も鷄を掠め夜間鷄舍を襲ふものである、之等に對しては係蹄鐵砲等便宜の手段を以て防禦しなくてはならぬ、然しながら此等は突然來襲するものであるから豫防の爲に性質のよき番犬を養ふことが最も宜しい、人家に隔りたる宿舍にては盜賊の爲に鷄卵等を窃取さるゝことがある、此豫防としても番犬を養ふことは必要である、其他鼠は鷄舍の戸壁等を毀ち鷄體の羽毛を嚙み取り、夏期になりては蛇が雛卵等を呑むが故に之等も驅除しなくてはならぬ。

右の外烏、鳶、鷹の類は突然空中より飛下して雛鷄等を掠奪するものであるから放飼鷄を管理する際には時々發砲して之等を遠ざけることが必要である、其他放飼鷄は時々溜、井等に陥り溺れることがある、殊に體量重く羽力の弱き肉用鷄には屢之の事がある、故に鷄の近づき得る井、溜等は常に蓋を被ひて此過を避けねばならぬ。

四　時候に對する處置

鷄體は寒暑濕氣等に對して影響の鋭いものであるから夫々時節によつて取扱法を異にしなくてはならぬ、冬は朝は遲く宿舎の戸を開き、或は午前中は屋内運動に遊ばせ晩は早く戸を閉ずることにする、若し寒威烈しきときは宿舎の外圍に藁垣をなし、或は蓆を吊し暖を取る様にする、夜間の賊風は牝鷄の産卵を減ずるものである、運動場に結霜降雪のある場合には、舎内に幽閉するか或は蓆を布いて此上に運動さするがよい。雪を喫ふときには下痢を催すものである、舎内には鋸屑、籾殻を散布することが溫度の保存に有效である、之に反して夏期は清涼を與へなくて

はならぬ、朝は涼しき中に鷄舍より出し、晩は日沒後も蒸熱の日は暫く戸を開放して置く、而して日中炎天に鷄を曝さぬ爲に、運動場內には適宜に葉の廣き落葉樹を植へて置くのがよい、而して飮水は日蔭に置き時々清冷なるものと取り換へなくてはならぬ。

梅雨の時季にありては、大氣濕潤して疾病害虫等を生じ易いものである、地の排水を良好にし汚水を飮ましめぬ樣にし、又鷄體を雨にあてぬ樣にする、同時に舍內は絕へず清潔乾燥に保たなくてはならぬ。

五　鷄糞の集收と肥効

放飼鷄にありては每夜宿舍に棲つて落す所の糞しか得ることが出來ぬ、之のみにても中々多量を排出するもので、鷄數によつて每日か、或は少なくとも每週二回位は丁寧に取去らなくてはならぬ、よく怠り勝の農家でやる樣に數週乃至數ヶ月の間糞を宿舍に堆積して置いたときには、第一衞生上宜しくないのみならず、斯樣に長く放置した鷄糞は醱酵を起して主要成分の窒素は多く消失して居るが故に

肥料としての價値か大に劣る、要するに一擧兩損である、少數の鷄では之を乾燥すれば貯へて置く事も出來るが其儘糞溜の中に投じて人糞尿と混ずるときは良好の液肥となるものである、柵飼鷄では運動場に落す糞も採集しなくては衞生上並びに經濟上に不利益である、而して多數の鷄を養ふ場合には日乾して之を貯へなくてはならぬ、こは養鷄上には大切なる遺利である、糞の量は鷄種食餌の種類多寡および採集の粗精等によつて夫々異なるものであるが一ヶ年の乾燥量は五、六貫匁より八九貫匁のものである、今假に鷄糞十貫匁を六十錢の市價とし一羽より一ヶ年に七貫目を得るとせは、此代價四拾貳錢となる千羽の鷄にては四百二十圓の多額となる、或る地方では名古屋コーチンを糞を得るを重な目的として飼養して居ると云ふ位である。

鷄糞の肥料としての價値を分拆上から見ると、

新鮮の鷄糞百分中(農科大學分拆報告による)

水	五六、〇
窒素	一、六三

燐酸	一、五四
加里	〇、八五

更に新鮮なる他の動物の糞と比較するときは、

	人糞	牛糞	馬糞
水	七七、二	七七、五	七一、三
窒素	一、三	〇、三四	〇、五八
燐酸	一、一六	〇、一六	〇、二八
加里	〇、四〇	〇、四〇	〇、五三

即三成分の含量に富む濃厚肥料であると云ふことが判る、之を稀薄にして施すときには大抵の作物に與へて宜しい。稲、麥等の禾本科の作物、および茶、桑等には殊に有効である。

六　運動場の土砂の取換

鷄糞の集收と共に衛生上に有益であるのは運動場の土砂の取り換へである、之

は都市などでは出來難い事が多いが田舍ならば容易く出來る、糞の交つた土を鍬にて薄く削り取つて肥料となし、別に新土を持來つて布くので、一ヶ月乃至二三ヶ月に一度位でも宜しい、之は何故であるかと云ふに、試に鷄の擧動を觀察して見ると絕えず嘴を以て土砂をつゝき何物をか啄む樣である、畢竟土中の鑛物質を攝取するので、產卵鷄にありては特に必要とするのである、新に開墾した場所、或は其以前鷄を養つたことのない宅地などでは、非常に雛の發育の佳良なものであるが即右の鑛物質が關係するのである、又卵黃の色素も之に依つて余程濃厚になる、人工的に之等の鑛物質と同じ物を給與すると云ふことに就ては未だ嚴密に研究されて居らぬが、思ふに石灰、苦土、鐵等の鹽類であるらしい。

七　雌鷄の巢念を去る法

肉用卵肉兼用種の雌鷄は、春夏の頃には續々伏巢して產卵を休止し、巢箱を塞げて困難するものである、古來我國の農家では雌鷄の巢念を去る爲に種々なる方法を採つたものである、巢の中に松杉等の生葉を入れて伏巢の出來ない樣にしたり、

腹下に水を浸して冷却するとか或は盥を被ひ數日間暗中に絶食せしむる等の方法を行なつた。時とすると過て殺したものである、近頃巣念を去る妙藥とか云つてアンチピリンの如き解熱藥を與へる向もある、然しながら左樣に即効のあるものではない、余が經驗せる中で比較的良法と思ふのは巣箱及び棲架のなき狹き棚中に交尾力強き雄と共に入れて置くのである、然るときは伏巣することは出來ず、絕へず交尾を迫られ間もなく巣念を失つて產卵する樣になるものである、其他の殘酷的取扱ひは却て營養を害するが故に巣念を去るも產卵が遲くるゝの不利がある。

八　雌雄の配數

單に採卵の目的を以て鷄を養ふ場合には、雄を配せざるも雌はよく產卵するものであるから成るべく產卵數を多くする方が經濟上に利益である、然しながら全然無雄よりは三四十羽の雌に一羽の雄を配して置くのは多少卵期を促すのと鷄群の調和を保つ爲に有利である。

之に反して種卵を得んとする場合には、無精卵をなくする爲に、自ら一定の雌雄配數を必要とする、之には擧動活潑にして交尾に巧なる卵用種と交尾少なくして無精卵の多き肉用種と卵肉兼用種とによつて異なる、即ち、

卵用種は	一雄に	十乃至十二雌
兼用種は	一雄に	七、八雌
肉用種は	一雄に	四乃至六雌

位を適當として居る。

九　鷄の肉冠趾及翼羽の截斷

鷄の肉冠と肉髯とは生理上には機能を認めないものであるが、雌雄共に容貌の美を保つ上には肝要なもので、其色、大小、缺刻の如何等に依つて甚だしく外觀に影響を來すものである、然しながら大なる單片を戴くミノルカ、アンダルシヤン等の種類を寒地に養ふ場合には凍傷を蒙り易いものである、斯の如き場合に採卵の目的であつたならば豫め切斷して之の害を防ぐ方が宜しい、其方法は三四ヶ月位の

雛の時分に銳利なる刄物を以て根元より切斷し、傷口に熱したる火箸を當てるときは出血を止め創は漸次癒ゆるものである。

老鷄の趾の長くなつたものは之も切斷する方が宜しい、其儘置くときは交尾の際雌の脊を傷け其他擧動に不便が多い、之を切斷するには銳利なる鋸を以て根元より五六分の所にて挽き截り、前の如き手當を施し尚切口は鑢にて圓みを付けて置くのである、余り根元より切去るときは交尾の際雌の脊上に體を支へ難くなる、

採卵用種の羽力强き雌は、高き垣を越へ或は粗き天井ならば之を破つて棚の外に出るものである、殊に農家などで常に放飼せる鷄を必要に迫られて俄作りの柵にした場合には、僅かの隙間にても見付けて直ちに飛出し管理上大に困難するのである、斯の如き場合には翼羽を切るのが早道である、其方法は一方の翼の風切羽二三枚を切れば宜しい、双方の翼羽を截らずとも鷄は體の平均を失し高飛は出來なくなるのである、或は切斷する代に丈夫なる細き糸を以て二三の羽を束縛するも有効である。

十　鷄の砂浴場

鷄は體の淸潔をよび羽蝨を驅除する爲に好んで砂浴をなすものである、雉、山鳥の如き野禽も常に此法を以て羽蝨を驅除して居る、放飼鷄では任意の場所を選んで砂浴をなすものであるが柵飼鷄には相當の浴場を作つて與へねばならぬ、箱其他の容器に砂を入れて置くも宜しい、然しながら斯の如き窮屈なものよりも鷄は寧ろ天然的を好むものであるから成るべく鷄舍の軒下等日當りの宜い直接に雨のあたらぬ個所に凹所を設け、之に細砂土を入れて置くのが最も宜しい、濱砂よりも土交りの稍濕氣を含んだものを選む。而して之中には時々少量の石灰粉、硫黃末等を散布するのは一層羽蝨の豫防に有効である、

十一　茶園桑圃及び蜜柑畑の養鷄

養蠶家園藝家が屋敷附近の桑柑橘畑等に鷄を放ち、茶業家が茶園に鷄を遊ばすときには副利を得るに容易である。桑畑は夏は葉が茂つて自然に暑を防ぎ昆蟲其

他の小動物を澤山與へ冬は葉が落ちて透光の妨とならず至極衛生的である、一反歩に二三十羽の鷄數ならば僅かの飼料にて養ふことが出來る、而して外圍の他に内部にも所々に丈低き垣を作り此等の間を遊歩さするときは、鷄には實際の面積よりも廣く思はれ發育に有利である、恰も養魚池の所々に島を築くのと同理である、又青菜を供給する爲に、一部分を仕切つて播種し稍成長の後仕切を取去つて鷄を入れる。斯樣な場所を二三ヶ所も作り順次に鷄を入れて行くときには、別に青菜を栽培しなくとも宜しい、同樣に蟲も發生せしめて與へることが出來る、若し製絲を兼ぬる養蠶家であつたならば蛹は飼料として直ちに用ひられる、又彼等が日々排出する所の糞尿は其儘肥料となつて作物にも有益である。

第十一章　鷄の飼養法

鷄は雜食性の禽類で家畜に比較すると遙に飼料を得るに容易なものである、併しながら食物は體を維持する所の源で、產卵も肉も皆之に依りて來るものであるから適當の食餌を與へなかつた場合には、如何なる鷄種でも好結果を與へぬのは勿論である、食餌の良否と云ふのは强ち價の如何にはよらぬので、如何程安價の餌料でも調理に注意したならば良好の食餌となるのである。

養鷄の經濟上に最も重大の關係のあるのは飼料で、之の廉否如何によつて利益は定まつて來るのである、何程飼鷄上の技術には熟練して居つても、飼料を得るに困難多き場所では多數鷄を養ふことは覺束ないので、よく生產物の價格と飼料の相場とを對照斟酌して後着手しなくてはならぬ、飼料の種類、分量および給餌方法等は氣候の寒暖、鷄種及飼養の目的によつて夫々異にすべきものである。

一　放飼鷄の飼料

放飼の鷄には多くの場合に粒餌即米、麥等の穀粒を形の儘で與へて居る、等しく放飼と稱するも、廣濶の場所に少數の鷄を放つ場合には、活潑な卵用種等にては殆んど自活し得るもので、時々殘物を與へる位で足るものであるが、之とても冬期虫類の少なき頃或は稍羽數を增した場合には一日に一回粒餌を給與する、其方法は晩、登塒前に穀粒を地上に撒き散らして啄食せしむるのである、之を登塒餌と稱して居る、此方法によるときには穀粒は消化遲き爲に夜間空腹を覺ゆることなく、雌鷄は翌日午前中に產卵するものである、若しも之を早朝に與へたならば、滿腹の結果鷄は倦怠を生じて物蔭などに居眠り、午後に至り空腹になつてから食を探し步き、明朝は飢餓の爲に早くから宿舍内に騷ぐものである、從つて午后に產卵する樣になり動もすれば休產し勝ちになる、或は穀粒を二十四時位浸水し膨脹して柔軟となつたものを朝少量宛別に給するときは最も宜い、

二　棚飼鷄の飼料

鷄を棚飼するときには、飼料は全部給與すべきものなるが故に其の處置は尚青

よりは遙かに面倒である、之には煉餌のみを與へるのと、粒餌と煉餌とを別々に與へるのとの二法がある、粒餌のみを與ふるには多量を要し經濟上に不利となるものであるから是非共煉餌を調製しなくてはならぬ、煉餌は又各種の滋養分を混交することが出來て營養上にも便利である。調製の法は普通麩、米糠、秕、青菜等を適宜に配合して、之を魚の腸、骨等の煮出汁にて煉るので、其の煉り加減は、固めて團子大となし、之を地上に抛つときに漸やく砕ける位を適度として居る、其原料は敢て麩や米糠には限らぬので、飴粕、粟糠、黍糠、大麥の細糠等容易に手に入れ得るものを任意に配合するのがよい、煉餌は消化し易きものなるが故に登塒の際には多少の粒餌を給するのがよい。

煉餌を給與するには絕へず與へて置くのと、一定の時刻に與ふるのとの二法がある、前者にありては鷄は自由に食を攝取することを得るも、煉餌を一時に給し置くときは腐敗或は變味等を來し、從て餌は不經濟となり易く又常に食餌が眼に觸るゝときは食慾の不振を來す傾がある、後者にありては朝夕か、朝晝晩位に分つて與へる、朝は煉餌を十分に晝は少量に與へ、登塒餌には穀粒を散布して與へるのが普

通のやり方である、今農商務省種禽場の冬期の給餌を紹介すると、

朝食午前八時

一、大麥粉　六升

麬　三升

玉蜀粉　一升五合

蕎麥粉　一升五合

右の各量を湯又はスープにて煉り之に青菜を混じて百三十羽の成鷄に與へる、

但し此中には諸種の鷄を含む、

正午　青菜を刻み散布して與へる

晩食　午後三時

一、混合穀粒　五升

燕麥　四升

右散布して同前の鷄に給與す、

右の他に一週二回貝殼の碎きたるものと、牛肉三百目を與へる、但し此等の鷄は

六七羽乃至十羽位宛別々の圍に入れてある

猶實地に養鷄家の行なつて居る二、三の煉餌調製法を紹介すると、

一、

雜穀	四升
飴粕	一斗
麬小麥）	一斗
青菜	一貫二百目
肉汁	四升

二、

麥酒粕	四升
精米粉	三升
煮たる秕稃	三升

三、

青菜及肉汁適宜

麬(小麥)	三升
碎米	四升
雜穀	二升
生の秕稃	一升
青菜及肉汁適宜	

三　種禽の飼料

種卵を得やうとする少しく前から種禽には、殊に良食餌を與へなくてはならぬ、飼料が養分に富み、鷄體の營養が佳良となつたときの産卵は孵化力强く育雛は好結果となる、一二の例を示さば、

玄米、小麥、蕎麥、少量の糯玄米、燒きたる鰌、の如きものである、此等の飼料は混合して給與するときは、嗜好する物質のみを選みて食するが故に、成るべく別々に朝は蕎麥、晝は小麥、晩は玄米と夫々に分與する方がよい。鰌、鰻等の動物質飼料を生にて與ふるときは羽毛が脱落するとか、子孫に

不良の影響を及ぼす等のことがある、故に煮、或は燒て與ふるに若くはない。

四　採卵鷄の食餌

柵飼と放飼とを問はず、凡て採卵鷄には脂肪の多過ぎぬ食餌を與へなくてはならぬ、雌鷄は卵巣に脂肪が集積して來ると卵を產まなくなる、コーチンの如き肥肉性の鷄種には屢之の例を見るが、其の他採卵鷄種に於ても飼料と運動との如何によつて脂肪過多に陷ることがある、放飼の鷄は自然運動を盛にする爲に體の分解を促し、柵飼鷄よりは此の事が比較的少ない、脂肪に富む肉類、玄米の多給等は避けなくてはならぬ、若しも一旦脂肪過多に陷り產卵を休止する雌鷄を生じたならば、蕎麥、麬其他の糟糠類を給し、而して廣き場所に放つて盛に運動せしむると、程なく恢復するものである、此他肉用鷄の肥膃食餌に關しては後章に述べることゝする。

五　換羽期の食餌

特別に換羽期の食餌として調製しなくともよいのである、雌鷄が換羽に罹り初

めると更に卵を產まなくなる、既に換羽を終つて羽毛肉冠等が稍美しくなつて來ても尙暫らくの間は產卵し初めぬもので、短かきも四五十日より長きは八九十日も休產することゝなる、故に飼養者にとりては收益は更らに得られずして支出一方であるが爲に自然に飼養も粗惡に流れ易いものである、換羽期には鷄體は衰弱し從て病氣に罹り易いものであるから少なくとも產卵時と略同じ樣な食餌を與へる必要がある、多少飼料に高價を拂つても早く卵を得そして健康を保たしむる方が結局利である、且强壯劑として後に記述せるドウグラス氏溶液を飮用せしむることが健康の增進に有效である。

六　靑菜と貝殼

主食餌の他、靑菜と貝殼との給與は日々欠いてはならぬ、煉餌に靑菜を混ずるときは、大に食慾を增すものである、或は運動場の稍高き所に其儘吊すときは、鷄は時々之に飛付いて啄食し運動を助けるものである。

貝殼は主として炭酸鹽類より成り立ち、消化の補助となり成長期にある鷄の骨

格生成の要素たるは勿論其他卵殻の構成に必要なる爲に、産卵期に於ける雌鷄は特に之を要求するものである、貝殻には種類あるも、最もよいのは牡蠣殻で、之を給與するには一旦焼き冷却せぬ中に水を注ぐと容易く破碎するものである、餘り粉末にせず大小豆位の大さにて與ふるがよい、

此外砂礫、木炭等は消毒を輔け、又は消毒の作用を有するものであるから柵飼鷄には常に備へて置かなくてはならぬ。

七　給水と鷄の强壯劑

飮水は淸新のものを給與すべきは勿論であるが、夏は成るべく冷かなるものを欲するが故に、給水器は日蔭に置き、一日に二三回取り換へて與へる樣にし、又冬期冱寒の季節には、温き水即ち微温湯として與ふるのが最も良い、水は不斷に給與して置くべきものであるが、朝鷄が宿舎より出た時には直ちに與へずして、朝食の後に與ふるがよい、之は何故であるかと云ふに、彼等は夜來の渇を醫せんとして運動場に出るや、直ちに水を求めて多量に之を飮む、其結果往々前胃炎を起し易いから

である。

次に鷄の強壯劑としては、種々の配劑が知られて居るが就中最も廣く用ひられて居るダウグラス氏の合劑を紹介すると、

硫酸鐵　　半ポンド
硫酸　　一オンス
常水　　五升

右の溶液を製し置き、水三合強に合劑一茶匙の割合にて投合し、水の代に之を與へてよいのである、但し之を用うるには、容器は金屬製のものを避け、陶器或は磁器にしなければならぬ。

八　植物質飼料の概説

植物質飼料として普通に用ひられて居るものに就て概要を述べて見ると、

小麥　は滋養分に富み、粒餌として與うるも又は粉末として煉餌の原料とするも鷄は嗜むところのものである。

蕎麥　は殊に產卵に効がある。

大麥　も鷄の嗜好に適し、搗精し煮て與ふるときは非常に膨大し、僅かの原料にて彼等の胃を滿すことが出來る、或は粉末として煉餌の原料となし、肥膃鷄の食餌とせらるゝ、其他外皮の儘一晝夜浸水し與ふるもよし、又は發芽さして與ふるときは極めて消化し易いものである。

米　白米のみを鷄に連食せしむるときは脚疾を生じ、或は漸次衰弱を來して遂には斃れるものである、馬に於てもやはり略同じ樣な現象を見る、人間も米食主義の邦人は脚氣病に犯されパンを常食とする歐米人には此の病氣はない、之は何故であるかと云ふに、白米が何等かの働きを持つに相違ないので、我邦の軍隊が麥飯を採用して以來著しく脚氣患者を減じたと云ふのは事實である、近頃此事に就て頻に研究されつゝあるが未だ積極的の結論を見ない、故に殘飯を給する場合には麩、米糠麥の細糟等を混ずるがよい、玄米には此患はないが、然しながら澱粉に富む爲に鷄體に脂肪を生じ易く、產卵鷄には多量に給してはならぬ、衰弱せる鷄の恢復期、或は寡產の種禽などに多產せしめ樣とする場合には、糯の玄米を煮て與うるこ

とが効が速である、但し久しく連食せしむるのは宜しくない。

燕麥 は極めて良好の飼料として西洋にては盛に用ひられて居る、粒餌として與うるもよし、又粉末としたものは肥育鷄に煉餌の原料として適して居る。

糲稃 は俗にシーナ、ミヨサと稱へ、不成熟の籾粒のことで、農家には收穫時に多量に産する所のものである、之は煮て煉餌の材料とするときは粘氣を和らげ消化を佳良ならしめる、或は生のものを水に浸して與うるもよろしい、籾皮は粗剛である爲に却て胃中の摩擦消化を助ける効がある。

玉蜀黍 も西洋にては價甚だ廉く、盛に家禽の飼料として消費されて居る、我國でも山地では稍多量に收穫されて居る、之は重に粉碎して煉餌の原料とする、

糯米粉 俗に粉末と呼ぶところのもので、粒の細かき爲に雛の食餌として廣く用ひられて居る、併しながら之のみを多量に給するときは、粘氣の爲に消化器を損じ、雛は糞詰りに罹り易く成鷄は食慾不振となる傾がある、故に之は加減して與へなくてはならぬ、

右の他米糠、麩、大麥。油糟、飴粕、麥酒粕、豆腐粕、餡粕、大豆粕等皆夫々養分を含み、或は

消化を助ける等の効にて廣く用ひられて居る、之等の中で農家などで最多量に出來るのは。

米糠である、之物は比較的燐酸に富む故に從來我國の農家殊に關東地方の如き土壤に燐酸分の尠い地方の農家では肥料として重んぜられたものであるが、之を直接肥料に用ふるのは極めて不經濟と謂はねばならぬ、何となれば米糠の中に燐酸は複雜なる有機化合體を成して居る爲に分解が困難で成分に比して肥効が尠い、且米糠の中には多量の脂肪がある、之は植物の營養としては少しも効がない而已ならず脂肪があると腐敗することが遲い故に肥料としては寧ろ無い方がよい、然も家禽の餌料としては脂肪は重んずべきものである糠の中の澱粉も肥料として價値が無いが餌料としては必要である、一體食物が動物の腹を通過すると如何なる物質が消失するかといふに炭素は炭酸瓦斯となつて絶えず肺臓から逃げ出して居るが大切な窒素や燐酸分は瓦斯となつて逃げるものではない、動物の成長する間は食物中の窒素は筋肉を造り燐酸は主に骨の成分となるものであるが、其の量は極めて尠少で足りるものである、已に成長した生體では右の養分は一旦

吸收せられたる後動物體にては尿の中に鷄體にては糞に混じて排泄せらるゝものである、其他の無機成分も亦同樣に體外に出る、勿論不消化の成分は糞となつて出て仕舞ふ、であるから肥料として重んずべき窒素燐酸加里の三成分の量は餌料と鷄糞と比較して格別の相異がないわけである、よし少し位含量は減じても其代はり腐敗し易く從つて植物に吸收され易くなる故に却て肥料として價値が增すわけであるから家禽家畜の飼料となるものは充分に之を利用することは農家の經濟上極めて肝要のことである、尤も米糠はこればかりを練餌として與ふるときには消化器を損ふものであるからなるべく澱粉質のものと混じて練餌とするが宜しい販賣米糠は種々の物質を混入して目方升目等を胡魔化した不正品が多いから充分注意を要する、今日の販賣米糠には絕體に搗粉を混じて居らぬものはないといつてもよい、之は搗精を早める爲に加へたものであるが、又屢目方を增す爲に特に多量を混和したのもある、之等は純粹のものと比べて見ると灰色を帶びて居るからわかる、又口中にて嚙んで見るとざら／＼するのでも譯る、又麥の細糠を混じたものはよく注視すると肉眼でも麥糠及麥の小碎片を發見することが出來る、

其の他鋸屑の微細なるものを混入することもある。このものは水を加へて攪拌し浮游物に就いて注視すると大抵は鑑別することが出來るものである。

麬も亦養分に富む良好の飼料である、殊に産卵鷄には練餌の原料として有効なものであるが、現今各所の製粉所で賣り出して居る器械挽の麬は外皮ばかりで養分に乏しいから從來のものに比して劣ること數等である。

大麥糠は粗糠は殆ど纖維ばかりで此ものは飼料とならないが、細糠は他の濃厚飼料に少しつゞ配合して練餌の原料となる但し養分は尠いものである。

豆粕、油粕等は我國の農家で肥料とする金高は實に莫大なものである、之等は大豆、菜種から單に油分のみを取つたものであるから、蛋白質其他の養分が全部殘つて居る。從つて其儘肥料とするには不經濟である豆粕は碎粉器にかけて粉とし練餌の原料とするか、又は粗くきざんだる後一旦煮沸して澱粉質飼料と混じて給與してもよい油粕も粉末として練餌の原料と爲し得れど此ものは一種の臭氣ある爲に豆粕ほど鷄によろこばれない、之は極く少量づゝ用ひる樣にするのがよい。

一 飴粕 飴を製造した殘滓で甘味を有し又蛋白質に富み容易に消化するもので

あるから産卵鷄の餌料として好適である。

麥酒粕　も練餌の原料として用ひらるゝものであるがなるべく新鮮なるものを與へなくてはならぬ。

豆腐粕　一名雪花菜と云ひ都會附近では安價に得らるゝ故練餌の原料とするに適して居る、餡粕も亦同じ樣なものである、但し之等は腐敗し易いから、なるべく新鮮なものを與へないと下痢を催すものであるから注意を要する。

醬油粕　多量に食鹽を含む故に多く與ふるのはよろしくない他の練餌に十分の一位を混じて給與するときは食鹽の爲に却て血液の循環を佳良ならしめ食慾を促す効がある。

酢粕　之も多量に與へては有害であるといふ說もあるが予輩の實驗にては雌鷄に與へて敢て産卵力を減じない樣である、多量に手に入つた場合には乾燥して貯藏して置くがよい。

酒粕、燒酎粕　酒粕は尙多量のアルコールを含有すれども少量を與ふるは差支ない燒酎粕は酒粕から更にアルコールを取つた殘滓であるから多量に給與して

間接の効をなす等にて廣く用ひられて居る。
青菜の種類は大抵の葉菜、根菜は用ひて差支ない、只新鮮なるものを選むことが必要である。
一、菜、大根、蕪菁、甘藍、萵苣の葉又は軟莖、
二、クロバー、オーチャード等の牧草、及び雑草の柔き嫩葉、
三、馬鈴薯、甘薯の刻みたるもの、
等は一般に用ゐられて居る、青物は血液を清淨にし腸の受働を盛にする等の効のあるもので、又雌鷄は之によつて卵黄の色を濃くすることが出來る、寒地にありては冬期積雪の際の準備として青菜を貯藏しなくてはならぬ。

九　動物質飼料の概説

主食餌の他青菜と共に鷄に與ふべきは、動物質の飼料である、雛の育成に動物質を給與すると否とは發育上に大なる差異を生ずるが如く、産卵鷄に動物質を與ふるときは、然らざるものよりも遙かによく産卵するものである。

鰌と鰻　鰌は鷄にとりては最上の滋養物である、併しながら此等の動物質は穀粒と異なり食するに從つて嗜好の生ずるもので、嘗て口にしたことのない鷄は之は投與するも喜ばないこともある、或は一寸嘴にて弄び其儘立去るものもある、故に雛の時分から與へるがよい、之等は成るべく煮るか、燒くかして毎日或は隔日位に少量宛與へる方がよろしい、鰻の頭は、細かに刻みて煉餌に混ずるときには、雛の食餌としても良好である。

魚類の腸と骨　之等は一度水にて煮出し、煮出汁は煉餌を捏るに用ひ、腸は細かく刻んで與へる、海邊、都市等にては魚腸は容易に手に入れることが出來るものであるから成るべく早く腐敗せざる中に集めて處理するがよい、骨は充分に乾燥して碎き、碎粉器にて粉となし少量宛煉餌に混じて給與するときは、生長期の鷄には殊に發育を良好ならしむるものである。

昆蟲其他の蟲類　之等の中には偶有毒のものもあるが、鷄は本能的に之を鑑別し得るものであるから、大抵のものは投與して差支ない、虫の製法は育雛の章に既述してある。

獸類の肉と臟腑　獸肉は蛋白質と脂肪とに富み有効の飼料であるが、傳染病に罹れたるものは寧ろ與へぬ方が安全である、內臟は消化の宜しくないものであるから、少量宛與へなくてはならぬ。

右の他小なる海老、蟹の類も與へて差支ない、又あらゆる川魚も、燒くか煮て與ふるときは極めて有効である、田螺も鷄の好むもので、碎いて與ふるがよい、但し殼の大な破片を嚥下する際咽喉に支へることがあるものであるら、注意を要する、蛙も又與へて差支ない、牛乳を與ふるときは大に營養を佳くし、羽毛に光澤を生じて美觀を呈するものであるが、日本では未だ一般に牛乳を與へる程乳價が廉でないから僅に雛の初期或は特殊の鷄に應用する位に過ぎぬ。

十　特殊飼料

鷄の特殊飼料と云ふのは或る目的の爲に一定の期間給與する所のものである、例へば興奮劑の如きもので之には、

蕃椒　などを細末として用うる、其目的は胃の壁膜を刺激して食慾を增進させ、

或は雌鷄の産卵を促す等にある、之を給與するには適宜に飲水の中に投ずるもよじ又は煉餌に少量宛混じてもよい。

落花生、麻等の實　之等は、鷄を品評會に出品する前等に給與する所のもので含有する脂肪により羽毛に艶を出さする目的に使用せらる。

十一　餌器

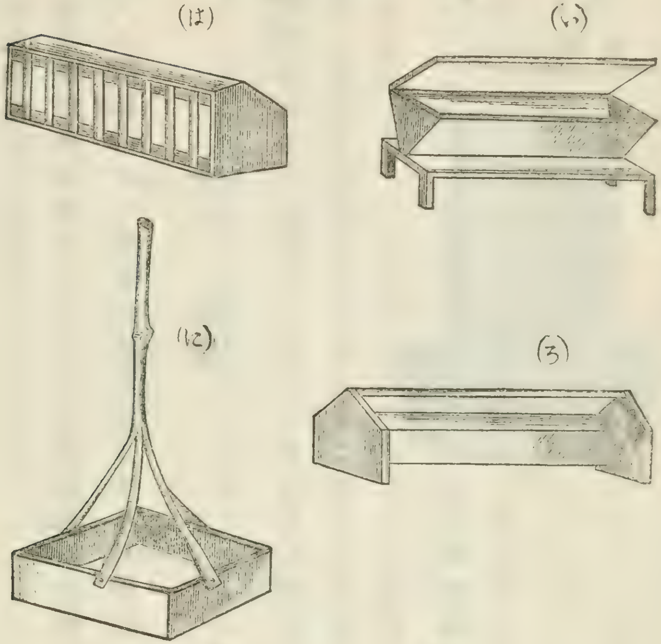
粒餌を與へる場合には地上に撒き散らすのがよい、然るときは粒と共に土砂を嚥下し消化を補助する効がある、このとき成るべく廣く一面に散布しなくてはならぬ、若し一所に投與するときは強者は貪食し弱者は壓倒せられて餌落ちと成り勝ちである、然しながら煉餌にては容器に入れて與へる方が清潔で且つ餌を濫費することがない。

第三十六圖

成鷄の餌器

餌器は木箱の淺きもの、陶器、磁器等有り合

第三十七圖



餌器

せの物で宜しい只要とする所は多くの鷄が同時に食することが出來て、然も覆らず脚にて餌を踏み荒されぬ樣に且又洗ひ清めるに便利なものであればよいのである、今參考の爲餌器の構造二三を紹介する。

第三十六圖は粒餌用器である、上部の蓋をあけて中に穀粒貝殼等の粒狀餌を入れて置くと鷄が啄むに從つて少し宛底に出て來るが、若し鷄が休食すると自然に流れ出

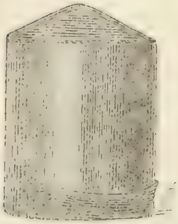
ることはない、之はブリキ、トタン等で製して坊間に販賣して居る、第三十七圖の(い)も粒餌用器である、中央の箱の中に入れた粒餌が鷄の啄食するに從つて、前後の下部の筧狀の部分に落ちて來ることは前圖と同じである、之は木の方が丈夫でよい。

(ろ)は矢張り木製で煉餌を給與するに用ひらる、中央の部分は淺き船底形をなして之に餌を入れて置くと鷄は前後から啄食することが出來るが上部に執手用の横木がある爲に餌は鷄の脚にて搔き出される虞がない。

(は)は任意の大さに淺く細長き箱を造り其の表面は格子として側面は板張とし上部は開閉の出來る樣な裝置とする之も木製にて煉餌を與ふるに用ひらる。

(に)適宜の大さの淺き木箱に圖の如き四つ割りとした竹を釘付けしたものである、之は素人細工で造作なく出來る。

第三十八圖



成鷄給水器

十二　給水器

給水器は是非無くてはならぬ、桶樽の古物を利用して可なるも清潔を保つ上に便利なのは陶器磁器である、給水器

は時々水を取換へる必要あるが故に欄飼にては戸を開かずして取扱の出來得る様に欄の最下部少しく空開の部分を作り置き器の半を欄外に半を欄内にある様にして置くのが便利である、或は少しく費用を投ずるならば坊間に販賣する給水器を用ゆるもよい第三十七圖は之を示したものである。

第十二章　營養論附飼料成分の表示

家禽の飼料を得ることに就ては各其の土地の狀況をよび經濟上の關係如何によつて臨機の處置を採らねばならぬ、故に多くの飼料の營養的價値と各鷄種の要求する成分とを知り一方時價と對照して何れが最も割安であるかと云ふことを定めるのは養鷄家にとりては最も必要なることである、恰も農家が販賣肥料の有効成分と各作物の要求する成分とを知り時價と對照して何れの肥料が最も割安であるかを考へなくてはならぬと同じことである、今左に最も簡單に動物の營養と飼料の化學的成分とに就て述べん。

一　動物營養論

凡そ動物體は、化學的に解釋するに、主として水と有機化合物とより組立てられて居るもので、其生活體內に於ては絕へず物質の複雜なる分解と化合とが起つて居る。其結果として溫熱を生じ諸種の活動をなすので之の現象を生活作用と云ふ

のである、譬へて言はゞ動物體は恰も暖爐の如きものである、暖爐が燃へて室を温かにするは是非其消費するだけの石炭を供給して行かなければならぬと同じく動物體が熱を生じ働をなすのは即體が其れだけ消耗するので之の損耗を補ふ爲には必ず一定の物質を外界から攝取しなくてはならぬ、之の物質を稱して營養分と呼ぶのである動物體は生れてから死に至るまで即生活の期間中は營養分を仰がずには居られないのである、

動物の營養は之を大別すると含窒素營養分、無窒素營養分及無機成分となる而して飼料は之等諸種の營養分を含蓄して居るものなるべく、其中比較的少量の飼料を以て比較的多量の生産物を得るのが動物を飼養する目的となるのである。

含窒素營養分 とは蛋白質及蛋白質以外の窒素を含んで居るものを總稱するので通常之を蛋白質及び非蛋白質と區別して居る、然しながら蛋白質と云ふのは現今に於ては窒素化合物のある種族名を意味して居るので決して一定量の窒素を含んで居るものでない現今の化學分拆法では未だ飼料中の各種の蛋白質を殘らず定量することは出來ないので通常行はれて居る方法は蛋白質は凡て一定の

窒素を含むものと見做し且つ飼料中の窒素は皆蛋白質の形に存在するものと假定して見出されたる含窒素の量に一定の係數を乘じ各飼料を比較することになつて居る、斯の如くして計算されたる假定蛋白質のことを粗蛋白質と稱して居る、

蛋白質　は含窒素營養分中最も主要なるものである、血液動物體內の液汁及び筋肉組織を構成する唯一の成分で他物を以て代用の出來ない働を有するものである、然しながら單に蛋白質の多量を給與したのみでは營養の好果は望み難く且つ蛋白質飼料は價格常に騰きが故に經濟上に不利を來すものである、宜しく蛋白質と他の營養分との比を適度に給與しなくてはならぬ、蛋白質以外の含窒素物即

非蛋白質　と云ふのは主としてアミド類、アミド酸類をよび有機鹽基類等を總稱して居る、之等は植物體中では蛋白質生成の中間體として存在し、或は動物體中にて蛋白質が消化作用加水作用等を受けた場合に生ずる分解生成物である幼植物の粗蛋白質中には殊にアミド類の存在が多いアミド及びアミド酸等を動物に與へた場合には體內にて酸化せられ最後の生成物は主として尿素である、而して蛋白質も又分解の結果尿素を生ずる、然らばアミドを動物に給與するときは體內

に蛋白質を增すものであるかと云ふに此の事實は未だ認められて居らない、併しながらアミドは動物體內に入つて酸化し、蛋白質消費の代用をなし得るものであるから攝取せる蛋白質は固有の働によつて體內に蓄積することが出來る、要するに非蛋白質は間接の効があるものと認めてよろしい、

無窒素營養分　とは主として脂肪及び炭水化物を云つて居る、共に炭素水素及び酸素より成つて居るが脂肪は炭水化物よりも遙に炭素に富み酸素が少ない體內に入つてからの働は炭素は燃て體溫と力とを供給し、又脂肪として體內に蓄積する、若しも脂肪が不足すると蛋白質が燃へる故に筋肉は費消され即體は瘠せることゝなる、故に脂肪を供給すれば蛋白質は節約せらるるのである、炭水化物は炭素の含量が脂肪に劣るが爲め燃へた結果は脂肪程の働をしない、然しながら結局脂肪と同じく蛋白質を節約する効を有し且つ消化吸收さるゝことは脂肪より容易なるが故に多量になることができる。

飼料中の脂肪の定量をなすには、細粉して無水エーテルを以て浸出するのである、併しながらエーテルに浸出さるゝものは、脂油の他蠟質物及び葉綠素等がある

故に斯の如くして得たる脂油を通常エーテル浸出物或は粗脂油と呼んで居る。

飼料の含有する炭水化物中主なるものは糖類澱粉糊精をよび纖維等である、而して糖類澱粉をよび糊精の如き稀薄の酸、アルカリーの熱液に溶解するものを可溶無窒素物と云ひ、之等の熱液に溶解し難いものを粗纖維と云つて居る、可溶無窒素物は動物體内に入つては葡萄糖に變じ血液の中に入つて燃燒する、纖維は消化し難いもので其効用は消化器に刺戟を與へ、或は腸中の受働を援くる等主として器械的の作用を持つものである。

無機營養分　は有機營養分と等しく飼料中に欠く可らざる所のものである、主なるものは燐酸、石灰、苦土、加里、曹達、鐵、鹽素、硅酸等で此他、

水　水は極めて重要なる働をなすものである、即ち諸物質を溶解し、消化作用の際養分の移轉を滑かにし、不用物質の排泄を容易にし、蒸發作用の爲に體溫の調節を促す等直接間接の働を持つて居る。

消化試驗　飼料を動物に與へた場合には前記の三養分即蛋白質脂肪及び炭水化物は悉く消化されず通常不消化性物質の一部は消化せられずして糞中に交り

體外に排出せらるゝものである、然しながら其性質が容易に消化すべきものであつても其物が強硬なる細胞膜の如き物質を以て包被せられて居つた場合には、消化液は内部に滲透し能はずして爲に不消化の狀態にて排泄せらるゝことがある、故に分析によつて營養分を知ることの外に飼料の消化せらるゝ割合を調べることは極めて必要となつて來るのである、この可消化量を知るのには動物の消化試驗を行はなくてはならぬ、消化試驗を行ふには豫め目的の飼料を以て一定の期間動物を養ひ置き、動物が食する飼料の量と排泄せる糞の量とを精密に分析して其差を見るときには幾何量の養分が消化されたかと云ふことが判るのである、

營養率　含窒素營養分と、無窒素營養分とは、動物の體内に入つてからの働が相異することは略述した通りである、夫で可消化蛋白質と可消化脂肪及び可消化炭水化物との比を通常飼料の營養率と呼んで居る、併しながら脂肪は體内に燃ゆる場合には同量の炭水化物の二倍半の熱量を生ずるが故に、一飼料の營養率は左の如き式に依て計算しなくてはならぬ、

$$\frac{\text{可消化脂肪} \times 2.5 + \text{可消化炭水化物}}{\text{可消化蛋白質}} = \text{營養率}$$

（但し各可消化量は%を以て表されたるもの）

故に營養率の狹きもの即ち小なるものは、可消蛋白質の含量多きを示し、營養率の廣きもの即ち大なるものは然らざることを示すもので廣狹何れに偏するも共に損失を來すものである。

以上動物體の營養に關して略記せる事項は、主として家畜に就て應用せらるゝ所のもので從來諸學者の研究に依て略飼養の要領を得るに至つたのであるが、獨り家禽に關しては研究成績の公にせられたるもの極めて少なく、未だ嚴密に飼養の得失を論じ得る程に進歩して居らぬのである、全體家禽の消化試驗を行ふに當ては糞と尿と一體として排出せらるゝものなるが故に不消化の量を定むる上に遙かに困難を生じ之も障害の一原因となつて居つた、近來獨逸のケルチル氏米國のフラウン氏等に依つて趣味ある學術的の研究が報告せられたるも、未だ一部分の消化試驗に止まり統括的の推論を見るまでに至つて居らぬのである、故に家禽の飼養者は宜しく飼料の分析上の成分と自己の施せる實驗とに照らし有利なる飼養の方法を攻究しなくてはならぬ。

科學の知識に乏しい實地家には單に自己の經驗にのみ依賴して日進の學問に耳を傾けぬ人等が多い樣であるが、之は甚だ宜しくないことである、經驗といふことは何事を爲すにも必要缺く可らざるものであるには相違ないが、併し夫は多く學理の土臺の上に築かれたものであらねばならぬ、殊更養鷄の如き諸方面の經濟に周密の注意を要する事業に於て然りである、尙今日でも學理といふものは到底實地に應用の出來ないものであるといふ樣に思つて居る人たちを往々見受けることがあるが、之樣の考で居つては養鷄の利益はとても覺束ない、例へば餌料の分析表である、これは多くの餌料に付いて其の化學的成分を定量したものであるから、之に就て調べると一見して餌料の大體の優劣を判斷することが出來る其上實地に應用して彼是對照したならば安全に然も仕事は早く出來る譯である、學理を應用せず單に自己の經驗をのみ辿つて諸般の事に當つたならば些細の事にも意外の手數を費しつまらぬ損失を招くことが往々ある。

次に分析表に就て一と通り述べて置く何れの分析表にも有機成分の他の水分と灰分との量が必ず載せてある、水は動物體の養料としての意味ではないが含有水

分が餌料の實質を知る上に於て大なる關係がある例へば生の鰌を一貫匁與へたのと燒いた鰌を五百匁與へたのとは何れが多く養分を持つて居ると云ふ樣な問題も起る、斯樣な問題を解決するには含有水分の量を明らかに知つて居なければならぬ。

水分を引去つた殘りを固形分と云ふ、之が實質の總量である、固形分は又有機分と無機分とに分れる、卽ち燒いて飛散するものが有機分で、あとに殘つた灰分が無機分である、この灰分は通常極めて少量なものであるが生體の養料としては缺く可からざるものである、例へば鐵は卵黄の成分となり加里は血液の又硅酸は羽毛の組成分となるものであるが之等は主として餌料の灰分から供給されるものである、此他灰分は各物料の種類に依りて略一定して居るものであるから灰分の量を秤つて物料の僞造を鑑定することが出來る、例へば純粹の米糠は大抵百分中一二内外の灰分を含むものであるけれども若し分析の結果一五以上も灰分があつたとしたならば何等か砂類を加へた不正品であつたと云ふことがいへるものである。

二 飼料の主要成分の分析表（農科大學分析報告所掲）

一 穀類（原料百分中）

種類＼成分	水	灰分	蛋白質物	纖維	可溶無窒素物	脂油	可消化 蛋白質物	可消化 無窒素浸出物	可消化 脂油
小麥	一四、四	一、七	一三、〇	三、〇	六六、四	一、五	一一、七	六四、三	一、二
ライ麥	一四、三	一、八	一一、〇	三、五	六七、四	二、〇	九、九	六五、四	一、六
燕麥（からすむぎ）	一四、三	二、七	一一、〇	九、三	五六、七	〇、〇	八、〇	四四、三	四、七
玉蜀黍（たうもろこし）	一四、四	一、三	九、五	一、三	八八、五	五、〇	七、九	六一、八	四、三
粟	一四、〇	三、三	一一、八	九、五	五七、四	四、〇	八、九	四五、〇	三、二
白米	一四、〇	〇、五	七、七	二、二	七五、二	〇、二	六、九	七二、七	〇、三
水田玄米	一四、三	〇、九	八、六	一、三	七二、九	二、〇	七、七	七三、五	一、九
陸田玄米	一四、三	一、一	九、六	一、四	七一、四	二、三	八、六	七二、一	二、一
陸田糯玄米	一四、三	〇、九	八、五	一、〇	七二、一	三、二	七、七	七二、四	三、〇
脱皮せざる穇	一四、〇	四、一	一、四	四、一	六三、二	四、二	七、六	五六、一	三、三

脱皮せる蘆粟	一四、〇	四、五	一、六	四、五	六一、一	五、三	八、一	五三、六	四、二
脱皮せる薏苡	一二、〇	一、一	一七、六	〇、九	六二、六	五、八	一五、八	六一、〇	四、二
二 豆類									
豌豆	一四、三	二、四	二二、四	六、四	五二、五	二、〇	二〇、二	五四、四	一、七
蠶豆	一四、五	三、一	二五、五	九、四	四五、九	一、六	二三、〇	五〇、二	一、四
扁豆	一四、五	三、〇	二三、八	六、九	四九、二	二、九	二一、四	五一、二	二、二
ルーピン（黄種）	一三、三	三、八	三六、二	一三、八	二八、〇	四、九	三四、四	四一、八	四、九
ルーピン（青種）	一三、二	三、二	二四、八	一三、五	四一、一	五、六	二三、六	五四、二	四、六
大豆	一〇、〇	五、〇	三三、四	四、八	二九、二	一七、六	三〇、一	二五、一	一五、八
赤小豆	一四、〇	二、六	一七、九	五、九	五八、二	一、四	一五、二	五七、七	一、二
刀豆	一五、三	三、九	二二、六	一一、四	四五、三	一、五	二〇、三	四九、二	一、三
三 油實、諸種實、及果實類									
亞麻	一二、三	三、四	二〇、五	七、二	一九、六	三七、〇	二〇、一	一八、九	三五、二
蕓苔	一一、八	三、九	一九、四	一〇、三	一二、一	四二、五	一五、五	一〇、二	四〇、四

大麻	一二、二	四、五	一六、三	二、一	二一、三	三三、六	一二、二	一六、二	三〇、二
棉實	一四、四	四、三	一九、九	一八、九	二〇、二	二五、三	一四、五	一三、七	二二、八
落花生(脱皮せぬ)	六、三	三、二	二八、二	一三、九	七、二	一四、二	二三、七	一一、三	三九、一
新鮮落花生(脱皮)	一五、六	一、六	二七、六	四、二	五、〇	四六、〇	二三、二	四、六	四三、七
胡麻	五、九	三、一	一九、六	一一、二	一一、一	四九、一	一五、八	一三、八	二八、六
荏	五、四	三、五	二一、七	一五、九	一〇、二	四三、三	一八、六	一五、二	三八、八
山茶實	三、〇	一、九	八、八	三、二	一三、九	七〇、〇	七、〇	二、四	六八、〇
蕎麥	一四、〇	一、八	九、〇	一五、〇	五八、七	一、五	六、八	四七、〇	一、〇
樫の實	五五、三	一、〇	二、五	四、四	三四、八	一、九	二、〇	三四、〇	一、五
栗	四九、二	一、六	四、三	二、〇	四一、三	一、六	三、四	三八、一	一、三
梨	八三、一	〇、四	〇、四	四、二	一一、三	—	〇、三	一二、九	—
茄子	九三、五	〇、四	〇、八	一、一	四、〇	〇、二	〇、七	三、六	〇、一
四 製粉及製穀副産物									
小麥の細末麩	一三、一	五、四	一四、〇	八、七	五五、〇	三、八	一一、八	四〇、四	三、〇

粗末の小麥麩	一二、九	六、六	一五、〇	一〇、一	五二、二	三、二	一二、六	四二、七	二、六
ライ麥麩	一三、五	五、二	一四、五	五、七	五八、六	四、五	一二、二	四六、二	三、六
飼用小麥粉	一一、五	三、〇	一三、九	四、八	六三、五	三、三	一〇、八	五四、〇	二、九
飼用ライ麥粉	一二、〇	四、一	一三、六	四、二	六三、二	二、九	一〇、六	五三、三	二、三
玉蜀黍糠	一一、八	三、四	一〇、二	九、〇	六一、八	三、八	七、九	五六、六	三、四
蕎麥の皮	二〇、九	二、六	一一、六	二八、三	三三、八	二、八	七、七	二九、一	二、〇
豌豆の殼	一三、三	三、〇	八、〇	四三、七	三〇、五	二、五	五、六	四六、三	二、〇
豌豆の粉	一一、四	三、五	二三、六	四、五	五三、五	三、五	二〇、九	五五、四	二、八
豌豆の皮粉	一三、三	四、二	一三、一	三一、一	三七、八	一、五	九、二	四五、八	一、二
粟殼	九、五	七、五	六、五	五七、六	一四、四	四、五	四、五	三八、八	二、七
大麥麩	一三、〇	四、一	一四、八	一九、四	四五、六	四、一	一一、五	四三、二	六、六
飼料米粉	九、九	一〇、六	一〇、九	一一、一	四七、六	九、九	八、六	四七、二	八、八
米糠	九、五	一二、〇	六、〇	二五、一	四四、一	三、三	四、二	四二、八	二、三
日本米糠	一一、三	一二、四	一三、〇	六、八	四一、二	一五、二	一〇、一	四五、八	一二、七

三、農產製造の副產物

モヤシの糟粕	七六、六	一、二	四、九	五、二	一一、〇	一、一	三、六	九、〇	〇、八
玉蜀黍のモヤシ	一一、九	五、五	一一、四	六、八	四六、〇	一七、四	一〇、五	四四、〇	一四、八
ライ麥蒸溜粕	九一、〇	〇、五	一、九	一、〇	五、二	〇、三	一、七	五、四	〇、三
玉蜀黍蒸溜粕	九〇、六	〇、四	一、八	一、〇	五、二	一、〇	一、六	五、四	〇、八
グルーテン製造粕	七〇、〇	〇、四	四、六	一、一	二四、四	〇、五	四、六	四五	〇、五
酒粕	六二、〇	〇、六	一八、一	一、六	三、五	四、二	一二、七	三、一	二、二
醬油糟	五三、六	六、七	一二、六	六、七	六、七	一三、七	七、六	六、七	一二、三
新鮮豆腐糟	八五、七	〇、五	三、八	三、二	五、四	一、四	二、七	七、一	一、二
落花生油粕	一〇、八	五、一	二二、四	一八、七	二三、八	一九、二	一六、八	二五、〇	一六、三
蕓苔子油粕	一一、三	七、一	三一、六	一一、〇	二九、九	九、六	二五、三	二三、八	七、七
亞麻仁油粕	一二、二	八、八	二九、五	九、七	二九、九	九、九	二四、八	二七、五	八、九
山茶油粕	一一、八	六、九	三三、一	一一、六	二七、四	九、二	二六、五	二六、六	八、三
大麻子油	一一、九	七、八	二九、八	二四、七	一七、三	八、五	二〇、九	一六、六	七、二

大豆油粕	一三、四	五、二	四〇、三	五、五	二八、一	七、五	三、三	二九、四	六、八
向日葵油粕	一〇、八	六、七	三二、八	一三、五	二七、一	九、一	二七、九	二五、一	八、一
棉實油粕	一〇、六	七、二	二四、七	二四、九	二六、〇	六、六	一八、〇	一四、七	五、九
茶實油粕	一一、〇	六、二	一三、三	三、四	五四、四	一一、七	一〇、六	五〇、九	一〇、四
六 生草									
花前の野草	七五、〇	二、一	三、〇	六、〇	一三、一	〇、八	二、〇	一三、〇	〇、四
牧地草	八〇、〇	二、〇	三、五	四、二	九、五	〇、八	二、五	九、九	〇、四
極上牧地草	七八、三	二、二	四、五	四、〇	一〇、一	四、二	三、四	一一、〇	〇、四
イタリヤライグラス	七三、四	二、八	三、六	七、一	一二、一	一、〇	二、三	一二、六	〇、四
イギリスライグラス	七〇、〇	二、〇	三、六	一〇、六	一二、八	一、〇	一、八	一二、二	〇、四
チモシー	七〇、〇	二、二	三、四	八、〇	一六、三	四、一	二、八	一六、〇	〇、五
青刈ライ	七六、〇	一、六	三、〇	六、七	一二、〇	〇、八	一、八	一二、四	〇、四
青刈オート	八一、〇	一、四	二、三	六、五	八、三	〇、五	一、一	八、九	〇、二
青刈玉蜀黍	八二、九	一、三	一、二	五、二	八、八	〇、六	〇、七	八、四	〇、三

青刈蘆粟	七七、三	一、一	二、五	六、七	一一、七	〇、七	一、六	一一、九	〇、三
椮	七五、〇	一、八	三、一	八、五	一〇、九	〇、七	一、八	一一、八	〇、三
牧場の稚若の苜蓿	八三、〇	一、五	四、六	二、八	七、二	〇、九	三、六	七、四	〇、六
花前の赤苜蓿	八二、〇	一、五	三、四	四、五	七、九	〇、七	二、四	七、八	〇、四
花中の白苜蓿	八〇、五	二、〇	三、五	六、〇	七、二	〇、八	二、二	七、九	〇、五
花初の花生苜蓿	八五、〇	一、五	三、三	四、五	五、一	〇、六	二、一	五、八	〇、四
盛花の化生苜蓿	八二、〇	一、八	三、三	六、〇	六、三	〇、六	一、八	六、九	〇、三
稚若の紫苜蓿	八一、〇	一、七	四、五	五、〇	七、二	〇、六	三、五	七、三	〇、三
花初紫苜蓿	七四、〇	二、〇	四、五	九、五	九、二	〇、八	三、二	九、一	〇、三
紅苜蓿	八一、五	一、六	二、七	六、二	七、三	〇、七	一、五	七、五	〇、三
黄苜蓿	八一、五	一、六	二、七	六、二	七、三	〇、七	一、五	七、五	〇、三
極上ルーピン	八五、〇	〇、七	四、二	四、五	五、二	〇、四	三、一	六、五	〇、二
蠶豆	八七、三	一、〇	二、八	三、五	五、一	〇、三	二、〇	五、二	〇、二
花中の青刈豌豆	八一、五	一、五	三、二	五、六	七、六	〇、六	二、二	七、四	〇、三

落花生	七七、一	一、六	三、七	四、六	一一、四	〇、九	二、七	一、八	〇、四
蕎麥	八五、〇	一、四	二、四	四、一	六、五	〇、六	一、五	六、六	〇、四
飼料甘藍	八五、七	一、六	二、五	二、四	七、一	七、七	一、八	七、四	〇、四
菊芋の莖葉	八〇、〇	二、七	三、三	三、四	九、八	〇、八	二、〇	九、四	〇、四
七 根菜									
瓜哇薯	七五、〇	〇、九	二、一	一、一	二〇、七	〇、三	一、四	二一、八	〇、六
菊芋	八〇、〇	一、〇	二、〇	一、三	一五、五	〇、三	一、五	一四、七	〇、一
甘薯	七五、九	一、〇	一、四	一、〇	二〇、五	〇、三	〇、八	一九、一	〇、一
芋	八一、二	〇、八	二、〇	〇、七	一五、一	〇、三	一、三	一四、二	〇、一
蕪菁	九二、〇	〇、七	一、一	〇、八	五、三	〇、一	〇、七	五、〇	—
胡蘿蔔(ニンジン)	八五、〇	〇、九	一、四	一、七	一〇、八	〇、三	一、〇	一〇、三	〇、一
蒟蒻	九一、八	〇、四	一、一	〇、三	六、九	〇、一	〇、七	六、一	—
牛蒡	七三、八	〇、八	三、五	二、一	一九、七	〇、一	二、五	一八、四	—
筍	九一、四	〇、八	二、二	一、〇	四、四	〇、二	一、一	三、五	〇、一

蓮根	八五、八	〇、七	一、一	一、〇	二、二	〇、二	〇、六	一〇、五	〇、一
慈姑	六六、九	一、四	七、〇	一、二	二三、〇	〇、五	四、九	二一、〇	〇、三

八　蔬菜（原料百分中）

種類—成分	水分	粗蛋白質物	粗脂油	可溶無窒素物	粗纖維	灰分
小松菜	九二、六二	二、五一	〇、五二	一、一八	一、七九	一、三八
三河島菜	九二、九八	二、四四	〇、六九	〇、七九	一、八三	一、三四
甘藍（赤）	九〇、〇八	一、八三	〇、一九	四、一四	一、二九	〇、七一
菠稜草（日本產）	九三、九一	二、三〇	〇、二九	一、六五	〇、五七	一、三〇
京菜	八五、二八	二、一二	〇、一六	〇、二一	一、一六	一、〇七
白菜	九五、一	—	〇、二	〇、九	一、二	〇、九

九　動物質（原料百分中）

種類—成分	水分	粗蛋白質	粗脂油	可溶無窒素物	灰分
牡牛肉（肥）	五三、〇五	一六、七五	二九、二八	—	〇、九二
牡牛肉（瘠）	七六、三七	二〇、七一	一、七四	—	一、一八

牝牛肉（肥）	七〇、九六	一九、八六	七、七〇	〇、四一	一、〇七
牝牛肉（瘠）	七六、三五	二〇、五四	一、七八	〇、〇一	一、三二
羊肉（肥）	五三、三一	一六、六二	二八、六一	〇、五四	〇、九三
豚肉（肥）	四七、四〇	一四、五四	三七、三四	—	〇、七二
馬肉	七四、二七	二一、七一	二、五五	〇、四六	一、〇一
鹿肉	七五、七六	一九、七七	一、九二	一、四二	一、一三
兎肉	七四、一六	二三、三四	一、一三	〇、一九	四、一八
牛乳	八七、一七	三、五五	三、六九	四、八八	〇、七一
山羊乳	八五、七一	四、二九	七、七八	四、四六	〇、七六
羊乳	八〇、八二	六、五二	六、八六	四、九一	〇、八九
馬乳	九〇、七八	一、九九	一、二一	五、六七	〇、三五
鮭	六四、二九	二一、六〇	一二、七二	—	一、三九
川鰻	五七、四二	一二、八三	二八、三七	〇、五三	〇、八五
海鰻	七一、四五	一八、四六	九、〇九	—	—

鰊	七四、六四	一四、五五	九、〇三	—	一、七八
海老	八一、八四	一四、四九	一、八四	〇、一二	一、七一
蟹	八一、二二	一六、〇〇	〇、四六	一、〇一	一、三一
蛙の股	六三、六四	二四、一七	〇、九一	二、九二	八、四六
松魚(乾製)	七二、七三	二五、〇六	一、二一	—	一、〇〇
ハゼ	七九、一三	一八、三五	〇、五〇	—	二、〇二
フナ	七九、四六	一七、八六	一、四五	—	一、二三
キス	七九、九九	一〇、〇九	〇、六〇	—	一、三二
鰛	七〇、二五	二一、三九	六、七二	—	一、六四
田作(ゴマメ)	六三、六五	二二、四五	五、六八	—	八、二三
泥鰌	七一、三二	一八、四三	二、六九	—	一、五六
田螺	七五、七七	一九、一〇	〇、五五	—	四、五九

第十三章　鷄卵

一　鷄卵成形の順序

試に産卵期中に雌鷄を屠つて體内を檢査したならば、左側腎臟の上半部に於て種々の大さの盲嚢を連ねた樣なものが見付かる、之が即卵巣で茲に卵子が發育するのである、盲嚢の中には粒の大さが點位のものから豌豆大のものが無數に存在して居る、之が即卵の初であるので通稱卵子と呼ばれて居る、此時は仍未だ卵殼も卵白もなく全體眞黄色をして居る、然しながら小粒の外面には更に小なる圓盤が存在して居る之を胚盤と稱して卵子の生活力を司どり此等は共に薄き膜にて包まれて居る。

第三十八圖

卵巣の圖

卵子が漸く成長してある大さに達す

ると自己の重量と他の作用の爲に卵巣を離れて漏斗狀の管の中へ落て行く、此管は即輸卵管と呼ばれて卵の外部に出る通路であるので漏斗狀の部分を時に喇叭管と稱せられて居る茲に於て蛋白は稀薄なる液狀をなして喇叭管の周壁血管より分泌せられ蛋黄の圍を包被し、又蛋黄を包む所の膜は茲に於て其兩端が厚くなり所謂カラザと稱するものが生成せられ、胚盤を一定の位置に保つ樣な作用を呈して來る。

斯の如く諸物質が整成せられたる後初めて卵殼が生ずるので、卵殼が定成せられて後雌鷄が産卵巣に入る樣になると、卵も徐々に喇叭管を下つて産卵せらるゝのである。

二　鷄卵の構造

卵殼　吾々が玉子の殼として知つて居るのは卵殼と云ふので、化學上種々なる石灰鹽類から組成せられていて頗る多孔質である、其孔によりて卵殼の内外に氣體の往來が出來るので植物の種子などゝ同じく雌卵は些少ながら呼吸作用を營

んで居るのである。卵を孵化して既に雛が卵殼中に發育するに及んでは益呼吸作用は著しくなる。

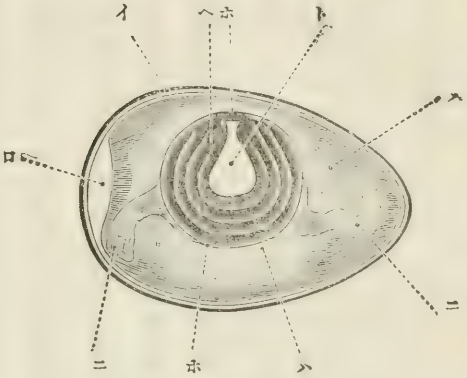
卵殼は色素を有する內外の二層からなつて、內層の方が遙かに外層よりは厚い、其上內層は垂直的に細孔が數多く開いて居る、其孔の外端は卵殼の外層で閉され、內端は開いた儘である、此の構造が氣體交流上重要である。

卵殼は小さな鷄卵ほど比較的重量を增すものである、其れは小さい物體ほど表面積が大になるので、卵殼自身の絕對重量が增大するからではない、鷄卵の重さは種類によりて異るが大凡八匁乃至二十匁の間にあるので卵殼は八分乃至一匁九分位卽鷄卵百分中八、九乃至一二、八を占めて居る。實驗によると乾燥したる卵殼百分中

炭酸カルシユーム	九一、〇
燐酸石灰	六、一
含窒素有機物	三、〇

故に鷄卵百匁目に對しては卵殼が十匁(平均)內外で炭酸カルシユームが九匁一

第三十九圖



卵の縦斷面

(イ)卵殼膜(ロ)氣室(ハ)卵白(ニ)カラザ
(ホ)卵黄膜(ヘ)卵黄(ト)胚盤

分、燐酸石灰が六分、含窒素有機物が三分許り存在することになる。

卵殼膜　卅九圖に見る如く、卵殼の直下は卵殼膜で、之れも二層から出來ている外層は内層よりも厚い、吾々が「ゆで玉子」を剝く時に其鈍端の底で此膜に逢着する膜の内外二層共羊毛狀纖維の數層から組成されて、其中に彈力性結締纖維を交えて居る、だから仲々丈夫に出來て居る。

氣室　卵殼膜は大部分卵殼と密接しているが、只卵の鈍端に於ては少しく分離して居る、此の分離部を氣室と云ふ、氣室には空氣を充して居るので、生みたての卵子にはこれは發見されぬけれど日を經るに從ひ又は孵化の程度が漸進するかに從つて氣室は擴大するものである、其理

由としては卵白中の水分が蒸發して其容積を減するから卵殼を通じて大氣が卵殼膜を壓迫する從つて氣室の擴大を餘儀なくせられるので、卵から雛が出る時分には此の氣室は鷄卵全容積の五分の一位を占領するものである。

卵白。 鷄卵のシロミと云へば何人も熟知する處のもので卵殼膜の直下に位して卵の容積の大部分を之れが占めて居る、普通卵白又は蛋白と稱するもので、粘液狀であるが、黃味即卵黃の近邊の卵白よりも卵殼近邊のものの方が一層液狀をなして居る、卵が古くなると卵白は益液狀をなすものである。

鷄卵を煮て卵白部の斷面を熟視すると透明な層と顆粒狀物質を含める不透明な層とが交互に同心圓を畫いて重なつて居る、普通前者は後者より、より液狀化せる白質層より出來て、何れも網狀の纖維で構成せられ、其網の中に液狀蛋白が存在して居る、卵白の最內側即卵黃を取巻ける卵白層は又液體狀で而も顆粒狀の物質の存在することが明瞭に認められる。「うで玉子」の白味の部分を一寸剝ぐと硝子製の球を破壞した時に其斷面に現れる貝殼狀碎片と同じ樣なフラクリチユアーが見える、之れは二層の蛋白質層が螺線形に配列せられて居るからである、實際其螺

線の方向に從つて、左から右と、鈍端から鋭端の方へ卵白層を裂開することが出來る、

卵白は鷄卵百分中五一、〇乃至六六、四の重量を占めて居る、故に卵百匁目に對して五十一匁目乃至六十六匁四分の蛋白を含有する勘定である、而して卵白百分中には、

水分	八五、七六
蛋白質	一二、六七
脂肪	〇、二五
鑛物質	〇、五九

之れを鷄卵百匁目に對して改算すると水分は四十四匁乃至五十八匁（一合内外）蛋白質六匁六分乃至八匁六分、脂肪一分三厘乃至一分七厘、鑛物質三分乃至三分九厘となる、鑛物質とは硫黄、燐、鹽素、ポタシユーム、ソジユームの如き金屬元素を云ふのである、

「カラザー」生卵を破つて皿の上に出すと卵黄に附着せる不透明の結節體を見出

す其結節は縺れて居るから伸すと二三寸もあることがある、之を「カラザ」と云ふ「カラザ」とは霰石（ヘールストーン）の意で此物が不透明な白色體であるから此の名を得たのであらう「カラザ」はユイル狀をなして居るから一見甚だ不氣味を感ずる熊本邊では此の「カラザ」の中に癩病菌が居るとか寄生して居るとか俗に喧傳するものがある然し確實なる學術上の事實としては未だ發表せられて居らぬ樣である。

卵黃　俗に黃味と云ふ位で多く黃色であるが時に白色掛つて居ることもある。

卵黃又は蛋白と云ふ、卵黃を取り圍んで居るのが卵黃膜（ビテリンメンブラン）で肉眼で見ると一點胚盤以外は皆一樣に見える、けれども白色卵黃と黃色卵黃との二種の蛋白質がある以下之等に關して少し解説して見よう、

卵黃膜　卵黃の最も外側の膜で透明にして多少彈力を有して居る、此膜が破れると其處から中の卵黃が出て來る「うで玉子」の卵黃をよく見ると、其外側に薄い白い膜を見付けるものである、其れが即卵黃膜で、此膜は生卵では無色透明であるけれども煮るかアルコールに漬けると白色になる、此膜を高度の顯微鏡で見ると數多の纖維からなれる事を見止める、其效力は卵黃を含んで居るのに過ぎぬ。

胚盤 生卵を横に置いてピンセットで卵殻に直径四分位の孔を開けて卵黄を見ると、其表面に直徑四「ミリメートル」位の白色小圓盤に目が付く、此の小圓盤は他日雛となるべき原素である「ブラストダーム」と云ふ、即胚盤である、此物は前の卵黄膜の直下に存在して居る、而して常に上向きである、それは胚盤の近傍の卵黄の比重が輕いからで且「カラザ」の働きと相俟て胚盤を上向きに保つのである、此事實は鷄卵を孵化する時に大切なので、卵が如何なる位置に置かれても胚盤は上向きであるから母鷄から熱を受けるに好都合である、所謂造化の妙と云ふべきである、胚盤に付ての研究は發生學上の事となるから玆では解說せぬ事とする。

白色卵黄と黄色卵黄 沸騰しつゝある湯で十分間位茹た卵子を取り出して卵殻を去り、毛髪を以て半分に切斷すると卅九圖の如き圖形が得られる、其卵黄の部分に付て觀察すると、やゝ白色の幅の狭い線層と、黄色の少し幅の廣い線層とが交互に存在することを見付ける、前者が白色卵黄で後者が黄色卵黄である、圖に示したる如くヨークの中心の少し上部にフラスコ形のホワイトヨークがある、此のフラスコを取園んで殆ど同心圓を畫いて白色と黄色とのヨークが層になつて居る

ことも判る此のフラコ形の處は黄色卵黄よりも軟かで充分に煮えぬかの如く見える、然し煮えぬのではなくて之が白色卵黄の固有の性質である、

第四十圖

卵黄の大部分は黄色卵黄から出來て居る、其物を顯微鏡で見ると顆粒狀の蛋白球より成り、丁度第四十圖甲に示せる樣で、其球は容易に碎けるものである、球の直徑は二十五「ミュー」から百「ミュー」位であらう(一ミューは一ミリメートル)又白色卵黄の方は蛋白球が黄色のそれよりも小さい、卽其直徑は四「ミュー」乃至七十五「ミュー」位で、中には一「ミュー」のものもある此の直徑は何れも顯微鏡のミクロメートルで測量したものだ、圖の乙に示せる樣に白色卵黄の蛋白球中には更に微球體を含有して居る。

鷄卵百分中には二五、二乃至三八、八の卵黄がある、其れを鷄卵百匁に改算すると二十五匁二分乃至三十八匁八分の卵黄を有することになる而して卵黄百分中には、

水分	五〇、八二
蛋白質	一六、二〇
脂肪	三一、七六
無窒素浸出物	〇、一二
鑛物質	一、〇九

此の外に少許の揮發油を有して、固有の香及味を與へ又レシシン、色素等を含有して居る。鑛物質中には燐を有すること卵白よりも多く、且少しの鐵分を混じて居る此の鐵分が卵黄に着色を與へることに關係を持つと云はれて居る、又卵黄中には化合體の砒素が微量に存在するとも云はれている、鷄卵數百個を食すると人體に害を及ぼすに足るほどの砒素が體中に集積されるそうである、然し吾々は鷄卵を常食した爲めに砒素に依つて命を短かくした話は未だ嘗て聞かぬ。

卵白の例に從つて鷄卵百匁目中の各成分の量を擧げると水分は十三匁—二十匁(四勺内外)蛋白質が四匁—六匁四分脂肪が八匁—十二匁三分、浸出物が〇、三分—〇、五分鑛物分が二分七厘—四分二厘の勘定となる。

三　鷄卵孵化の過程

有精卵は攝氏三十九度以外の溫度に保つときは大抵二十一日前後にて孵化するものなることは前旣に屢述べた所である、今卵內に於ける胚子の發育順序を知る爲めにブレーム氏の硏究を左に紹介せん。

一　孵卵器に入れてより十二時間の後檢査すれば旣に胚盤膨大し胚子の周圍にある白色體は次第に大となる。

二　二十四時間の後胚子の外方に小なる凸起物を出す、

三　三十時間の後一條の小溝の間に纎細なる條線體を見る。

四　四十八時間の後血管の樣原を生じ脈搏す。之即心臟の始原にして、未だ血液を生せず。

五　三日の後心臟部の發育益進行して中央の小點より小枝を生ず。之即血管にして網狀の脈管纏擴し活力隆盛となる、而して血管の中に胞狀線を認め、又頭眼、脊椎の根基を生す。

六　四日の後卵黃は膨大し卵白は容量を減じ二個の心耳は心臟に接近して形成す。

七　五日の後心臟、肝臟等を認め得翼脊椎共に發育し肺及胃を認む。

八　六日の後稍著しく胚自身の運動を認む。

九　七日の後胚は益發育し肋骨現はれ食道嗉囊膽囊及脾臟を認む。

十　八日の後腦は略完成し胸骨凸起して筋肉を生ず。

十一　九日の後嘴眼瞼を認む骨格益發育す。

十二　十一日の後嘴に色を呈し胚は非常に長大となり、皮膚發育し稍羽毛を認め得、

十三　十二日の後肋骨略完成す。

十四　十三日の後胚は活潑に動搖し翼脊肢等には軟毛を生じ趾も形成せられ嘴は愈丈夫となり腎臟に輸尿管を附着せらる。

十五　十五日の後嘴趾等益堅牢となる。

十六　十九日の後には雛の體に普ねく軟毛を生じ時々微聲を發す而して雛は

嘴を以て膜を破り直接に外氣を呼吸す斯くして二十一日の後遂に嘴を以て卵殼を破り外界に出現す。

四　鷄卵の雌雄鑑別

雛の早期に於て雌雄を鑑別し之を處分することが養鷄上極めて肝要で、同時に至難の業なることは既に述べた通りであるが、若し一歩を進めて卵の時代に之を見分けることが出來たならば云ふまでもなく養鷄業者は莫大の利益を得ることが出來。實に斯業上に新紀元を作ることとなるのである、故に此點に向つて古來幾多の研究實驗が行はれたものであるが一つも積極的の結果が得られて居らぬ、只經驗上多くの人達が一致して居る二三の鑑別法は場合によりては餘程適中することがある、固より根底の不確なる話であるから必ずしも斷定は出來ぬが然しながら此鑑別法を行ふとしても別に左程の費用も手數も要しないのであるから養鷄家は宜しく行つて見るべしである。

一　同一の雌鷄の産みたる卵にては形の長きものは雄圓きものは雌、

二　同一の雌鷄の產みたるものにては光澤の美なるは雄卵然らざるは雌卵。

三　春季の產卵には雄多く秋季のそれには雌多し、

四　若雌に老雄を配したる時の卵は雄多く老雌に若雄を配したる時のそれには雌卵多し、

五　一期の產卵中產初めの卵には雄多く產み終りの卵には雌多し

右の五ヶ條の中一及二は余の經驗にては比較的信用が出來る樣である、就中二は餘程適中する代りに少しく熟練を要する。

人類或は家畜等の生殖を見るに、ある母は男性を多く產みある母は女性を多く產み、又ある母は全たく不定である、此事は鷄にもある樣である。ある雌鷄の卵には常に雄が多くある雌鷄の卵には常に雌が多いと云ふ事は屢見る、近頃蠶蠱の雌雄は誤りなく鑑別が出來る樣になつて蠶業界に一つの福音を傳へたのであるが養鷄界も亦斯の如き光明を待設けるのである。

五　鷄卵の形狀と着色

形狀　卵圓形又は玉子形として何人も知得せる不正楕圓形が鶏卵の形狀である。第三十九圖の氣室の存在する方は概して圓みが勝ちで之を鈍端と云ひ、他方は曲線が強いから鋭端と云ふ、兩端の曲線の度が餘り差の無いものと著しく差異を有するものとがある、余の見た範圍內では概して肉用或は卵肉兼用鶏例へば**コーチン、ブラマ、ラングシャン、プリモースロック**等の卵は兩端共圓みが殆ど相等しいけれども卵用鶏種即ち**レグホーン、ミノカ、アンダルシャン**の如きでは兩端の曲線の度が可成差のあるのを產卵する樣である。勿論之れは概括的の事で、例外は澤山ある**ミノルカ**が**テニスボール**位の卵を生んだ話もある、同じ牝鶏でも日によつて形狀の違つたのを生む事のあるは飼育者の常に見る處である。

之には大體赤色と白色との二別がある、卵殼中にある色素が混合したので鶏の種類によつて着色の程度が違ふ、鶏の輸卵管の壁膜の分泌物によりて管中に於て卵殼が形成される時に之の色素も一所に分泌せらるることゝ思はれる、亞細亞種なる**コーチン、ラングシャン、シャム**及び我國の地鶏の卵は赤色を帶びて居る又英國原產の**ドーキング**地中海沿岸原產の**ミノルカ、レグホーン**等の卵は白色である、

卵殼が白いとか赤いとかで滋養分としての卵の價値が違ふ樣なことはないが併し人の嗜好によつて兩者の間に價格の差のあるのは止むを得ない、佛國の鷄卵は卵殼が赤味が多いので英國に輸入されてから他國產のより高價であると云ふ、我國でも此傾向はある。

雌鷄の飼料と卵殼の着色の關係は未だよくは判つて居らぬが配雄の種類によりては多少着色が異なる白色の卵を產みつゝある**アンダルシヤン**の雌が**コーチン**の雄を配したが爲に卵殼に微紅を帶びることがある、一般に採卵種の卵殼は白色兼用及肉用種のは赤色を帶びて居るものであるから赤殼の卵を多產させ樣とするには肉用叉は兼用種から導いた雜種を作成するに若くはない。

六　鷄卵の大小と比重

鷄の種類によつて卵に大小の差のあるのは勿論で、同じ牝鷄でも春、氣候のよい時には大なるものを生み人の元氣も銷沈すると云ふ冬枯には小卵を產む、時とすると殆んど病的に非常に大なる卵を產むことがあるもので、而して其中には二個

の卵黄が這入つて居るもので鵞にては屢三個の卵黄が寄合つて居ることがある、重蛋黄卵子とは即之れである、之は卵子が卵巣を離れて喇叭管に落るときに何等かの原因で二個の卵子が同時に入つて卵白により包まれた場合に出來るものである、鵞の卵では偶三個の卵黄が一殼中に包有せらるゝ事がある、重蛋黄の卵は不恰好に細長く又は太短かいもので、時としては鷄の卵でも五十匁の重量を有して居るものがある、重蛋黄の卵子は無論種卵としては採用してはならぬ、兩頭四足等の異形の雛を生ずる事があるが、成鷄とはなり難いものである。

嚴密に曰ふと飼料の如何が卵の重量に多少の影響を及ぼす樣であるが、一般に鷄卵は何れも比重が相等しいと見得るものであるから其大さは重量に比例する夫故に重さで大小の區別が出來るのである、普通鷄卵は一個二十匁内外を大卵とし十五、六匁を中、十二三匁を小卵として居る、鶩卵は十五匁乃至二十二三匁吐綬鷄のは二十匁乃至三十匁鵞卵は三、四十匁乃至七十匁内外ある。

又一定の量に對する卵の數の多寡によつても大小を區別することがある鷄卵一貫匁に對しての數は、

大卵　五三—五五七
中卵　七六—一一三
小卵　一一三—一三三

産卵鷄としては大きな卵を數多く産するのを以て飼育者の理想として居る、然しながら大なる卵を産する種類は數に於て少ないことを免れ難いもので、佛國種の「クレブコーア」の如きは二十匁内外の卵を常に産むのであるが一年の數は百個位に過ぎない。

今探卵及卵肉兼用の目的で普通養はれて居る四五に就て實例を擧げると、

	鷄卵一個平均重量	一ケ年平均産卵數	一ケ年産卵總重量	雌鷄一羽平均重量	全體量一匁ニ對スル産卵量
レグホーン	一七、〇匁	二〇〇	三、四〇〇貫	六、〇〇匁	五、六六匁
ミノルカ	一八、五	一五五	二、八六七	七、〇〇	四、〇九
ハンバーク	一三、五	二〇〇	二、五〇〇	四、五〇	五、五五
アンダルシャン	一八、五	一八〇	三、三三〇	六、五〇	五、一二
レットキャップ	一四、〇	一九〇	二、六六〇	七、七五	四、〇九

オーピントン	一七〇	一九〇	三、二三〇	九、二五	三、四九
プリモースロック	一八〇	二〇〇	三、六〇〇	七、七五	四、六四
ナゴヤコーチン	一六、五	一七五	二、九八七	七、〇〇	四、一二

生體量一匁に對する産卵量 と云ふのは一ヶ年の總産卵量を雌鷄の體量で除したものを云ふのである、生體量の大なるものは飼料を多く食し從つて飼料入費も多きを要する故に採卵の目的に對しては餌費の少なく産卵量の大なるものが利益である、右の表に於てレグホーンの五匁六六の如きは採卵用鷄としての優たるを示すものである。

比重 生みたての鷄卵は比重が大凡一、〇八位のものである、卵殼内の水分は毎日蒸發するものであるから〇、〇〇一八以上の比重が減切して行く、一例を擧げると。

	比重
産れたての卵	一、〇八
一週間を經過せるもの	一、〇六
三週間以後のもの	一、〇五

腐敗卵　　一、〇二五　　一、〇二

故に比重によりて其新古を見分ける事が出來る夫には適當なる比重を有する食鹽水を作つて試むるのがよい、例へば一、〇五〇比重水を作つて之に卵を入れ若し浮く樣であつたならば其卵は腐敗して居るか腐敗に近きものと見て差支ない、食鹽水にとかしたものゝ概略の比重は次の如きものである、

水一升に食鹽八十匁を混じたるもの　一、〇八

水一升に食鹽四十匁を混じたるもの　一、〇四

水一升に食鹽十五匁を混じたるもの　一、〇一五

斯の如く比重水を作らば適宜に自分で實驗的に鷄卵の新古を驗することが出來る右の外鷄卵の新古を鑑別する便法を紹介せん、

一　卵殼の光澤によりて判知し得、

新鮮なる鷄卵は美なる光澤を放つて居る、古きもの又は腐敗せるものは穢色し又は脂油の分泌せられたるが如き光澤を放つて居る、試に新鮮なるものと互に相對照比較せば直に判別が出來る。

二　振盪の音により判知し得。

卵を手に握りて振盪するときに古きものは音を發す音を聞くも、未だ腐敗せざるものは半流動體を振るときに生ずるが如き音を發し全く腐敗せるものは水を振る如き騷音を生ず。

三　日光に透して判知し得、

新鮮なるは美紅色に光を透し腐敗せるは暗黑なり、此他猶二三の鑑別法あるも上記の何れかにて大抵誤りなく見別けることが出來る。

七　食用卵の貯藏法

食用卵を貯ふることは實際上に又經濟上に極めて必要である、歐洲に於て養禽業の隆盛に赴きたのは食用卵の貯藏法が進步したと云ふことに餘程關係して居る、若しも産卵當時の狀態で卵を取扱つたならば是非共二三週間の中に消費してしまはなければならぬ、故に遠方に送るとか絕へず供給に應ずる場合には是非共數ヶ月を貯へる樣にしなければならぬ、元來鷄は春季に産し夏季は寡産するもの

であるから、大抵の土地では夏期を必ず卵價の騰貴する故に春先の廉價の卵を貯藏して夏に至つて高價に賣拂ふと云ふことは養鷄の經濟上に大なる得策である、食用卵の貯藏法としてこれ迄知られたるものは凡そ二三十種ある今此等の中最有効なる二三に就て述べん、

一、飽和石灰水中に浸す、

二、水ガラス液中に浸す、

三、華攝林を塗漆す、

右の方法によるときは大抵四五ヶ月間は保存し得るのである、但し卵は新鮮なるものを選ばなくてはならぬ、又近來米國に於ては冷藏法を用ひて鷄卵を貯藏し夏秋鷄卵の拂底なる頃遠隔の地に輸送して居る、其方法は一種の冷藏庫を設け倉内の温度は華氏三十二度内外を昇降して居る樣な設備とし、且つ空氣は常に新鮮にして濕氣を含まぬ樣にし卵を並べた箱を層重する、此の箱は空氣の流通を欲する爲に上下左右に小孔を穿つてある、勿論茲所に貯へる卵は新鮮にして卵殼に損傷の無いものを精選しなくてはならぬ、斯の如くして何等の試藥も用ひずして數

ヶ月の時日を完全に貯へられてある。

又米國モンタナ試驗場の溶液貯藏法の報告を見るに。

一、石灰　三、二分の一ポンド
　食鹽　四、四分の三ポンド
　清水　八ガロン

二、水ガラス　一分
　清水　十八分

右二種の溶液を作り各六十ダズンの新鮮なる卵を浸し六ヶ月後之を取出して見ると、前者は卵殻稍碎け易くなりし外別して變化なく、後者は殆ど新鮮卵と區別し難き外觀を呈して居つた、但し何れの方法にても有精卵は無精卵よりも腐敗し易きが故に貯藏の目的には可成無雄雌鷄の産卵を選むべきことが注意されてある。

八　食用卵の運搬法

米國にて輸出用に供する木箱は、外側の長二十八インチ幅十二インチ四分ノ三高十三インチの大さに作り内側には厚紙を以て小房の仕切ある枠を入れ一房に一個の卵を入れ全體に三十ダズンの卵子を入れ得る樣に出來て居る、我國では大抵石油箱を用ひて居る樣であるが之にて差支ない、卵を之に詰めるには先づ其箱が充分乾燥して居なくてはならぬ次に二三寸の厚さに底に鋸屑を布く此鋸屑も少しも濕氣を含まないものでそして土砂塵埃等の混合して居らぬものがよい、卵は始め其の大さを揃へて大卵と小卵とは別の箱に入れなくてはならぬ、底の鋸屑の上に可成隙間の少ない樣に一列に卵を置いたならば個々の間隙には鋸屑を充たして互に接觸しない程にする、其上に一、二寸の厚さに鋸屑を布き充分に押し詰め更に卵を一列に並べ順次此の如くして箱に充滿したならば最後の鋸屑は箱の縁よりも稍高く載せ之の上を蓋にて押して平となし蓋を釘付とする。かくして荷作りをしたならば、汽車汽船乃至は荷車等にて之を遠所に送るも決して破損の恐れはないものである。

第十四章　鷄の去勢術と肥膃法

一　鷄去勢の利

種禽家は別として其他の目的に鷄を養ふ場合に雄雛は如何に處分したならばよいのかこれには我國の農家は常に閉口して居る、實際雄の一、二ヶ月位經過したものでは殆ど致し方に困るのである、之を仲買に賣拂ふとしても先づ無代價と同じ樣なもので其上商人も買つて行く事を喜ばぬものである其儘普通の飼ひ方をして成鷄としたならば百目何錢と云ふツブシに賣れるにしても、飼料手數等を計算して見た場合には多くは多少の損失をしなくてはならぬ、或は農家などで全然放飼して成長したものならば其れ丈副利もある譯であるが其代りに產卵鷄を放つたならば尙遙の利益が得られる、且雄雛の中大となれるものは食量却て成鷄よりも多く、擧動亂暴にして鬪爭を好み又は宅地附近の作物を荒す等、實に管理に困るものである、茲に於て鷄の去勢術を心得て置くことが必要となつて來る。

去勢術とは雄鷄の睾丸を截取つて生殖機能を失はしむる手術を云ふ、但し雌鷄

の生殖器を割去することもあるが之は滅多に行はぬので主として睪丸割去のことを云つて居る、去勢した鷄のことを剦鷄と云つて西洋では盛に飼育して居る、剦鷄の肉は頗る美味なもので佛蘭西人は殊に之を賞美し、其價も普通の鷄肉よりは二割程の高價を持つて居る、鷄を去勢すると如何なる利益があるかと云ふに、

一　生殖の念が消失し、非常に柔順となり、雌鷄を追ひ廻ることもなければ、他の雄鷄と爭ふことも少なく、管理が容易くなる、

二　比較的食量が少なくて然も肥腴する、

三　肉味が頗る佳良となる、

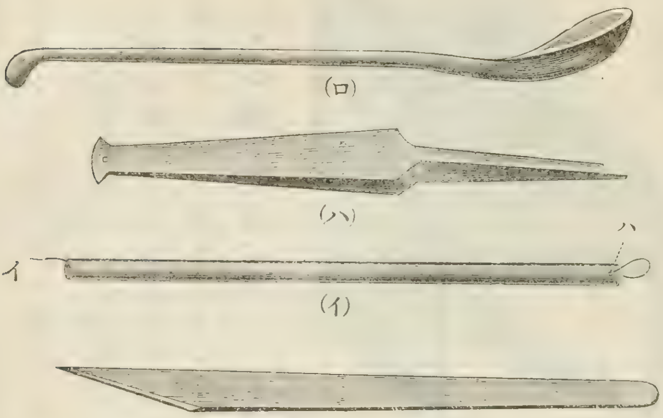
我國では未だ剦鷄の肉が市場で左程有力でないが肉の需要が増すと共に一般の人が肉味をやかましく云ふ様になつたならば、必ず高價に賣れるに相違ない。

二　手術

馬、豚、牛なども亦柔順にする爲に、或は肥腴の目的に屢去勢せらるゝ、此等と違つて鷄は生殖器が外部に表はれて居らぬ、故に手術が困難である樣に思はるゝが、併

しながら實際は極めて容易なものである、佛蘭西では小兒婦人などが大抵去勢を行つて居る、支那人も亦去勢術は頗る巧で簡單なる道具を用ひて多數の鷄を去勢して居る。

第四十一圖



手術を行ふに先だつて割勢器を一と通り揃へなくてはならぬ、之は坊間にて販賣して居るものは中々高價で體裁も立派であるが然しながら實際必要なものは、

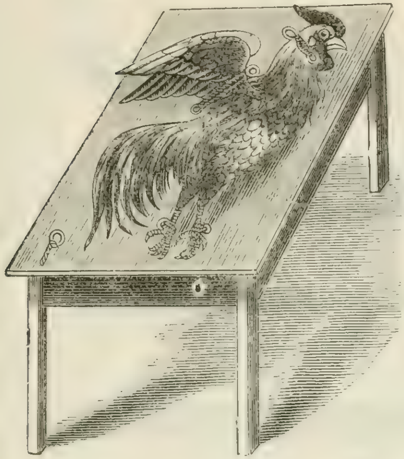
一、解剖刀　一挺　四十錢位
一、匙　一本　七、八錢
一、ピンセット一個　二十錢以下
一、石炭酸水(五十倍)
一、縫針と糸

以上の他に上圖(イ)に示す樣なものを一

個手製で作れば夫れで充分である。之を作るには細筆の軸か或は今少し太き竹を三四寸の長さに切り、一端に近く(は)なる穴を開け絹糸或は馬の尾毛の丈夫なるものを取りて之の穴に結付け圖の如き輪を作つて竹の他端に糸の他端(イ)を引出す。

さて割勢器か一と通り揃つたならば次に手術臺を準備して置く事が必要である、手術臺と云ふのは鷄を此上に横たへて去勢をするもので敢て特殊の製作をする必要はない、桶の蓋或は板にても差支へないので其大さは長三尺幅一尺五寸か二尺程あれば充分である、其面には三ヶ所に穴を開けて麻糸を結付けて置く、茲に去勢すべき鷄を左側を下にして横たへ、一ヶ所の糸にて翼を縛り、他の二ヶ所に脚を開かせて夫々縛り付ける。

第四十二圖



去勢すべき鷄は豫め二十四時間乃至三十六時間食餌も水も一切與へぬ樣にして置くことが必要である、若し之の事を行は

ずに手術の際飽食さして居つたならば多量に出血して手術を困難ならしめるし、又手術後澤山の食物が胃中にあつては宜しくない、故に若豫定の時刻に手術が出來ぬ樣になつたならば消化し易き食餌の少量を給して翌日に延ばすのがよい。

手術を施すには充分明るい所で塵埃の起らぬ樣にして道具は一應石炭酸水で洗つて置くがよい、最初に右側の最後の肋骨と終より二枚目の肋骨の間を石炭酸水にて洗ひ、刀を以て約一寸位の長さに此間の皮膚を切開く、雄雛の此部分には多くは羽毛が密生して居らぬものであるが若し手術の障害となる程生じて居つたならば一本宛引拔て後初めなくてはならぬ、肋骨間を切開したならば助手をして創口を指にて開かすると肋骨は彈力性のものであるから充分內臟の樣子が分る程廣くなるそこで內臟を包んで居る、薄膜をピンセットにて引張り刀を以て之を切ると脊髓に附着して稍長形の小なる豌豆の如きものが見えて來る、之が即右の睾丸である、之を拔取るのは容易であるが然るときには出血の爲に後の手術が困難となる故に左の睾丸から初める方がよい、左睾丸は今は見へて居らぬが右睾丸と同じ樣に脊髓に附着して左側にある故に匙を以て內臟を靜かに片寄せ、指を入

れて採つて見ると現はれて來る、何れの睪丸も確と薄膜を以て脊髓に引付けられて居るものであるからピンセットと刀とを以て之の膜を破るときは自由に動かし得る樣になり附着點の有樣が充分に知れる、茲に於て(イ)なる器を採つて輪に睪丸を入れ竹を脊髓に押付けつゝ糸を引くときは睪丸は根元より切斷さるゝものである、切取られたる睪丸は匙を以て拯ひ出せばよい、但し糸を引く際注意すべきは竹軸を糸と共に引揚げんとするときは睪丸の附着部に沿へる大動脈を破り出血して鷄は直ちに死するものであるから之のことを充分注意しなくてはならぬ刀を以て拔取るも此動脈に注意すればよいのであるが未熟者は往々仕損じ易きが故に、前記の道具を用ふるのが安全である、今一つ注意すべきは睪丸は充分根元から全部を取去らなくてはならぬ、若し些少にても殘すときは次第に之が發育し手術は無効となるものである、右睪丸は左睪丸と同樣に拔取ることが出來る。

左右の睪丸を拔去つたならば血液の凝固せるものは匙にて悉皆拯ひ出さなくてはならぬ、尤も鷄の胃腸を乾涸さして置けば格別出血するものではない、然る後内臟を舊の如くに整へ、創口は石炭酸水にて洗ひ皮膚のみを縫つて置く、此上に少

許の綿をあて繃帶を施して伏籠の中に放ち柔き食餌と清水とを與へる、之にて手術は濟んだのである、二三日の後に局部の皮膚に氣腫を生ずるものであるが之は針にて小なる穴をあけると空氣は逸出してもとの如くになるものである。

以上記述した所では手術は中々面倒な樣に思はれるが、實際に行つて見ると極めて簡單容易なものである助手は用ひなくとも手製で開張器を作つて置けば一人で足りる、石炭酸水はなくとも清水を使つたならば大抵よいものである、少しく熟練すると一羽の去勢は僅々三四分の時間で出來る、故に百羽や二百羽の手術は譯のない話である、只少しの經驗を持たぬ人は他の手術を見るか、或は見ることの出來ぬ場合には屠殺鷄に就て一二度練習するがよい。

去勢するには孵化後何箇月位が適當であるかと云ふに一般に云ふと三ヶ月前後が好期である、此の位の雛は未だ肋骨間の肉は薄く又睪丸附着點の筋が發育して居らぬ故に拔取に容易である。生長の遲きものは三ヶ月以後にても宜しいが、一旦交尾したものは睪丸肥大となり筋は强靭となりて困難である。

去勢するには如何なる鷄種が適當であるかと云ふに、剦鷄は肉を得るが目的で

あるから肥肉性の鷄種がよい、レグホーンの如き又アンダルシヤンの如き卵用種では去勢するも効が少ないプリマウスロツク、ワイアンドツト、コーチン、ブラマ等の兼用或は肉用鷄ならば最も妙、其他此等の雜種鷄も又劊鷄とするに屢恰適して居る。

三　鷄の肥膃法

劊鷄及其他の肉用鷄を屠殺する前には充分に之を肥膃さして肉量を多からしめ同時に出來得る限り肉味を佳良ならしむることが必要である、肉の美味なりと云はるゝシヤム、地鷄等も屠殺前に腐敗しかゝつた食餌を與へるとか又は放飼して不潔物を啄食さするときは肉に惡臭を與へて大に價値を落すことがある。

鷄を肥膃さするには、此目的に向つて作られたる肥膃舍に押込めて置くことが普通である。肥膃舍としての條件は靜かな場所で舍内を薄闇くし兼ねて暖なる場所ならばよいので要は鷄の體溫を烈しく散せぬこと、運動を禁ずること、精神を安靜ならしむること等にある。故に空氣の流通と清潔とに注意したならば隨分狹い面

積の所に多數の鷄を置ても差支ないのであるが、成るべくは一羽宛に區劃して置く方が宜しい、而して其食餌は澱粉に富んだ消化し易き煉餌を給する、例へば玉蜀黍の粉と、大麥粉とを混じて之を温湯で捏り、未だ温みの全たく失せぬ間に與へる、其分量は制限はないので一日二回か三回に食するだけ何程にても與へる、斯の如くして二週間乃至三週間を養つたならば直ちに屠殺するのである、大抵二割乃至三割位の體量を増すことが出來るもので**コーチン**の雌鷄などは終には自體の運動か不自由となり、床に伏して餌を攝る位に肥大となるものである。

佛蘭西の**ウーダン**地方に行はれて居る、肥腽法を簡單に紹介すると高さ三尺廣さ三尺長さ十二乃至十五尺の箱を作り、暗き肥腽室の中に之が幷べられて、此中に鷄を入れる、其數は鷄體の大小によりて適宜に増減し、餘り密集して混雜せぬ位を程度として置く、箱の中には動かし得る隔壁が作られて給食の際には鷄を一方の端へ押し出す樣になつて居る、温暖を保たしむる爲には冬期は藁床を與へ脱糞の爲に不潔となるときは順次に藁を足して一尺以上の高さに達する位にもする。夏期は藁床を屢取換へて糞の掃除を怠らぬ樣にする、食餌は燕麥の粉或は之に蕎麥

粉を交へたものを牛乳で緩く捏つて一日に二回時刻を定めて食する限り與へる、斯の如くにして二、三週の後には良肉の著しく增量するものである。

右の方法の他歐米にては强制肥膃法と云ふことを盛に行つて居る、此法は人工を以て無理に食餌を給與するにある。餌料としては主に蕎麥粉を牛乳にて捏りたるものを用ひ、或は蕎麥粉、大麥粉、燕麥粉、玉蜀黍粉等を牛乳か水にて捏り、時としては之に脂肪を加へて直徑二、三分長さ二三寸の棒狀となし鷄を捉へて、嘴を開かしめ、食道に押込むのである之を一日に二回宛初は二、三本を與へ漸次增量して十五六本とする。

或は流動食餌を强制法にて與へることもする、之には只前記の食餌を柔かく流動し得る位に調製し、漏斗を鷄の口に當て流し込むのである、其他漏斗の代に一種の强飼器械も用ひられて居る之は多數の肥育には時間と勞費との上に經濟である。

第十五章　鷄の疾病と其治療法

凡そ鷄は他の動物と同じく飼養管理の方法を誤るときは忽ち病氣を釀すに至るものである、一旦疾病に犯されたるものはたとへ治癒するも相應の手數を要するものなるが故に、務めて病禽を出さぬ様に豫防を怠つてはならぬ。

病氣の原因は千差萬別なるも氣候及び食餌の激變、榮養の不良、鷄舍の不潔、多數鷄の雜居等は最も屢病を誘ふ基である。遠所より種禽を取寄せたる場合には氣候の變化の爲に往々病氣を惹起すものである、又は彼我食餌の變更の爲に消化器を損じ從て榮養を害し易い。故に斯の如き場合には務めて當分の中寒濕暑氣の影響を受けぬ樣充分に保護を加へ徐々に其地の氣候に適應せしめなくてはならぬ、同時に食餌の給與は豫め先方の食餌および給與の方法を得知し置き、之に準じて變化して行かなければならぬ、斯の如き手數を施すときは遠距離の地に移飼するも、大抵疾病に犯されないものである、種禽用其他の目的にて鷄を汽車汽船の便により遠所に送る場合には、鷄の丈に想應する竹籠を作り、底には蓆を敷て一籃に一羽

を入れる。食餌としては穀粒を適宜に與へ、水は與へざるも青菜を吊して置くときは數日の旅行に堪ゆるものである。

若しも一旦病禽を出したならば病性の如何を問はず直ちに他鷄と隔離しなければならぬ、然る後徐ろに病性と病勢とを觀察して、稍治療の見込ありとするも、多くの手數を要するとか、面倒な藥餌を投じなければならぬ場合には、未だ甚だしく衰弱せざる中に屠殺して食用に供するのが屢利益である。併しながら高價の種禽其他容易に得難き鷄種であつたならば、充分手を盡して恢復をはからなければならぬ、故に養鷄家は之等手當の方法と病の治療法とに就ては、相應の智識を要するのである。

成鷄の病氣は稍早期に認知することを得、又體の抵抗が強きが爲發病後比較的經過長く、從て治療の法容易なるも、雛に至つては遙かに面倒である、即生活の機能が未だ微弱なる爲施藥の効顯はれざる中に、忽ちにして衰弱し忽ちにして斃死するもので、其經過が至つて短かい。之は雛の幼なる程然るので、孵化後一週間以內の雛にては殆んど治療の見込はないものである、故に幼雛にありては豫防の外殆ん

ど策はないもので、發病即斃死を見なければならぬ。

鷄舍の消毒が衞生上常に欠く可からざるものなることは既述せし所なるが、病禽の取扱に際しては猶特別の注意を消毒上に要する。病禽を見出した場合には若しも夫れか傳染性の病氣であつたならば、直ちに鷄舍および器具には十分の消毒を施さなければならぬ、而して治療の際使用せし籠食器又排泄物は時を經ずして消毒或は燒捨等の手數を省いてはならぬ。

病の性質が傳染性なると非傳染性なるとを問はず、鷄群中一二の病鷄を生じたる場合には、他の健鷄に就ても充分の觀察と斟酌とを忘れてはならぬ、例へば氣候の惡變の爲に感冒に犯されたる一羽の鷄を認めたならば、其他に未だ輕症なるものが多くの場合にあるものである、故に注意して容貌擧動等を觀察したならば發見することが出來る。若し此の事を怠つたならば日々重症の鷄を見出す樣になるものである、或は下痢食滯等に惱む鷄があつたならば全般の食餌に就て斟酌しなくてはならぬ。凡て一鷄舍に養はるゝ鷄群は皆同一の狀態の下に生存するが故に抵抗力の薄弱なものが先病氣に罹るものである、故に全體に就ても又この傾向あ

るものとして注意を拂はなければならぬ。

鷄病の種類は他の動物と同じく極めて多樣である。其種類により或は輕症の鷄などにありては單に相當の手當のみにて、別に施藥の必要のないものもあるが、然し一般に夫々藥物療法を施さねばならぬ。故に藥劑の配合に就て多少心得て置く必要があるのである。

現今日本藥局方で用ひられて居る藥劑秤量の單位は瓦としてある、即攝氏四度に於ける蒸餾水一立方センチメートルの重量を一瓦と云ふ、而して藥物を秤るには一定の秤量器があるので皆瓦を單位として製作されてある、秤量器には固體用と液體用との二種がある、何れも備へて置かなくてはならぬ。前者は四瓦秤にて七八十錢、後者は十瓦容量にて二三十錢位のもので、坊間の藥店に就て求めることが出來る今調劑の一例を示すと、

重炭酸曹達	二、〇
稀鹽酸	〇、五
水	一〇〇〇

右の如き處方により調劑せんとするには、固體秤器にて重炭酸曹達の二瓦を秤り、次に液秤器にて稀鹽酸の半立方センチメートルと、水の百立方センチメートルとを秤り、之等を瓶に入れて振盪するときには、直ちに給與して差支ないのである。

一　傳染病

一　家鷄虎列刺

鷄病中最も恐るべきは傳染病である、此病氣の起原は十八世紀の終りの頃佛蘭西のロンバーヂー地方に發して頗る猖獗を極め、次で十世紀の初には巴里附近に蔓延し爾後印度伊太利獨逸魯西亞等に侵入し恰も人間の虎列刺と同時に家禽界に大慘害を及ぼしたことがある。

我國にては明治十一二年の頃、愛知縣を初として各地に鷄虎列刺が跋扈し、多數の成鷄および雛を失つたことがある。後二十七、八年には京都地方に流行し三十三、四年にも稍各地に流行した。

症狀　感染してより一日を經過せざる中に病の徵候を現はすものもあり、或は

二週間位の間潜伏して居るものもある、病氣の經過は概ね迅速にして症狀を察知する遑のないものもある、稍緩慢なるものは沈鬱して首を垂れ體を支ふるの力乏しく歩行は不確實となる、而して甚だしく渴を覺え頻に水を欲す。嗉嚢は膨滿して初期より下痢を催し、白色の粘液を瀉泄し泡沫を交へる。病勢亢進するときは排泄物は暗黃色或は綠色となり、眼球は凹陷し、呼吸困難となり、顏面褪色し、肉冠は不快なる暗色を呈するに至る、而して蹌踉として倒れ其儘睡眠狀態に陷りて斃死するものあり、或は痙攣を發し、或は輾轉して死に至るものもある。

屍體は迅速に冷却強直し、嗉嚢をよび腹部は青綠色を帶び皮膚は蒼白となる、口窩及び鼻孔は白色の粘液にて充たされ、筋肉は臭氣なく淡赤色を呈す。

消化器は本病の爲に著しき變化を受け、舌端の上部は白色に變じ、嗉嚢は酸臭を放つ、其他腹は充血して赤色となり内容物は灰白色を帶び、暗赤色の粘膜を生ず。肝臟は變色し實質軟化して脆弱となる。肺、心臟及び腦腔も又充血或は溢血の狀を見る。

病原　バチルス、コレラ、ガリナルームと稱する一種の黴菌なり、

誘因　天氣陰濕食餌の不良鷄舍の不潔飲水の腐敗等は重なる誘因をなすもので從て梅雨の候に發生し易い。

素因　老鷄よりも雛鷄に多く俗に雛虎列刺と云はれて居る鷄の外家鴨、吐綬鷄鵞、家鳩、雉子、珠鷄、孔雀等皆該病に罹るものである。

消毒劑　虎列刺菌は空氣中にありては容易に死滅するもので攝氏五十度の乾燥熱に抵抗することが出來ぬ、其他千倍の昇汞水、二十倍の石炭酸水、稀薄なるフォルマリン液等にて忽ち生活力を失ふものである、故に鷄舍器具排泄物等は此等の藥劑にて處理しなくてはならぬ。

屍體は之を食用として差支なきも、臟腑、血液等を散亂する恐あるが故に、其他の附屬品と共に燒却するが安全である。

治療法　該病に罹るときは殆ど斃死を免れぬ、古來幾多の治療法あるも病勢の亢進迅速なるが爲め確實の治療法を得ることは困難である。

左に二三の方劑を列擧して見ると。

一　ブラックタバッコーの一片に熱湯を注加して液汁を製し之にて麥粉を煉

り一日に數回適宜に分與す。別に飲水中に前記の液汁を混和して飲用せしむ。

二　リユーウキス氏の治療法

（い）強明礬水を一食匙宛毎日二回内服せしむ。

（ろ）蕃椒烟硝及び的列並の合劑或は重硫酸曹達一オンス（七匁強）を水一ガロン（凡一合）に溶解し病鷄に隨意飲用せしむ。

三　明礬樹脂綠礬硫黃蕃椒各六十瓦を粉末となして配合し、食匙三杯を穀粉三十瓦に加へ湯にて捏り適宜に投藥す。

四　クーパー氏の方劑

蕃椒粉末	二分
精製白堊	二分
健智亞那末	一分
木炭末	一分

右の配合を羊脂に加へて丸劑となし内服せしむ。

五　硫酸鐵溶液（水百分中〇、五乃至一、〇の硫酸鐵を含有するもの）或は稀鹽酸或

は單寧酸(水百分中一、五乃至二、〇の鹽酸又は單寧酸を含有するもの)を飲用水に代へて備へ置き、隨意に病禽に飲ましむ。

豫防法　既に述べたるが如く、本病は治療困難にして傳播迅速なるが故に、務めて豫防に意を注がなくてはならぬ、本病の流行地より鷄其他養鷄に直接關係ある物品の買入を禁じ、特に鷄舍の清潔、良食餌の給與、飲水の新鮮なる樣注意し、乾燥清楚に總てを保たしめなくてはならぬ、曾て佛蘭西の細菌學者パストール氏はコレラバチルスを中性若しくはアルカリ性となしたる鷄肉スープに移植培養をなし棉栓を施したるフラスク中に數月間放置したる、後此培養液を健鷄の腹皮下に注射し試驗したるに、該鷄は虎列剌菌に對して強き抗毒性を有するを見たりと云へり。併しながら此方法の全能なるかは俄かに信ずることが出來ない樣である。

二、炭疽病(或は黑瘟とも云ふ)

炭疽病は極めて猛烈なる傳染病の一種である、家鴨、鵞、吐綬鷄、家鴿の他、人類、家畜等の哺乳動物も感染す。

症狀　病畜は食慾全く止み羽翼を垂れ、惡臭ある下痢をなし、鼻腔よりは血液狀

の粘液を漏す、肉冠及び肉髯は暗色となり、遂に紫黒色と變ず、皮膚及び口窩には帶青赤色の斑點を生じ、羽毛は脫落し、震慄痙攣を發して遂に斃死す、急激なるものに至りては殆ど何等の症狀を認むるの遑なく忽焉として終るものがある。

病原　は一種の黴菌にてバチルスアントラチスと稱す。

誘因　烈しき寒暑、濕氣、飮用水の腐敗等も亦病を誘ふ基となるべし、又炭疽病に罹れる他の動物の血液、廢棄物等を食餌或は飮水に混じて攝取したる場合に發病す。

治療法　經過迅速なる爲概ね施すの術なし、病禽を發見せば直ちに之を隔離して溫暖なる場所に移し、石炭酸を飮水に混じ、或は硫酸鐵の溶液を水に和して服用せしむ。

豫防法　鷄舍の掃除を嚴にし、濕氣を防ぎ本病の流行地附近と交通は一切遮斷せざる可からず殊に本病流行の際には死鳥獸の肉を鷄に與ふることを禁ず可し。

三　結核病

牛人類等に最も多く家禽にも亦傳染する病氣である。

症狀 虎列刺病炭疽病の如く病勢は激烈でない、病勢亢進するに從ひ漸次衰弱を加へ、食慾減退し顏面憔悴して脚弱く、頻りに咳嗽を催すものである、肉冠肉髯は血色を失ひ白色の斑點を生じ、時々下痢を催し、羽毛は光澤を失ひ、呼吸困難となりて遂に斃死するものである。

病原 一種の黴菌にてツベルケルバチルスと稱し、冷熱に對する抵抗力は强きも、日光に曝らすときは數時間にて枯死す、然しながら芽胞は久しき間生活力を保持するものである、

誘因 寒冷なる宿舍、空氣の流通不良、濕氣過多、日光不足等は屢本病を誘發するものである、試に放飼せる家兎と陰鬱なる日蔭の柵に養へるそれとに就て試驗を行ふに、後者は前者よりも本病原菌に對して遙かに抵抗力が弱い、其他肺癆患者の痰、死したる鳥獸の臟腑を食ふことも亦誘因となるものである。

治療法

一 滋養食餌を多量に給し、溫暖なる場所に移すときは効あり。

二 テセットミーア氏の療法は麥粉を肝油にて捏り、之を多量に給與し溫暖な

る場所に移すことは一と同じ。

本病は輕症のものは治愈し得るも、重症に陥りては概ね斃死を免れ難いものである。

四 實布的里病

家禽の外人畜に發する傳染性の劇しき一種の病氣である、殊に鷄には最も罹り易き病氣の一つである。

症狀 病鷄は食慾欠乏して一所に佇立し、羽毛は光澤を失ひ、冠は漸次病勢の亢進と共に鮮紅色を失ふ、口を開いて咽喉部を視るときは白色粒狀の腫脹を發生し粘液を分泌すること非常なり、其他氣管支、鼻腔、眼窠等の粘膜を犯し時として消化器の粘膜を犯すこともある、病勢亢進するときは鼻腔眼瞼より絶へず濃液を漏出し衰弱して遂には斃死するものである。

病原 ミクロコッカス、デフテリカスと稱する一種の球狀菌で、粘膜淋巴液血液等の中に見出さる。

誘因 天候の激變、取扱の不注意濕氣過多等によりて誘發する所のものである、

本病は梅雨の候に雛上りの鷄に多く發し、或は夏期降雨多く大氣の濕潤せる際には産卵鷄も犯され易い。

治療法 治療法は甚だ多く一般に奏効確實のものなしと云はれて居るが、余の經驗にては初期に少しく手當を施すときは大抵治癒するものである。

一、リユーウキス氏療法

最初に羽毛或は柔き布片等を濕はして充分口腔内の粘汁を拭ひ、後硝酸銀を塗るか或は硼砂末を塗抹すべし。

二 鹽酸加里の百倍溶液を作り一食匙宛一日三回に内服せしむ、

三 ブランデーおよび桂皮油を少許宛内服せしむ。

四 筆を濕して適宜の食鹽水にて咽喉部を洗滌す。

以上の四法中最も簡單にして然かも有効であるのは四の食鹽水洗滌法である、病鷄は氣管内に多量の粘液を分泌する爲呼吸困難となりて頻に喘鳴し非常に苦痛の狀を呈するものである、之を柔かき毛を備へたる筆に食鹽水を多量に浸して、輕症ならば一日三四回より重症鷄は何回となく拭ひ去り、顔面、鼻腔等は微溫湯を

以て洗滌する、而して溫暖なる場所に入れ置くときは大抵間もなく恢復するものである。

豫防法　病禽は發病を認め次第隔離し治癒するも暫時他所に飼養するのが安全である、病禽の排泄物治療に用ひたる箒等は燒捨て、或は嚴密に殺菌しなくてはならぬ。

五　白癬

白癬は傳染性の皮膚病で鷄の他家畜人類等の哺乳動物も之に罹ることがある、

症候　初肉冠肉髯等に白色、若しくは灰白色の癬痂を生じ、漸次頸脊に蔓延し、遂には全體に及ぼし毛根は犯されて羽毛爲に脫落するに至る而して病禽は漸次羸瘦して斃死するものである。

病原　はアコリオン、シエーンライニと稱する絲狀菌なり。

治療法　其儘放任するも次第に治癒することがある、治療法としては左の數種が採用されて居る。

一　癬痂に油墨の濃きものを塗る

二　時々ワゼリンを塗る
三　藥用石鹸にて屢洗滌す、
四　硫黄軟膏を患部に塗る、
五　千倍の昇汞水を以て一日二回患部を洗滌す、

豫防法　病禽は健鷄と隔離し、痂皮の脱落せるものは散亂せしめぬ様一所に取集めて燒却或は殺菌しなくてはならぬ。

六　鷄痘

症狀　人類の疱瘡に類似し肉冠、肉髯、顔面、眼瞼、脚等に小粒の瘤の如きものを生じ漸次腫大し遂に食慾退減して斃死するものである。

病原　一種の黴菌なるべし。

治療法　二千倍の昇汞水を作り一日數回患部に塗るべし。

鷄痘は成鷄には少なく、雛に多い殊に晩夏初秋の頃に孵化した雛は最も此害に罹り易い、成鷄は之に犯さるゝも容易に斃死するに至らざるも若鷄就中雛が幼き程斃死の割合が多い、本病は極めて傳染性の烈しきものにて又蚊は病毒の傳播を

なすが故に嚴密に病禽の隔離と防蚊法とを行はねばならぬ。

七　赤痢病

症狀　病禽は食慾を減じて頻に渇を訴へ、沈鬱して佇立するに至る。下痢を催し排泄物中に粘膜を血液とを混じ惡臭を放つ、病勢は速に亢進して糞便は黄褐色に變じ、遂に衰弱して斃死するものである。

病原　一種の桿狀菌の作用に基づく。

治療法

一　硼砂溶液を内服せしむ。

二　阿片丁幾五滴を適宜の水に混じて服用せしむ。

三　石炭酸水數滴を適宜の水に和して服せしむ。

病菌の排泄物は殊に注意して消毒し其他健鷄の糞、鷄舍等も消毒し病禽は直ちに隔離しなくてはならぬ

八　魯布

鷄病中最も遭遇するものゝ一で養鷄家が常に困難する所の疾病である。

症狀 稍實布的里に類し、初期にありては沈鬱して佇立し呼吸の際噴鼻し、或は扅嘴を張り、呼吸困難の狀を呈す鼻孔眼口等より惡臭ある粘液を漏出し、病勢亢進するときは頻に咳嗽を發し食慾減退して遂に斃死するものである。

病原 に就ては幾多の說あるも區々として確定して居らず、要するに一種の黴菌の作用なるべし。

治療法

一 食餌に少量の蕃椒を加へ瀉利鹽半匙を時々内服せしむ、此他一日二三回格魯兒曹達水を以て顏面冠等を洗滌す。

二 微溫湯に少量の食酢を加へ一日に二三回宛鼻孔及び眼の周邊を洗滌し、別に内服用としては硫酸銅の稀溶液を一日三回少量に與ふ。

三 コパイベーバルサム　〇、二
甘草末　一五、〇
胡椒末　四、〇

右の配合を丸劑となし一日三回に分服せしむ。

四　桂皮末　二〇、〇
千姜　六〇、〇
蕃椒　七、五
丁香　一五、〇

右各の細末を混和し飯粒にて揑り毎回半茶匙宛一回に二日服用せしむ。

二　消化器病

一、嗉嚢粘膜の加答兒

症候　食慾不振を來し嗉嚢は膨大して軟く或は多量の瓦斯を畜積することもある、時々悪臭ある液を吐出し或は悪臭ある瓦斯を噯出することもある。漸次衰弱して遂には斃死するに至る。

原因　一時に多量の食物を攝取するが爲消化不良を起して胃中に醱酵し、或は腐敗せる食餌を與へ或は腐蝕性の藥劑を投與する等によりて發す。

治療法

一　病鷄を捉へ上半身を逆に傾け靜に指を以て嗉嚢を壓するときは多量の惡臭ある液を吐出す、然る後炭酸アンモニア一、〇を適宜の水に溶解して內服せしむ、

二　サルチル酸溶液の少量を服用せしむ。

本病は雛鷄には最も多く發する所のもので治療後は軟かき粘着力少なき食餌を與へ、成るべく飲水を攝して青菜を給するのがよい。

二　嗉嚢食滯病

症狀　嗉嚢は膨脹して胸前に突出し手を以て之に觸るゝときは硬固なること恰も石の如く病鷄は頸を伸縮して屢苦悶の狀を呈す。

原因　不良消化物の多食或は硝子磁器片等の過大なるものを嚥下せる場合に發す、雛にては乾飯を稍多量に食せしむるときは多く本病を發す、何れの場合にても嗉嚢內に食餌の蓄積過度となるときは胃腑への通路を遮塞し、胃は空虛となるが爲饑を覺えて益食を貪る、然る間に嗉嚢に充滿せる食物は追々濕潤して膨大し遂に石の如き硬固物となるものなり。

治療法

一 微温湯を飲用せしめ指先にて靜かに食物を緩和すれば次第に軟くなることあり。

二 亞麻仁、油、篦麻子油或は瀉利鹽一茶匙を嚥下せしめて後靜かに硬部を手にて揉み和ぐ。

三 切開法

嗉嚢上部の軟毛を一部分拔去り鋭利なる小刀を以て五六分の長さに膨大部の皮膚を縱開す、然る後耳カキの如き物を以て靜かに内容を除去し創口は石炭酸水或は清水にて洗ひ後縫綴す、最も三四分の切開口ならば消毒して其儘放置するも可なり手術後は清水と柔かき食餌とを與ふ。

三の療法は甚だ簡單にて奏効は確實である、一二回の經驗の後には此法にて殆ど誤ることなく治療するものである、

三 下痢

症狀 稀薄なること恰も水の如き糞汁を排出し病勢亢進するときは不消化の食片を下痢す、病痢は頻に渴を訴へ體力衰耗し次第に羸瘦して遂に斃死す。

原因　食餌の激變、氣候の不順、腐敗せる食餌の給與および胃を刺戟する物質の多食等によりて誘發せらる。

治療法　寒暑濕氣等に注意し、成るべく消化し易き食餌を選み、下痢を促し易きものは嚴禁す治療劑の二三を擧ぐれば。

一　テセツトミーア氏の方劑

白亞粉末　〇、三
大黃根末　〇、三
蕃椒末　〇、二

二

阿片末　〇、〇六
吐根末　〇、〇六
右混和四、五時間毎に服用せしむ。

三　クーパー氏の方劑

精製白亞　二、〇

蕃椒末　二、〇
健智亞那末　一、〇
木炭末　一、〇

右混和し豚脂羊脂又はバタを以て捏り、丸劑となして毎日一粒宛數日間内服せしむ。

四　コロダイン五滴を三十瓦の清水に滴下して三回に分服せしむ。

四　前胃炎

症狀　病鷄は穀粒の如き硬食餌をとるを好まず、柔軟なる食餌は稍之を食するも、大抵食を嫌ひ、倦怠の狀を呈し、翼羽垂れて漸次衰弱を增す。

原因　消化不良の食餌を過食し連續して刺戟性の食を過給したる等の場合に發す、又饑餲の際水のみを與ふるときは本病に罹り易し、前胃は胃と嗉囊との中間に位するものにて、異常の食を與ふるときは多量の胃液を分泌せざるべからず、爲に遂に炎症を起すに至る。

治療法　甘汞の〇、〇六を時々内服せしむれば効あり、尚攝養法としては消化容

易にして、其胃に慣れたる食餌を給與すべし。

五　肝臟病

症狀　初期にありては徵候著しからず、病勢亢進するときは沈鬱して羽毛は光澤を失ひ冠、肉髯、顏面等は黃色を呈し、黃綠色の糞便を排出して漸次衰弱す。

原因　放飼せる鷄を俄かに狹隘なる場所に閉居せしむるときに最も多く發し易く、其他青菜貝殼の欠乏脂肪に富む食餌の連給等は本病を發す。

治療法　脂肪分の少なき淡泊なる食餌を選び、同時に青菜の類を不足なく與へ、內服藥としては甘汞の〇、七を時々投與すべし、

三　呼吸器病

一　氣管支炎

症狀　病鷄は屢咳嗽を發し、咽喉部に嘈雜音を聞き多量の粘液を分泌す、病勢亢進するときは步行擧動に力なく、呼吸窘迫し、遂に斃るゝに至る。

原因　溫度の急變、冷濕の觸冒により、或は感冒、肺炎等を併發す。

治療法 テセットミーア氏の方劑

甘汞　〇、〇六

吐酒石　〇、〇〇〇八

右混和し夜間に頓服せしめ宿舍を温暖ならしむ。

或は、

鹽酸加里　四。〇

單寧酸　四、〇

右混和して水二百瓦に溶解し氣管內に注射す。

二　肺炎

症狀　呼吸の度數繁しくなり、嘴を張り恰も胸部に疼痛を感ずるが如き狀を呈す、又時々、短咳を發し、病勢亢進するときは形容枯稿し兩眼凹陷す。

原因　寒暑の急變冷濕の胃觸、冬夜賊風の侵入、換氣の不良等は本病を發す、或は感冒氣管支炎等より變症す。

治療法　居所を温暖ならしめ、併せて滋養食餌と淸水とを給與すべし。

ゼームス氏の散劑應用

硫化安質母尼　二八、〇
沈降燐酸石灰　四八、〇

右の各を混和して細粉となし、之を〇、〇六乃至〇、一二位宛内服せしむ。

或は時々口蓋を刺して瀉血を行ひ、又肝油を煉餌に交へて與ふ。

三　感冒

症狀　人類の感冒の如く稀薄の鼻汁を漏出し、漸々稠厚となり眼瞼腫脹す、病勢亢進するときは顏の兩側腫脹し、往々魯布に變症す。

原因　氣候の激變は最も屢本病を誘發し、冬夜賊風の浸入、冷濕の冒觸、換羽時の不注意等より起る。

治療法　換器の良好なる室に移すときは、輕症ならば概ね治癒す。藥劑としては

一　ベンネット氏方劑

木炭末
新鮮の酵母　各三、〇

小麥粉　一〇

硫黄華　二、〇

右混和し水を加へて丸となし、一日三回に分服せしむ。

二　ローランド氏方劑

硫酸鐵　三〇、〇

過尼子　三〇、〇

ピメント　六〇、〇

右混和し丸劑となして朝夕に分服せしむ。

三　硝酸加里十分ノ一瓦を一回に頓服せしめ、一時間の後樟腦一瓦、健智亞那末一瓦、桂皮末一瓦とを飯粒にて煉り丸となし、二日量として一日三回に内服せしむ、

四　番木鼈丁幾三滴を約二合弱の水に滴下し、病禽をして隨意飲料せしむるも効あり、

四　瑟嗇

症狀　病菌は白色を舌に帶びたる角質乾燥の鱗片を被覆し、爲に食慾が減退して

大に渴を催すものである。

原因　鼻加答児、氣管支炎、ループ等の爲に、鼻孔は粘質物にて閉塞せられ、口腔を空氣が流通するにより起ること多し。

治療法　硬化せる鱗片の脫離せるときは之を除去すべし。ユーヤット氏の療法は麵包に牛乳を加へたるもの、或は馬鈴薯に燕麥を加へて調製したるものを與へ、又蓖麻子油一茶匙を飲用せしめて後沒藥丁幾に水を加へ、之に硼砂を溶解し軟毛の筆の類にて舌上を洗滌するにある、之の療法にて大抵治癒するものである。

四　生殖器病

一　卵秘症

症狀　臀部を垂れて頻りに產卵の狀を示し、時としては鳴噪して苦悶するものもある。重症にありては產卵し得ず、或は卵子脫出後一二日を經過して終に斃死するものもある。

原因　重蛋黃の如き大なる卵子を生じたる場合、或は運動不足の雌鷄に、脂肪に

啗む食餌を給與し、爲に鷄體に脂肪蓄積して卵巢を繞圍し、其の機能を妨害する等に依る。

治療法 鷄鵞等の羽毛を取り、尖端に少許の毛を殘して他部を裸とし、之にグリスリン或はオリーブ油等を浸し、病鷄を捉へて靜に卵道に入れ卵に達せしむ、之を一回して暫らく模樣を視、尚功を奏せざるときは再三反覆すべし大抵は產出するに至る、猶ほ前記の藥劑に代ふるに醬油を用ゆるも可なり。併しながら此の如き雌鷄の產卵を助けんとして強て臀部を壓する等のことをなしてはならぬ、此が爲往々卵を腹中に破り、鷄を死に至らしむることがある。

二 軟卵性

症狀 卵殼の軟き卵を產出するのである、之も又卵秘症の如く難產である、而して時々不意に脫出するものにて、鷄舍内或は運動場等に漏らすことがある。

原因 軟卵症の原因は種々ある、輸卵管の炎症により、或は炭酸石灰質の供給不足等によりて起り、或は雌鷄をみだりに驅逐し騷擾させた場合にも此事がある

治療法 テセットミアー氏方劑

甘汞　〇、〇六
吐酒石　〇、〇〇五

右一回量とし麥粉に混合して服用せしむ。奏效確實ならざるときは兩三日連用するも差支なし。

或は蓖麻子油一茶匙及び微温湯を給するも有効である。

飼鷄が軟卵を產したるときはよく其の原因を考へ、驅逐騷擾によるときは之を廢し、石灰質不足に歸すべきときは牡蠣殼白堊等を不足なく與へなくてはならぬ、

三　瀦卵症

症狀　後腹部膨大して垂下し、鷄は頻に苦悶の狀を呈す、卵子は腹腔內に落ち行き茲に瀦溜するが故に、周圍の諸臟器を壓迫して機能を妨げ、遂に死に至らしむ。

原因　瀦卵症の原因は卵秘症と同じものあり、或は外部の暴力の爲に子宮壁と子宮間等に破裂部を生じ、爲めに本症に陷ることもある。

治療法　奏効の確實なる治療法は殆どなく、大抵は斃死を免れぬものである、故に豫防として常に產卵鷄に脂肪を蓄積させぬ事をはからなくてはならぬ、名古屋

コーチンバフコーチン、プラマ等の雌鷄には屢見る所である。

(四) 卵巣水腫病

症状　體量は重くなり腹部肥大して其狀肥滿鷄の如くに見ゆ、併しながら鷄を捉へて仔細に檢するときは、胸肉瘦せ脂肪腺も又細く、脂肪に乏しきことが分る、而して後腹部は恰も護謨球の如く彈力を持つて居る。

治療法　季肋骨の後部一寸許を切開して、腹腔内にある水嚢の水を出し創口は消毒して縫綴するときは治癒す。

五　運動器病

一　脚痿症

本病に犯されたるものは脚動搖して歩行に力なく久しく起立し難きものあり、甚だしきに至りては伏臥して食を攝るもある、コーチン、プラマ等體量の重きものに多く發す。

原因　脚の筋肉未だ充分發育せざる中に體重速に增加し、自然自已の體を支持

することが出來なくなり、又は石灰質の不足の爲に此症に陥るものもある。

治療法

一　林檎酸鐵の〇、二乃至〇、五瓦を内服せしめ、同時に小麥大麥昆蟲等の滋養食餌を與ふ。

二　硫酸鐵　〇、〇六
ストリキニーネ　〇、〇〇一
燐酸石灰　〇、二
硫酸キニーネ　〇、〇三五
右丸劑となし一日三回に分服せしむ。

二　僂麻質私

症狀　歩行自由を缺き、關節硬直して歩履強硬となる。

原因　寒暑の急變、冷濕の冒觸或は雛仔を早朝草地に放ちて、露霜等に觸れしむるときは本病を誘發し易し。

治療法　乾燥温暖の場所に移し、脚を温湯にて浸すもよし。或は毛布の片にて纒

剝するも有効である。

三　骨折傷

原因　自身の過失により、或は人鳥獸等に迫害せられたる等の場合に、主として羽翼及び脚の骨を折る。

療法　テセットミーア氏の骨折療法

鷄卵の蛋白を攪拌して肉叉にて厚紙の類に展塗し、病禽を捉へて患部を靜に引展して折骨面を相觸接せしめ、右の紙面を以て患部を纏絡して後、糸を以て緊しく結着し、別に細小なる副木を當てゝ更に糸を以て之を結絡す、翌日に至れば副木を除去するもよし、右は脚の折傷に應用する法なれども、羽翼の場合には繃帶の後、患翼の羽毛を疊みて結束し、靜なる場所に置き飛翔の念を起さゞらしむ。

四　痛風

症狀　脚趾に痙衝を起して趾底腫脹し劇痛を催し、遂には歩行し難きに至るものである鴨鷄其他肉用鷄の雛に多く見る所である。

原因　脚痿症より變じ、其他脚趾に熱を發することにより起る。

治療法

一 新鮮なる肉脂を毎日一回患部に塗抹す(リユーウキス氏療法)

二 甘汞 〇、〇六
　葯刺巴 〇、六
右混和して夜間に服用せしむ、

三 格兒失屈謨酒を三滴宛毎日二回服用せしめ體を温包す。

四 脚趾の腫脹部にオリーブ油を塗り、化膿せるときは小刀を以て切開す。

五 趾瘤病

症状 趾の裏面に小なる腫物を生じ、漸次凸起して瘤の如きものとなり、炎症を發して遂に潰瘍するに至る、病禽は最初跛行し、遂に歩行し難くなり、貧血して斃るるに至る。

原因 夜間桶の縁或は角稜を有する棲架に寢ね、又は尖りたる石礫の上を飛廻りなどしたる爲に發す、

治療法

一　鋭利なる小刀を以て腫脹を切開し、内部を石炭酸水にて洗滌し、後硝酸銀を塗り置く。

二　柔かき床の上に移し患部には沃度丁幾を塗り置く。

本病は棲架及び運動場の地面に注意するときは豫防することが出來る。

六　捲趾病

症状　病禽は各趾捲縮して趾端の知覺遲鈍となり、爲に體を支へ難くなるものである。多く雛鷄に見る所である。

原因　雛の孵化後間もなく本病に犯されて居るものがある、或は冷温の冒觸煉瓦タヽキ等の硬固なる床上に運動させた場合、或は氷りたる地上等に放つことが屢々本病の原因となる。

治療　温暖にして柔かき床の上に移し、脚趾は微温湯を以て温め、或はテレヒン油を浸したる布片にて患部を纏絡すること、食鹽湯にて温包すること等も有效である。

六　神經病

一　腦卒中

症狀　健全無病の鷄が遊歩中俄然倒伏して知覺を失ふに至る、肉用種の肥滿せる雌鷄には屢見る所である。

原因　腦中の血管破裂して出血し腦髓を壓迫するに依る。遺傳により發し、又營養過度、狹隘なる場所に飼養することが屢本病の基となる、

治療法　本病は經過急速にして治療の遑が無い位である、併しながら卒倒せるときは一時知覺を失したるときにて、多くは未だ死に至らざるが故に、之を發見するときは直に頭部を冷水にて冷やし、鋭利なる小刀を以て羽翼下の大靜脈を縱に切開して充分出血せしむ、創口は後に皓礬水を以て洗ふ可し、其他薄荷蕃椒等の小量を給するも又効あり

二　眩暈

症狀　本病に罹りたる鷄は旋轉回走し、或は飛翔せんとして能はざるの狀を呈

す、又は運步意の如くならずして倒れ、頻に双脚を震動さすることもある、激烈なるものに至りては昏瞑して斃れ、時としては夜間棲架より墜落して死することもある。

原因　腦卒中と同じく血液が頭部に鬱積する爲に來る、概ね營養佳良なる多血性の雌鷄に多し。

治療法　腦卒中と同じ手術を行ひ、其他、

甘汞　〇、二

葯刺巴　〇、六

右丸劑となして內服せしめ頭部には冷却法を行ふ。

三　痲痺

症狀　運動神經の機能損亡する爲に、全く筋力廢絕して步行し能はざるに至る、鷄體は甚だしく衰弱するものなり。

原因　劇性の食物を多食せしめたるにより、又は脊髓の疾患により誘はるゝことあり。

治療法　療法困難のものなるにより、成るべく屠殺して食用に供するがよい、輕症には左の藥餌を用う。

亞爾尼加丁幾
酒精

右を混合して稀釋し、患部に塗り同時に蕃椒丁幾を內服せしむ。

七　寄生蟲

一　條蟲

條虫に寄生されたる鷄は多くは精神不活潑となり、或は下痢を催し或は衰弱して產卵を休止する等の徵候を呈するものであるが、時としては別段病狀を呈しない事もある、鷄に寄生する條蟲は其種類數多ありて、一樣の有害作用を及ぼすものではない、

治療法としては食餌に少量の硫黃を混和し、或は蓖麻子油の少量を飮ましめ、又は新鮮の檳榔子末三瓦を、牛酪と和して丸劑となし與うるも有効である。

二　疥癬病

症狀　鷄冠或は脚部を犯さるること多く、爲に冠は白色の斑點を生じ、次第に之が腫脹して、之を掻くときは痂屑を脱し惡臭を放つ、病鷄は爲に痒痛を感じ附着物を掃ひ落さんとの狀をなす。

原因　サルコプテスムータンスと稱する一種の寄生蟲の作用に基づく本病に罹れる雌鷄をして雛を育てし、むるときは傳播するものである。

一　温湯に藥石鹼を溶解し此中に病禽の患部を入れ、刷子を以て充分摩擦す。

二　患部を水洗したる後水銀軟膏を塗抹す。

三　患部を温湯にて洗滌したる後、昇汞一分をアルコール二十分に溶解して之を患部に塗る。

四

硫黄華	二分
炭酸加里	二分
豚脂	八分

右混和して軟膏となし、患部に塗るも効あり。

三 張嘴病

症狀 本病に犯されたる鷄は屢嘴を張り何物をか嘔吐せんとするの狀を呈する、病勢亢進するときは元氣衰へ食思缺乏し鬱悶して遂に斃死す。

原因 スクレロストマ、ジンカムスと稱する一種の寄生動物の作用に基づく、此小蟲は淡赤色にして鷄の咽喉に群生し、漸次氣管內に侵入す、家禽の他山野に棲息する鳥類の氣管內にも寄生して居る。

治療法 此病に罹りたる鷄は十中八九は斃死を免れ難く、藥劑を投與するも未だ奏効を見ざる中に、早く既に、死するものである、今二三の治療法を云はんに、

一 家鴨又は鵞の小羽を抜取り、尖端の羽毛約五分程を殘して他の部を裸とし、之を的列並油或は石腦油中に浸し、靜かに病鷄の口を開かしめ、舌根に於て認め得る氣管口に之を插入し、一二回廻轉して靜に引出す、然るときは小蟲は羽毛に附着して出で、又其部分に存在するものも大抵死滅し、鷄の咳嗽と共に喀出せらるゝ、然しながら此法は大に熟練を要し、未熟者は却つて爲に病禽の死を早めることがある。

二　純石炭酸の少許を金屬製の皿に盛り、之を燈火の上に保つときは、忽ち濃密の白烟を生ず、此白烟中に病鷄の首を差出さしめ、暫らく吸入せしむるときは病蟲は死滅す、併しながら此法も又度を誤るときは却て鷄を斃すものである。

三　烟草を燻蒸して二の法を施す。

四　樟腦或は的列並油の少量を内服せしむ。

五　コッホルト氏の氣管切開術

氣管を切開して病蟲を排除するなり、先づ小布片を持ち來りて之に哥囉吩を浸し、之を病鷄の鼻孔に近づくるときは、鷄は麻酔して知覺を失ふに至る、茲に於て頸部の皮膚を拆解し、次に約四分の一インチ氣管の上部を割開す、而してピンセットを以て殘らず病蟲を摘出して後創口を縫綴す、但し手術中氣管内に血液の入らざる樣注意肝要なり。

四　羽虱

症狀　羽虱に寄生せられたる鷄は、頻に爪及び嘴を以て脊翼部等を掻き、羽毛を竪立して如何にも苦悶の狀を呈するものである、甚だしきに至りては肉冠は委縮

して血色を失ひ、雌鷄は産卵を休止して漸次に衰弱を加へる。

原因　極めて小なる虱にして、一見して之を認むるに難い位である、併しながら羽毛を拔取つて日光に透視するときは、多數の蝨及び卵を發見することが出來る、宿舍に鷄糞の堆積すること、運動場を不潔にすること等が發生の基である。

驅除法　夜間鷄の棲架にあるとき、除蟲菊の粉少許を各鷄の脊上に散布するときは、全體の羽虱は大抵死滅するものである、若し一回にて効を奏せざるときは再三反覆する。或は霧吹器にて石油を羽毛の内部に吹きかけるも有効である豫防として時々除蟲菊の粉を鷄體に散布することは必要である。

五　ワクモ

夏期に於ては最も寄生し易き害蟲の一種で、多數の鷄を取扱ふ場合には爲に尠なからざる困難を來すものである、ワクモは繁殖極めて速かにして、鷄舍の壁と云はず棲架と云はず、柱巣箱に至るまで糠を撒きたるが如く蔓延することがある、而して盛に鷄の鮮血を吸收し、蝨は爲に芥子粒位の大に肥大し、赤黑き色を帶びたる樣一見戰慄を覺ゆるばかりである、鷄體は衰弱甚だしく、諸種の疾病を引起すに至

る。

一旦ワクモの發生せし時は、鷄群は直ちに他の場所に移し、鷄體は羽虱と同じ方法にて充分殺蟲し、然る後殘らず鷄舍のワクモを驅除しなくてはならぬ、其法は先づ硫黄華約百二十匁を鐵鍋中に入れ、拳大の鐵塊を赤熱して此中に投ず、而して舍の戸を閉すときは、舍内に滿ちたる烟はあらゆる間隙に入り、玆に潜伏する害蟲まで驅除せらるゝ、之法はリユーウキス氏の燻烟法と云ふので、失費少なく然かも非常に有効である、石炭酸水、石灰乳、煙草莖の煎汁等何れにてもよし、之を以て鷄舍内を殘る隈なく洗滌し、巣箱の藁棲架に附着せる繩の類は凡て取出して燒却しなくてはならぬ。

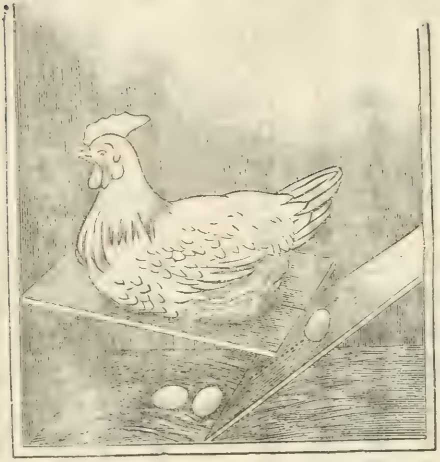
悪癖の矯正

一　食卵癖

雌鷄に往々見る所のもので、一旦該の悪癖を生ずるときは、自己の產出せるものを直ちに嘴を以て破壞して食し、或は其他巣中にあるものを欲するが儘に啜り去

なものである、この原因は誤て產卵を破りたる場合に偶然內容を食して味を覺へ、或は卵殼を單獨に投與せし等の爲に斯の如き癖を生ずるに至るのである、故に成鷄には卵殼および卵の內容物等を食せしめぬ樣常に注意することが肝要である。而して鷄群中一羽の斯の如き雌を生ずるときは、多くの雌に此癖を生ずる機會と摸範とを生ずるものなれば、癖鷄は隔離するがよい。

第四十三圖



矯正法としては、鷄卵の內容を出して蕃椒末の如き刺戟性物質を詰め、巢中に置くときは、之を破りたる爲に懲りて遂には忘るるに至るものである、或は硝子製の模造卵を澤山巢箱中に入れ置くときは之を破壞せんとするも其堅固なるに困じ、次第に喰卵の念を去らるゝものである。

右の二法は何れも簡單な方法で直ちに實行し得る所であるが、之等の操作にて尙

完全に矯正し難きときは、稍手數を費やして特別の産卵箱を作らなくてはならぬ。其の構造は圖示せるが如く、産卵箱の中に板を稍傾けて張り中央に穴を穿ちて模造卵を固着せしむ、別に反對の側より一層急傾斜に板を張り、兩板の間隙は卵の落下し得る位とする、底には柔かき藁を布く、斯くするときは産卵は直ちに轉轆して底に入る。

如斯裝置は已むを得ざる場合に限り用ゆるので、普通の産卵鷄であつたならば、寧ろ屠殺用とする方がよいのである、又新に産卵鷄を買入れたる場合に、食卵癖の鷄なるやを知らんとせば、群鷄を運動場に放ち一隅に鷄卵を置くときは、進んで之を破壞せんとするものは即癖鷄であると云ふことが分る。

二　食羽癖

種々の原因によりて此癖を生ずる、他鷄の羽毛に食餌の附着せるとき、羽毛と共に啄食することにより、狹隘なる柵内に閉飼せるとき、殊に羽毛の水濕せるとき、其他青菜石灰質の供給不足等も此癖を生ずるに至るものである。

矯正法としては、廣き運動場に放ち、青菜穀粒等を充分に給するのであるが、然し

ながら、斯の如き悪癖を有する鶏は、早速肉用として賣却する方がよい。

追補

一　吐綬鷄飼養法

唐國鳥、白露鷄或は七面鳥などと稱へ、其の原産地は北亞米利加であると云ひ、又南亞米利加であるといふ説もある、併し現今尙ミスシッピー、オハイヲ地方の森林中に野生の吐綬鷄が棲息して居ると云ふ事實から推すと前説が確である樣に思はれる、西暦千五百三十年頃に始めて歐羅巴に輸入せられ我國へは今より凡そ七十年程前天保年間に和蘭船に依つて渡來したと傳へられて居る、此鷄の珍とすべきは頭部に肉冠羽毛等を有せず一種の自由に伸縮する皮肉ありて伸ぶるときは嘴以下に長く垂下し縮むときは前頭部に小塊をなし而して此の皮肉が時々白、紫藍、青、丹青、紅等に其の色を變ずることである、之れ卽ち七面鳥の名ある所以である而して雄は二三年の後胸部に綬毛を生ずるものである。

七面鳥の肉は家禽中最美味なるものとして夙に歐米人に嗜好せられ、クリスマス其他鄭重なる饗宴には必ず吐綬鷄の肉を用ひなければならぬといふ位である

我國でも近年漸く其の需用を增加し來り從つて其の市價は鷄よりも遙に高價である、我國にては以前橫濱神戶等外國人居留地附近の農家が外人を見込に飼養する外、愛玩鷄として稀に各所の愛鷄家によつて養はれた位のものであつたが、近時は需肉用とし追々飼養の數を增し特に東京近在千葉縣地方にては稍盛に飼養するに至つた。

孵化及飼育法　種禽は體質强健にして體格の完備せるものを選ぶのは勿論であるが、一般の鷄と異りて特に注意すべきは、なるべく血族交配を避け、且三歲以上の年齡を有しなくてはならぬことである、吐綬鷄は極めて交尾が拙劣なものであるが、其の代り一回交尾するときは大抵十五六日は有精卵を產出するものである。

吐綬鷄の雌は性質甚だ魯鈍なる故に雛を託することは不利益であるが、一名天然の孵卵器ともいはるゝ位に長時日の伏巢に堪へ得るものであるから單に孵化鷄として用ふるには便利である、孵化したる雛は順次に取去つて他の母鷄又は假母器によりて育て伏鷄には更に種卵を入れて續座せしむることが出來る、である

から鵞卵の孵化には最も都合がよい、普通大の雌吐綬鷄は吐綬鷄、鵞、等の種卵なら

ば大抵二十箇內外、鷄ならば二十六七箇位を抱卵し得るものである。

孵化の日數は凡そ二十七八日を要する吐綬鷄の雛は從來最も育て難いものであると云はれて居るが、少しく經驗を積み手數さへ怠らなかつたならば雛は左程斃れるものではない、人によると吐綬鷄の雛は近眼であるとの說をなすものもあるが、こは元來性質が愚鈍である爲に啄食の能力が乏しいのであつて事實眼が近視であるとは信じられないのであるから、他の鷄の雛の樣に餌と水とを雛箱の一隅に備へて放擲して置くと飢渴の爲に斃死するものが一群の中には必ず若干出來るものである、之を防ぐには煉餌を製して細長く固め一々雛を捉へて適宜に口中に押入れてやる、之の手數を數日間續けて行ふと漸次に餌を求める樣になる、或は圓大の鷄雛の群に入れ粒餌を脚下に散布して置くと自然に伴はれて啄み初むるものであるが得て鷄の雛に壓せられ勝ちなものであるから前法の安全に若くはない、且つ鷄の雛よりも一層青菜と動物質とを要求する故に煉餌の中には此等の多量を加へることが有効である、青菜の中では葱、蒜の如き臭の強きものを特に嗜好するものである、但し煉餌の中に青菜の量を增すときは下痢を發し易いもので

あるから此の場合には可成煉餌を固くし又少量の石灰末を混入するとよい。

吐綬鷄の雛は一般の鷄の雛に比して遙に冷氣と濕氣の抵抗力に弱いものであるから、此點に就ては充分の手當を要する、簡便なる吐綬鷄の假母器としては著者は常に以下に述ぶる如き裝置を作つて使用してをる、卽ち先づ適宜の大きさの淺き箱又は桶の類に底に古蓆を敷き大いなる布呂敷の類にて被ふ、次に小なる火鉢に炭團をいけて之を布の上より底の中央に置く、而して布を充分に緊張して桶の上緣にとめて置く、而して此中に雛を入れて置くと寒くなれば雛は任意に布の外側から火鉢に寄り添つて暖を取り暖かくなると周圍を運動して廻る、桶の下部に小なる穴をあけて置くと上部は布であるから空氣の流通は穩に行はれる、此の裝置は極めて簡單であるが雨天及寒冷の候に用ひるに頗る適して居る。

吐綬鷄の雛は斯くの如く特別の注意を要するものであるが稍成長して頭部に紅色を呈する時期に達すると最早安全なものである。然しながら羽虱と蚊の豫防は怠つてはならぬ、而して充分に成長したるものは一般鷄以上に頑健なものである。

吐綬鷄は廣き草原に放飼することが最も有利であるが性質遲鈍である爲め宿舍に歸ることを忘れて遠く遊び又外敵の爲に容易に害せられるものであるから鷄の如く放任して置くと失ひ易い。柵飼にするときは同じ羽數に就て鷄よりも三倍大の面積を與ふることが適當である。

吐綬鷄は肉用として賣買するには雌よりも雄の方が高價である、此の事は他の家禽とは正反對であつて飼養家には非常に都合がよい、何となれば雄雛は雌雛よりも遙に丈夫であつて又體量も速に增すからである、孵化後七八ヶ月を經過したならば肥滿法を施して市場に賣り出すのである、肥滿法の要領は鷄と同樣であるが一層脂肪質の食餌を給與することが必要である、此肉は十二月のクリスマス又は新年に際して就中高價であるから飼養家は恰も此の期節に市場に出すことの出來る樣に孵化育雛することが又肝要である。

吐綬鷄には野生の外青銅色、白色、カムブライジ、毛冠等の變種がある、今左に之等の各種に就て其の概要を記載することとする。

野生吐綬鷄　體の羽毛は青銅色にして、金屬光澤を放ち覆翼羽は一層濃色にし

て紫色に輝く、背の後部及覆尾羽は濃き褐色の地に綠色又は黑色の條を有し、尾羽には細かき星を有する波紋がある、而して羽毛は長方形にして體に密着して居る。此種の雄は體量三貫目内外を普通とし外觀壯麗を極めて居る、成長割合に早く肉味は頗る佳良である。

雌は孵化後凡そ二年にして產卵をはじめ三四月の候と八九月の候との二期に凡そ十五六箇宛を產むものである。

靑銅色吐綬雞　外觀は野生種と大同小異であるが一層强健豐肉の體質を有し且生育が早い爲に實用上最廣く飼養せられて居るのは大抵此種である體量は稍野生種に劣るも產卵數は遙に多く、時としては一ヶ年百箇位を產し卵量は二十五六匁位が普通である。

白色吐綬雞　純白色の羽毛を有し外觀極めて艶麗である此種は佛蘭西に多く養はれ、羽毛は裝飾用に用ひらる然れども體質薄弱なる爲に實用的の飼養には不適である。

カムブライジ吐綬雞　銅色に灰白色の斑紋ある羽毛を有し割合に脚長く、體姿

端麗である、此種は豊肉にして生長早きが故に實用上の飼養に適する。

毛冠吐綬鷄　此種は普通吐綬鷄の變種で毛冠を頂き其他の形貌は普通種に類似のものである

二　養鷺法

鷺は又家鴨とも書き野生の鴨を馴養したもので古くより世界到る處に飼養せられたものである、就中飼養の最も盛であるのは支那殊に南部及中部地方で之に亞いでは臺灣である、之れ該地方は河川沼澤に富みて水禽の飼養に天與の利があると云ふことが其の主因でなくてはならぬ、試に支那大陸を旅行して見ると北部は山嶽丘陵に富み南部は到る處江村水里であることを知るであらう、所謂南船北馬である蒙古が羊の牧場であり楊子江畔に水禽の蕃殖が盛であるのも夫々理由が存するわけである。

我國に於ては中古肉食を禁じたる爲に需肉用家禽たる鷺は極めて稀に飼養せらるゝに過ぎなかつたが近年に至りて家禽飼養の有利なるを認めらるゝと共に大阪に於て先づ其の端を開き其他全國到る處の都鄙に追々其の飼育が盛になつて來る傾を有して居る。

鷺の飼養に就て第一に注意すべき事は場所の選定にある、卽ち水の利が無くて

はならぬ、たとへ周圍の經濟的事情に好都合であつても我國の現今の有様では全部陸上で飼養しなくてはならぬ樣な場所では到底滿足の利益は得難いものである、其の代り廣き水邊で養つたならば殆ど全く飼料を與へなくとも成長するものであるから莫大の利益を得らるゝものである、鷄は廣き山林又は園圃に放飼するにしても一定の場所にては食餌となる可き物質は漸次に減じて行く理である、然るに市中を貫流する河の下流等を利用して鷺を養つたならば食餌は年中上流から下る爲に格別投與する必要のないことがある、又海に連りたる河沼にては潮の滿干によりて水の深淺が異る故に從つて餌を求むる場所も多くなる理である、斯様な場所を見付けたならば宜しく鷺を飼養して自然の遺利を拾ふ可きである、此等の點に於て鷺の飼養は鷄と大に其の趣を異にして居るところがある、我國は又到る處水田が多い挿秧の始め若干日を除いては年中之に鷺を放つことが出來る、然も其の糞は直ちに稻の肥料となつて利用せられ一擧兩得である。

元來鷺は體質が鷄よりも遙に壯健なものであるから鷄の様に病氣に罹る虞がない、之の故に多數を飼養するのに鷄よりも安全である、又其の雛は頑健にして極

第四十五圖

支那人の養鶩

めて成長の速なものであるから鶏の如く、長く母鶏に託し或は假母器を用ふるの手數がない、嚴寒の季節を除いては孵卵器又は續産法によりて孵化した雛は殆ど何等の加温裝置をも施さずして雛舍に放つことが出來る、支那人の養鶩法を見ると頗る簡單に然も却々巧にやつて居るものがある、今簡單に其の模様を述べると、彼等は先づ本篇人工孵化の章に述べた方法によりて雛を作る、而して暫く陸上で飼育し少しく成長すると附近の湖沼に追ひ遣つてしまふ、こゝで自由に水藻魚介の類を捕食せしめる、番人は一艘の舟を用意して之に乘り長き竹を携へて鶩群を追ひ一ケ所に餌が無くな

ると其次に移り追々に場所を變じ水草を尋ね宿りを重ねて何處までも出かけて行く、斯の如くして二三ヶ月を經過し鶩が最早相應に肥大して屠殺用として賣り出すことが出來る樣になると水邊の市場に運び行きて賣却し舟を引いて家に歸りて更に此の事を繰り返す、斯の如く年中舟を家として養鶩に從事して居るものであるが其の方法の簡單にして然も巧妙なることは驚くの外はない。

孵化及育雛　種卵の選定は鷄卵の場合と略同じであるが鶩は早晨に産卵するものであるから嚴寒の候には得て卵が凍死する故に、宿舍を溫暖に保ち尚充分に敷藁を與へて此の上に産卵せしめ、而して未明に卵を拾集する樣にしなくてはならぬ、孵化の日數は二十七八日を要するものであるから檢卵は鷄の場合より少しく遲く卽ち抱卵後六七日目にならぬと充分判らぬものである、鶩の雌は概して盐巣性のないものであるから孵化は母鷄又は孵卵器を用ひなくてはならぬ、母鷄を用ひた場合には鷄卵と同じく母鷄の大小によりて卵數を定めなくてはならぬが鶩卵は大抵二十匁以上のものであるから四五百匁の母鷄では先づ十個以下である、抱卵中の取扱は鷄卵と全く同じで宜しい孵化したる雛は羽毛の乾燥するを待

ちて靜に孵卵器より取去り假母器又は温暖なる箱に入れ一晝夜間其の儘に放置して一意安眠させたる後飼附けに着手するのである此の假母器は養鷄に用ゆる如き完全なものならば勿論申分ないが鶩雛は鶏雛ほど温暖を要するものでないから別に火力を用ひずとも稍暖きものであるならば何でも構はぬ、大阪邊では藁で造つた畚が多く用ひられて居る、此物は軟く打ちたる藁を編むで直徑一尺五六寸深さ七八寸縁の厚さ一寸五分位の圓き櫃形のものを造り之に深さ三寸内外の同樣の蓋を備へ蓋の中央には徑五六寸の孔をあけて之に金網を張つたもので冬、飯の冷を防ぐ爲飯櫃を入るゝ「フゴ」又は養蠶に用ふる藁座なるものと構造は略同じものである。

上記の畚を用ゆるには先づ戸外の日當りよき場所に吊して充分に之を乾燥せしめたる後中に軟き藁を敷きて之に孵化したる雛を入れ一晝夜間安眠せしめる、畚中の温度は別に寒暖計を用ひなくとも雛の暴動によりて適宜に斟酌する、即ち雛が互に押合つて眠るのは寒い爲であるから一器の雛の數を増し畚の外側を毛布の類にて纏被すると内部の温度は高まる、又雛が餘りに散伏するのは加温の爲

であるから此の場合には成る可く雛の數を減じ畚を半被ひ又は全部取去る等の處置によりて適度の溫度を保たすることが出來る、此の如くにして孵化後一週間乃至十日間位は每夜此中に眠らせ、又晝間雛舍に出したるときも少しく過冷の徵候を認めたならば直に捕へて畚中に入れ溫度を與へてやる樣にするのである。

さて孵化後二三十時間を經過して鶩雛が稍活潑に運動し初める樣になつたならば、畚又は假母器より取出して夏ならば樹蔭の清涼なる場所、冬ならば充分暖き場所に籠に伏せて餌附けに取かゝらねばならぬ鶩雛には最早母鷄の必要がないから鷄雛に用ひる如き丁寧なる伏籠でなく天井の無いものでも宜しい又籠でなくとも、幅六七寸の板で框を造つて用ひたならば却て得用である。

最初の食餌としては粉米を用ふるのが宜しい、之を平たき陶器又は木造の餌器に入れ數倍の水を注加して與へるのである。其他に青菜を細刻して矢張り水の中に入れて與へる凡て鶩雛は陸上の食餌を啄ばむは甚だ拙なものであるから投下する場合には水中に與へるか又は水分の多き煉餌として給與するがよい。

鶩雛は鷄雛よりも餌器を不潔にするものであるから特に此點に注意しなくて

はならぬ、此の目的には既に說明したる鷄の煉餌器を用ふるか又は淺き水鉢の類に丸竹にて造りたる格子狀の框を被ふて用ふるときは格子の間から嘴を差入れて食し體が鉢の中に入ることが出來ぬ故に淸潔に保つことが出來る。

鶩雛は極めて貪食性のものである、然も彼等の消化器は鷄雛よりも遙に頑健であるから容易に食傷する樣なことはない、滿腹すると靜に眠り飢餓を覺えると矢釜しく鳴き立てるものであるから絕えず餌を與へて置くよりも其の模樣を見て時々に分給する方が宜しい、肉食は最も彼等の成長を速めるものであるから鰌、田螺、其他の動物質は成る可く多量に與へる方がよい、此等の魚類は一旦煮た物を給與するのは最良であるが生の儘投與したりとて滅多に害のあるものではない。

鶩雛は飲水を多く要するものであるから之は絕へず備へて置かなくてはならぬ、而して雛は無頓着に之の中に飛込んで水を不潔ならしめるのみならず羽毛を濕らして凍死し易いものであるから時々取換へて少量を與へ置くか又は餌器と同じ樣に體の這入ることの出來ぬ裝置にして置くのが必要である、鶩は水禽なるが故に水濕に耐ゆる力は强よさうなものであるが事實は正に反對で雛の間は矢

張り鷄雛と同じく勉めて濕氣を避けなくてはならぬ、殊に雛の軟毛は一旦水に浸すと容易に乾燥しきらぬものである。

鶩雛は時として煉餌又は泥土の類にて鼻孔を塞がれることがある、濕氣に犯され或は性來虚弱な雛も鼻孔に粘汁を出すものであるから凡て此等は清潔なる布片を捻りて時々清水にて洗滌することが必要である。

以上の注意を以て鶩雛を育てたならば鷄雛と異り實に面白い位に早く勢力がつくものである而して冬期ならば一二週間夏期ならば四五日の後水畔に伴ふて所謂

鶩の水飼法 を始めるのである、尤も雛を陸上に飼養する期間は一週間よりも二週間、二週間よりも三週間と云ふ具合に永ければ永い程夫れ丈け安全に育つのは勿論であるが斯くては餌料を要することが多い故に出來る丈け早く水に入れて水藻其他の小動物を捕食さするが經濟的である、但し其の爲には以下の如き注意を要する。

先づ最初は天氣晴朗にして溫暖なる日を選び雛群を徐々に水畔に追ひ行くと

きは鶩雛は暫し汀を徘徊したる後やがて嘴にて岸に餌を漁り次第々々に脚を水中に入れ遂には岸を離れて泳ぎ出るものである、此の際故らに水中に追ひ入れ又は無理に捉へて投げ込む樣な干渉をしてはならぬ、斯くて初日は午前午後に一時間位宛二回游泳さする、第二日は時間と回數を少し宛長くし五六日目よりは朝遲く出して晩早く入れる樣にして終日水中にあらしめても差支ない、尤も夏と冬とでは餘程加減を要することは勿論である、水畔は充分緩勾配にし鶩雛が諸方から容易に上陸し得る樣にして置かなくてはならぬ。

水田はもとより河海湖沼等苟も水のある所ならば鶩を飼養し得るわけであるが、水の淺い水藻魚介の澤山ある所に若くはない、岸深の池などでは食物に乏しき爲鶩は時々上陸して餌を要求するものである、農家の副業としては水田に放鶩することが最も有利であるが之には梅雨後に孵化する樣にすると雛を水中に放つ頃には稻は若干成長して鶩雛の爲に踏み荒される患もなく、秋末需肉の盛なる時分には市場に賣り出すことが出來て便利である、夏期は水田に田螺、魚介、蛙其他の小動物多き故に僅かの羽數を放飼した場合には別段食餌を給しなくともよいも

のであるが羽數が澤山になつた場合又は寒冷の候餌料が不足する場合には毎晩宿舍に入る前に一回適宜の煉餌を給しなくてはならぬ、若又專門的に大多數を飼養せんとするならば既述した支那人の方法に倣ひ番人を附して順次水草を追ひつゝ監理しなくてはならぬ然し我國に於ては斯の如き大仕掛の放鶩に適する地方は餘り澤山無い樣に思はれる。

鶩の宿舍　は鷄舍とは大分其の模樣を異にして、簡單で宜しい、床はセメント又はタタキとなし之には古藁莚の類を布きて眠らせ敷物は每朝取出し、糞を落して乾かし、何回も用ゆる、舍の構造は鷄舍の要領により防寒、避暑、換氣、外敵、の豫防に注意したならば外觀體裁は如何樣でもよいわけである、只鶩の糞は水分多き爲床に粘着するものであるから時々清潔に水洗することの出來る樣に床を少しく斜面とし一ケ所排水の穴を穿ちて置くことが便利である。

成鶩の餌料に就ての要領は鷄と同じ事であるが遙に多量を要する故に一層安價なる物料を選まなくてはならぬ。

水に遠き地方にても絕體に鶩を飼養することが不可能であるとは云へぬ、卽ち

安價なる飼料に潤澤であるならば陸上に養つても利益が得られる、或は必要上暫くの期間游泳を禁じて陸上に移すことがある。之を

鶩の陸飼法　と稱し水飼法と併せて心得て置かねばならぬ、陸飼法にては食餌は全部給與しなくてはならぬ故出來る丈け安價なる材料を用ひて水分の多き煉餌を調製して給與しなくてはならぬ、鶩は鷄よりも遙かに粗食に堪ゆるものであるが溫暖なる食餌を嫌ふものであるから充分冷却したる後に與ふるが宜しい、餌器飮水器に就ては既に詳述してあるから玆には省略する。

養鶩場　は床をタタキとなし古桶又は古樽の類を埋めて水を湛へ彼等が沐浴に備へる、柵は鷄舍の如き高きものを要しない、一尺五寸乃至二尺位の高さに板塀又は竹垣を造れば之を飛び越して外に出る虞はないものであるから、區劃は鷄舍に準じ一坪に對する羽數は成鶩ならば八九羽孵化當時の雛鶩ならば三十羽乃至四十羽位が適當である。

水飼法にても陸飼法にても孵化後六十日位を經過すると良種を適當に養つたならば大抵四百匁以上の體量に達するものである、此の以後は體量の增し方が比

較的遲きものであるから肉用とする目的であるならば此の時分に肥盈法を施して賣却するのが宜しい、其の方法は第十四章に記述してある要領で宜しいが鷄よりも一層肥盈し易いものであるから大抵十日間位の日數で充分肥滿するものである。

我國在來の鵞は年中産卵しない普通彼岸より彼岸まで即ち産卵期は凡半年間なる故に、從て産卵步合も尠いものであるが大阪地方にて改良したるもの所謂大阪鵞は四季を選まず産卵する故に或は採卵用に飼養しても相應に利益を得らるるものである、若し採卵を目的とするならば雄鵞を混じない方が却て多産するものである。

種鵞の飼養法　鵞は陸上に於ては充分に交尾を遂げ難きものであるから種鵞は水飼法にて養はなくてはならぬ、種鵞の飼料は蛋白質に富み成る可く脂肪の含量尠きものを選まなくてはならぬ、雌鵞に脂肪が增して來ると産卵しなくなり、又産卵前の雛鵞を肥滿さすると容易に産卵を始めぬものである。

種鵞は殊に體格の强大なるものを選み雌雄の配數は一雄五雌を程度とし寧ろ

雌數の少なきに過ぐるも過多ならぬ方がよい。

種卵の必要が無いときには鶩は何時でも隨意に休產さすることが出來る、其の法は先づ雌鶩の翼羽及尾羽を一本宛手にて拔き去り食餌を平常の半分以下に減少するのである、若し種卵の必要を生ずる場合には凡二週間程前より充分に食餌を給し且動物質を混じたる煉餌を夜間一回宛與ふるときは再び產卵を始めるものである。

鶩の種類　我國の在來種は所謂青頸と呼ばるゝ野鴨の馴養せられたものらしく之より二三の分化を生じて居る樣であるが然し大同小異である、歐米諸國に於ては異りたる野鴨を馴致改良して數多の變種を作成して居るが之又鷄種の如く發達して居らぬ左に之等の各種に就て其の概略を列記して置く。

大阪鶩

外觀は野生の青頸鴨と殆ど全く同じく只體格が大なるだけが異つて居る、雄は頸より頭部にかけて黑綠色の光輝ある羽毛を有し、翼羽の疊まりたる時には濃紫色の横紋が現はれる、上端の尾毛は背の方に捲き上つて居る嘴は鬱黃色、脚は眞黃

色を呈し外觀極めて美麗である雌は全身の羽毛が灰白色の地に褐色の斑紋を有し、嘴と脚とは雄と同樣である。

此種の變種に全身の羽毛雪白色のものがある、體格の大なること及び尾毛の捲縮して居ることによつて雄鶩を鑑別することが出來る、白色種は成長は稍遲緩であるが其の羽毛は高價に賣れるものである。

大阪鶩は季を選まず産卵し食餌豐富なるときは一ヶ年の産卵數二百箇に達する一箇の卵量は十八九匁乃至三十二三匁位である、體量は雄九百匁乃至一貫目雌は七百匁に達する。

アイルスベリー鶩

英國の原産でバツキングハム、シール州のアイルスベリー府附近に多く養はれ、よつて此名を得たるものであると云はれて居る、雄雌ともに羽毛は雪白色で嘴は淡き肉色脚は淡黄色を呈して居る。

此種は體質極めて强健にして成長頗る早く雛は五十日にて四五百匁となり、雄一貫二百匁雌一貫匁の體量に達する、孵化後五六ヶ月にて産卵を始め卵量二十匁

第四十六圖

アイルスミリー鶩

乃至二十六七匁、一ヶ年の產卵數百五六十箇より二百箇に達する、此種は性質溫和にして又在來種と異り抱卵に巧である。

ペキン鶩

外觀、性質、略アイルスベリーに類し特能も亦之に次ぐものである、此種は支那滿洲地方の原產で前世紀の後半歐洲に輸入せられ我國へも曾て輸入せられたことがあるが現今は殆ど其跡を絕つた樣である。

ローエン鶩

全體の羽毛の地は灰色なれども雄の背部は青色を帶び肩は茶褐色の斑紋を有し、翼羽は褐色の斑紋と黑色の帶條とを有し、尾羽は暗褐色を呈して居る、雌は全體の羽毛に黑斑を有する、雌雄ともに嘴は暗黃色、脚は橙黃色を有する。

此種は豐肉にして肉味も亦佳良である、體量は略アイルスベリーに匹敵して居

る、卵量は十七八匁乃至二十匁一ヶ年の產卵數凡百四五十個である。

カヨガ鵞

此種の原產地は北亞米利加のカヨガ湖であると稱せらる、全體の羽毛は帶褐黑色であるが雄は頸部白色翼羽は綠色を呈する、嘴脚は共に黃色である。

第四十七圖

ペキン鵞

此種は體質強健にして肥肉を有し殊に其の肉味は鵞種中最も佳良なるものと云はれて居るが體量卵量に於ては遙にアイルスベリーに劣るものである。

アスユヴキー鵞(バリケン)

支那中部及南部地方に多く養はれ支那にては之を廣東鵞と云つて居る、又盛に臺灣人に飼養せられ從つて臺灣鵞とも稱する。

此種に白色、黑色、黑白混交等の羽毛がある、後頸部に長き羽毛を有し翼羽、尾羽と

ともに長大である、黒色種は嘴、暗赤色にして眼は褐色を呈し白色種は嘴は肉色眼は鉛青色を呈する、又前額に赤色の肉瘤を有す。

此種は性質柔和にして他種の如く喧しく鳴聲を發することなく體量大なるは鶩種中本種が第一である。

東印度鶩

マスラーグド、ラブラドールなどと呼ばれ東印度の特産にして英吉利、佛蘭西等に於ても飼養せらる。

此種は外觀美しきが故に愛玩用として養はれるけれども産卵數尠なからず、肉味も亦佳良である、雄の羽毛は美しき濃綠色の光輝を有し雌は背と翼羽は綠色を呈し他部の羽毛は暗褐色である。

印度ランナー鶩

西印度の原産で鶩種中最も體軀の矮小なるものである、全身の羽毛は灰白色の淡き斑點を有し頸部は白色を呈する、嘴は黄綠色、脚は橙黄色である。

本種は雛の發育頗る早く平均四ケ月内外にて産卵を始め卵量は體量に比して

大きく產卵數も亦饒多である。

三 養鵞法

養鵞は養鷄とも又養鶩とも其の趣を異にして居る、何となれば鵞は鷄鶩の如く動物質を好まず專ら植物質の飼料にて養はれ、殊に綠草は其の最も嗜食する所であるからである、此の點より云へば養禽と云ふよりも寧ろ養畜に類して居るものである、故に放牧場或は附近に草地を有する屋敷にては何等の食餌を投與することなしに飼育することが出來る、我國にては未だ鵞の飼養は廣く行はれず只愛玩の爲め稀に飼養せらるゝに過ぎないが支那に於ては肉用として多く養はれ其他米國に於ても盛に飼養せらる。

鵞は又資性怜悧にして感應銳敏なるが故に、見馴れざる人或は動物を見出すときは頻りに叫聲を發して警戒を與へるものであるから、支那にては山間の農家にては番犬の代用に飼育することもある、且つ其の糞は蛇に有害であるから鵞を養つてある家の附近には蛇が寄り付かぬものであると昔の支那の書物に見えて居るが之は何かの迷信ではないかと思はれる。

孵化及育雛　鶩は就巣性を有し一期の産卵を終ると伏巣するものである。體大なるが故に一順に十五六個は優に抱き得るものであるが、普通は母鷄に託すると漸く四五個位のものである。孵化の日數は鷄と同じく二十八九日を要するものである。

育雛は鷄と略同じ樣で宜しいが動物の代りに新鮮なる青物を多量に給與することを要する。孵化後二三日の後には母鶩と共に綠草地に放ちて差支がないが、幼時は鶩雛よりも一層濕氣を厭ふが故に最初の間は朝露の充分乾燥せる後に宿舍から出さなくてはならぬ。

飼養法　成鶩は草地に放飼するか欄飼とするも清水と青菜を充分に投與するときは殆ど穀類を與へなくともよいものである。暑中溫和なものであるから欄飼となす場合には鷄と同じく低き外圍を造れば宜しい、宿舍其他は鷄と同樣である。

鶩は種類によりては二ヶ月にて體量八百匁より一貫匁に達するものであるから、一貫匁以上とならば肥膓法を用ひ肉用として販賣するのである。

鶩の肥膓法　は鷄の場合と同じ要領でよいのであるが元來鶩は肥肉性である

故に鶏程に良食餌を給しなくともよい但し運動は嚴禁しなくてはならぬ。

種鵞の飼養　雌雄の配數は一雄に五雌以下が適當である、鵞は陸上にても交尾し得れども無論水中に於ける方が安全である、種禽の食物は緑草の他糟粕類を與へ、米、甘藷の如き澱粉に富む肥料は成る可く禁じなくてはならぬ、斯の如き食餌を與ふるときは鵞は忽ち肥滿して産卵を始めずたとへ産卵しても無精卵多く、又は孵化力の弱いものである。

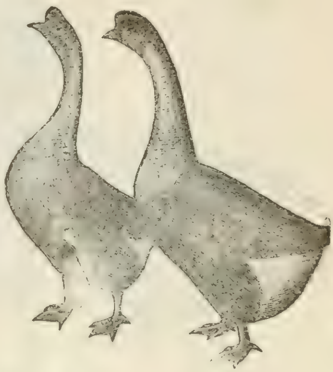
種鵞の年齢は雄は若齢にても可なれど雌鵞は三歳以上のものを選ぶ方雖は强健にて體格が大きくなるものである。

鵞の種類　鵞が野鴨より馴養せられた如く鵞は野生の雁の變化して家禽となつたものである、歐洲及支那にては上古より飼養せられ我國にては雄略天皇の朝に三韓から奉つたのが飼養の始であると傳へられて居る。

支那鵞

一名香港鵞とも稱し支那の原産である、全身の羽毛雪白色にて嘴と脚とは美なる橙黄色を有し嘴の根元前額部に大なる黄色の軟骨瘤を有して居る、其の頸極め

第四十八圖



褐色支那鵞

て長く羽毛は體に密着して容姿甚だ端麗である。

此種は鵞族中體量割合に少なく一貫五六百匁のものが普通である、卵量は四十匁内外にして若鵞は一二月の候老鵞は十二月末頃より産卵を始め一期に大抵二十卵位を産みて伏巣するものであるが産卵を殘らず取去るときは引續いて三四十卵を出すものである、雌雄ともに溫情深く雌の孵伏中は雄は戸外に佇立して之を衞りて遠く離れず雛の孵化するに及んでは雌雄ともに之を愛育するものである

此鵞の變種に野生の雁と羽毛の頗る類似した褐色のものがある、其の性質特能は白色種と全く同じである。

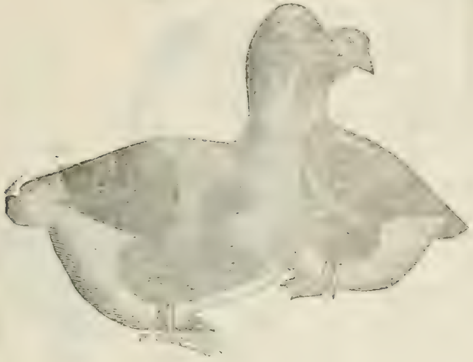
エンブデン鵞

原産地は普魯西であるが後に北部獨逸のエンブデン府附近に於て多く飼養せられたる結果此の名を得たわけである、鵞屬中體量の重きこと此種の右に出るも

のなく肥滿せるものにては往々四貫匁に達するものがある、全身の羽毛雪白色にて嘴は肉色脚は橙黄色を有する、雙眼の凸出して居ること、頭部の羽毛の捲縮せるとは本種の特色である脚は割合に短く體格圓く厚く肥滿せるものは腹部が地に達する、卵數は支那鵞に劣るも卵量は大きくして七十匁に達する。

ツーロース鵞

第四十九圖



ツーロース鵞

原産地は佛蘭西で同國ツーロース府附邊に於て多く飼養せられたるが故に此の名がある、此種も亦體格巨大にしてエンブデン鵞と伯仲の間にある、全身の羽毛は白色にして嘴は肉色脚は橙紅色を呈する、卵量産卵數ともにエンブデン鵞に略同じく肉味は更に佳良である。

エヂプト鵞

埃及の原産で同國ナイル河沿岸にて盛に養はれたるが故に一名ナイル鵞とも稱する、羽毛は背

部灰黒色にして脚部は淡灰色に暗紅色の星紋を有し翼羽半ば黒く半ば雪白色である尾羽黒く嘴白く脚は美黄色を呈す。

ポンメル鵞

此種は獨逸に於て盛に養はれ其肉を賞美する他鹹肉鵞脂等を製し且つ其の羽毛は裝飾用又は羽布團の原料として尠からず國外に輸出せられて居る。

此種の羽色に全身雪白、青白のもの又は白地に青色黄色、灰色、褐色等の斑紋を有するもの等の別がある、裝飾用羽毛としては獨逸人は最も青白色なるものを貴ぶと云ふ、何れも嘴は淡紅色、脚は橙黄色である。

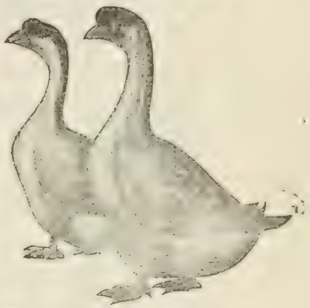
體量は極めて巨大にしてエンブデン鵞と伯仲し卵量又之に次ぐものである。

アフリカ鵞

亞弗利加洲南部地方の原産であるが現今にては歐米にも輸入せられて廣く飼養せられて居る、體量は二貫五六百匁に達し肉味佳良産卵數は一ヶ年三四十箇のものである。

此種は前額部に黒色の瘤を有し咽喉部の肉は嚢の如く垂れて居る全身の羽毛

の地は灰色にして頸部に褐色の線條を有する、嘴は黒く脚は暗橙色である。



第五十圖　アフリカ鵞

カナダ鵞

北亞米利加加奈陀の原産で次第に各國に飼養せられて居る。

此種は頭部より頸にかけ黒色を呈し、且つ咽喉部に白毛の頸環を有するは頗る奇觀である一體の上部の羽毛は灰褐色にして各羽は淡色の覆輪を有する、腹部に下るに從ひ漸次其色淡く遂に白色となる、翼羽及尾羽は共に黒色、嘴脚も亦黒色である、體量は割合に少なく普通雄は一貫七八百匁のものである。

再訂増補實驗養鷄法　終

再訂增補 實驗養鷄法 附水禽

—奥付—

明治四十一年十二月四日印刷
明治四十一年十二月七日發行
明治四十三年四月再版發行
大正二年三月五版發行
大正六年五月十版發行
大正六年十月十一版發行
大正七年八月十二版發行
大正九年三月十三版發行
大正九年十二月二十日十四版發行

著作權所有

著者 横山春平
東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行者 株式會社博文館
右代表者取締役社長 大橋進一
東京市神田區小川町一番地

印刷者 長谷川兵吉
東京市神田區小川町一番地

印刷所 愛善社

發行所 東京市日本橋區本石町三丁目
株式會社博文館

正價金壹圓八拾錢

可驚收益と趣味ある養蜂

實用
管理
養蜂十二ヶ月

四六判上製二八〇頁
寫眞版口繪及
木版畫挿入
正價壹圓廿錢
郵税六錢

東北農大教授 農學博士
橋本左五郎君校閲
諏訪蜂園主
諏訪末吉君著

著者は吾國唯一の蜂學者にして又實際家の白眉たり、凡そ蜂業に從ひ而して理想の結果を收めつゝある士は悉く諏訪氏の門生たらざるはなし、氏今や其の蘊蓄を盡して本書を公にし實際經營に係る微妙裡の消息を傳へ以て斯界に一大光明を與へんとす、行文平易、警句諧謔隨所に點在して再讀更に倦む所なし。養蜂に志す士は須らく一本を備へて實利の全きを期せよ。

諏訪末吉君著
實際養蜂

正價壹圓八拾錢
郵税拾錢

□□□ 博文館發行 □□□

松濤園養鷄場主　引田久治郎著

□□□□□□

廢物利用

家庭養鷄

全一冊

菊判洋裝二百余頁
口繪寫眞、彩色石版
其他挿畫二十餘枚
正價金壹圓
郵稅金六錢

近來養鷄熱の勃然として起り、頓に養鷄家の劇增を見るに至りたるは何んぞや、飼育の比較的簡易にして利益の大なるものあるが故に外ならずんばあらず、本書は專ら都鄙の家庭に養鷄を薦むるものにして、臺所の廢物を利用し、一坪、二坪の庭隅に能く數羽の鷄を飼ひ、新鮮なる玉子を朝夕の食膳に上せ得るの方法より更に鷄糞利用の途に至る迄著者が多年の實驗を說き盡して餘蘊なし。

農學士　横山春平著

再訂增補

實驗養鷄法

正價壹圓八十錢　郵稅拾八錢

□□　博文館發行　□□

類書中第一の翹楚

園藝叢書

農商務省興津園藝試驗場長 農學博士 恩田鐵彌君

實驗 苹果栽培法

大判洋裝三七三頁 石版寫眞版木版數十個
正價三圓二十錢
送料十二錢

農學博士 恩田鐵彌君 村松春太郎君 共著

實驗 柹栗栽培法

大判洋裝三五三頁 石版寫眞版木版數十個
正價三圓四十錢
送料十二錢

農學博士 恩田鐵彌君 草野計起君 共著

實驗 和洋梨栽培法

大判洋裝四七〇頁 石版寫眞版木版數十個
正價三圓八十錢
送料十二錢

農學博士 恩田鐵彌君 內田郁太君 共著

實驗 柑橘栽培法

大判洋裝七五四頁 石版寫眞版木版數十個
正價四圓八拾錢
送料十四錢

農學博士 恩田鐵彌君 喜田茂一郎君 共著

實驗 蔬菜不時栽培法

大判洋裝六四〇頁 石版寫眞版木版數十個
正價四圓六十錢
送料十四錢

博文館發行

University of British Columbia Library

DUE DATE

ET-6

ASIAN STUDIES
LIBRARY

THE
UNIVERSITY OF
BRITISH
COLUMBIA
LIBRARY

STORAGE ITEM
ASIAN

LPA - C56B
UBC LIBRARY